Mons†er Hun†er 2G Hun†er's requiem

神威 遙樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｏｎｓ†ｅｒ　Ｈｕｎ†ｅｒ　２Ｇ　Ｈｕｎ†ｅｒ'ｓ　ｒｅｑｕｉｅｍ

【Ｎコード】
Ｎ０９２５Ｋ

【作者名】
神威　遙樹

【あらすじ】
　舞い降りるは炎国の王。
東から昇る金の陽光を従えて、ゆらりと揺れる陽炎は忠実なる下僕。
誇り高き炎でその身を包み、天を焦がす。
その目は静かに彼の者達を映し、相対す。

　その者達は迎え撃つ。
得物を構え、覚悟を決めて。

大地を踏み締め心を鼓舞する。
ただただ、大切な者達を守る為に。

以前投稿した短編のリメイク版。
†はTのつもりです。

CERO：　舞い降りる王（前書き）

時は満ちた。
無慈悲な大気は淡々と震え、その咆哮を乗せてくる。
舞い降りるは炎国の王。
その業火は天を焦がし、大地を焼く。

さぁ、ハンター達よ、得物を構えろ心せよ。
強大なる王の牙が、汝のその身に迫る前に。

CERO：　舞い降りる王

日がまだ東の空から昇りきっていない時刻。
西の空はまだ薄暗く、いくつかの星が煌めいている。
そんな早朝もいいところな時間に、十数人の武骨な鎧や防具に身を包んだ者達が集まってきた。
ここは中継都市ヴィルマ。
大都市と大都市を繋ぐ重要な中継地点であり、交易ルートの要とも言っていい街だ。
そのヴィルマの街の中央に位置する広場に、その者達は集まってきた。

「……全員集まったか？」

その者達の中心、灰色のゴツい鎧に身を包み、巨大な剣を背負った者が周りを見渡しながら静かに訊いた。
声からして男か。
その男の問い掛けに対し、周りの者達は無言で頷く。
ヘルムにより顔が見えない者もいるが、中には女性も混じっているこの集団。
ハンターと呼ばれる者達である。
人間よりも遥かに巨大で強力なモンスターに挑み、打ち倒し、人々を守る事を生業にしている者達だ。
そんな彼らがまだ日も昇りきっていない時刻に、総勢十七名集まったのはわけがある。
今ここに、この街ヴィルマにかつて無い危機が迫っている。
彼らはその危機を脱する為に、命を懸けてここに集まったのだ。
中心にいる男が再度話し出す。
この男もヘルムで顔は見えないが、声だけで表情が分かる。

何か、腹をくくった声。
死を覚悟した声だ。

「……ジョナサン、欠伸をするな、気を抜けば死ぬぞ？　ヴェンは肩の力を抜け、気負い過ぎだ。イズミにリリス、お前達もだ。テラ、お前は逆にもっと緊張しろ。スネークとマイルズ、お前達には後方を任せる。しっかり頼むぞ」

時に周りを励まし、時に諫める。
無理に恐怖を払おうとする者には声を掛けて心を落ち着かせ、緊張感の無い者には注意をする。
どうやら彼がリーダーの様だ。

「基本は俺とジャン、サラで攻める。お前達の仕事は攻撃ではなく未だ避難出来ていない街の皆を避難させるのが最優先。避難させ次第、無理をせずに、慎重に俺達のバックアップを頼む」

周りが静かに頷くのを見て、リーダーらしき男はよしと呟く。
再度周りを見渡すと、一人だけ他の者達とは少し違った表情をした者がいた。
周りの仲間は皆緊張や不安そうな面持ちなのに、その者だけは男を心配そうに見てるのだ。
不安や緊張とはまた別な感じの表情。

「テリィア、どうかしたか？」

一角竜と呼ばれるモノブロスの素材をふんだんに使った深紅の防具を纏う女性、ティリア。
彼女の表情に疑問抱き、どうしたのかと男が訊いた。

「ゾルフさん、あまり無茶しないで下さいね」
「……善処しよう」

ティリアは物凄く心配そうな視線と声でリーダーらしき男――ゾルフに言う。
その優しい言葉にヘルムの中で実際のところ分からないが、ゾルフは少し、笑ったように答えた。

――少しだけ場の空気がほんわかと暖かくなるが、次の瞬間響いた音でそこにいる者達の表情が変わる。
ヒュゥゥと高い風切り音。
巨大な翼が上下に動く度に、暴風が巻き起こり低い羽音が轟く。
空気が唸る様なその音は、広場の中央にいるハンター達の正面の上空から聞こえる。
ハンター達が上を見た。
東から昇りきっていない太陽の金の光を後ろにつけて、燃え盛る紅蓮の巨体が降りてくる。

「……来るぞ。全員散開、まだ避難しきれていない住民に知らせてさっさと逃がせ、死ぬぞ！」
「アイ・マム」

ゾルフが背中に背負っている大剣を構えて指示を飛ばす。
直ぐに他のハンター達が応え、四方八方に散らばっていく。
それぞれの武器を構えたハンター達の目の前に、それは舞い降りた。
低い地鳴りの様な着地音。
それと同時に辺りの気温が一気に高くなる。

「グォォォァァァ！」

炎国の王が、中継都市ヴィルマに舞い降りた。

CERO：　舞い降りる王（後書き）

前の駄作短編のリメイク版。
結構マジです私。

UNO：　善は急げ

ドンドルマ。
それは大陸中央部に位置する大陸最大の都市の名だ。
街の至る所に対飛竜用の兵器が配置され、防衛機能抜群の大都市である。
だが至る所に兵器があっても街は街、石造りの家や建物に整備された石畳の道、風情は十分にある。
　そんな大都市ドンドルマにはモンスターから人々を守る者達、ハンターの総本山であるギルド本部が存在する。
それこそが“大都市”ドンドルマとは呼ばれず、“ハンターの街”ドンドルマと呼ばれる由縁である。
ギルド本部があるからか、それとも大陸中央部という場所の都合がいいからか、何はともあれここを拠点に活動するハンターは多く、数百人はいるとも言われている。
実際のところギルドの者のごくごく一部の者しか正確な数は知らないが、ともかく多い。
街を歩けば普通にモンスターの鱗や甲殻で作られた防具を着たハンターが歩いている程多い。
田舎者は必ず驚く程わんさかいる。
更には地方からも出稼ぎや何やらでやって来るハンター達がいるものだから、ギルドですら街にいるハンターの数は把握出来ていない。
風情はあるがパッと見は怖い街とも言える。
因みに治安は良くも悪くもない。
怖いというのはあくまでも『パッと見』である。
　そんな大都市且つハンターの街ドンドルマ。
その中でも一際巨大な建物が一つある。
石造りの壁は長大、見上げていると首を痛めるだろう。
『酒場』、そう呼ばれている建物である。

ただの酒場がこんなにデカイのか？
それは違う。
この酒場は主にハンター達が集い、依頼（クエスト）を受注するための施設でもあるのだ。
……元々は依頼を受注するためのだけの施設であったが、利便性を追求したらいつの間にか酒場になった。
それに伴い施設も巨大化、今に至る。
因みに酒場の上、上階にはハンター達が寝泊まりする部屋もあり、宿泊施設としての機能もある。
一般人も入れるが、殆どハンター専用と化してる建物だ。
　ハンターとは常日頃から『死』と隣り合わせの職業である。
人間よりも遥かに強大なモンスターに挑み、人々を守るために戦うからだ。
だからこそ無事に依頼を終えると直ぐに飲んで騒いでの宴をする。
生きている事が喜ばしくて。
そして宴をするからには陽気な声や歓喜の声、時に怒声なんかも響く、良くも悪くも毎日騒がしい場所、それが酒場だ。
　だが今日は様子がおかしい。
歓声も怒声も全く響かず、シーンと異様な静寂が酒場の中を支配している。
ハンターや客がいないわけではない。
むしろ沢山いる。
が、酒場の中にいるハンター達全員がある一点を見つめ、黙っているのだ。
見た目もまだ若い新米から屈強な手練れまで、一人たりとも例外はいない。
　そんなハンター達の視線の先にはカウンター。
料理を頼む時にも使うが、本来はクエスト受注の為のカウンター。
その前に二人のハンターが立っている。

「……もう一回言わせて下さい、俺達はクエストを成功させたから報告の為にここに来た。受注じゃなくて、報告です。つい二日前までG級の霞龍と仲良く殺し合ってたんです。それを知っててそれはないでしょう？」

カウンターに片肘をついてイライラとした雰囲気を纏う漆黒の髪と眼をした男性、というよりは青年という方が合っているか。

ともかく、その青年がぶっきらぼうに受付に言う。

人差し指でカウンターをコンコンコンと叩き、落ち着きが無い様に見える。

いや、見えるのではない。

眉間に皺を寄せている辺り完全にイラついている。

普通に考えればこのような青年ハンターが酒場に集うハンター達全員を黙らせる事は出来ないだろう。

が、この青年は出来ている。

理由は簡単、彼の纏う防具だ。

ハンターの身につける武器や防具はそのハンターの実力を無言で語る。

そして彼が纏う防具は大陸中を捜しても殆ど拝めない物。

伝説級の代物だ。

たとえベテランと言えど黙るしかない。

……もう一つ。

彼の放つプレッシャー。

人が放てる物ではない程の圧力。

冷たく鋭い、まるで刃の様だ。

「そんな事言われてもねぇ～。大長老様からの直々の依頼だし、断るの無理だと思うわ」

隣にいるハンターを除き、酒場にいるハンター全員を硬直させる

程の威圧感（プレッシャー）を放つ青年ハンターに受付嬢はサラリと答える。
どうやら彼女にもこのプレッシャーは効かないらしい。
仕方ないのよと困った顔はしているが、萎縮は全くしていない。
それこそ弟の我儘を聞いている姉の様だ。

「あの老いぼれめ、無茶を言う……」

大長老。
それはハンターの総本山であるギルドの頂点に君臨する者である。
その威光は王にも等しい。
というか、ハンター達にとっては王そのものである。
ハンターにとって王そのもの……なのだが、この青年ハンターはその大長老様をただの老いぼれ扱いである。
更には小声で「今度会ったら一発殴ろうか？」などと言う始末。
ハンターの常識から遥か彼方、空の果てまでぶっ飛んだ発言だ。

「確かに今すぐ行けっていうのは無茶だと私も思うわ。けど事態は深刻で、貴方達二人だけが頼りなの。だからお願い、ね？」
「……他にもいっぱいいるでしょう、それこそ剣聖ソードラントに言えばいい。ライザさんならそれぐらい分かるでしょう？」

お願いっと顔の前で両手を合わせ、小粋にウィンクする受付嬢ライザ。
その美貌は非の打ち所が無い。
ウィンクを受けた青年には何も効かなかったが、後ろでこのやり取りを見ている男ハンター達数人が悶えて倒れた。
苦しいのではない、ときめいているのだ。
周りの女性ハンター達の目線が厳しいが、そんなの彼らは気付いていない。

「如何に迅速に今回のクエストを成功させてこの緊急事態に終止符を打つか、貴方達以外に誰が出来るの。剣聖ソードラント？　ユーモアたっぷりね、悪い冗談にしか聞こえないわ」

剣聖ソードラント。

それは現在最強と謳われるハンターの集団である。

そのソードラントがすればいいという青年の提案をライザは顔の前で合わせていた手の片方をヒラヒラと振り、悪い冗談ねと一蹴した。

渋い顔をする青年。

休みたいんだと無言で主張するが、ライザには届かない。というか受け取ってもらえない。

少しだけ二人の会話が停止し、静寂が訪れた。

が、今までずっと青年の隣に立っていたもう一人のハンターが一歩前に出てそれを打ち破る。

長く煌めく金髪と空よりも蒼く、海よりも深い蒼の眼を持つ、美しく、そして同時に可憐な少女であった。

「も～、いいじゃん受けちゃおうよジン。今私達が話し合ってる間もあっちは大変なんだからね。依頼金も普通に高いし、断る理由が無いよ」

「流石シィちゃん、話が分かる～！」

おっとりした声で青年ハンター――ジンを諭し、クエスト受けま～すと軽い調子でシィと呼ばれた少女が言う。

ライザは流石と言ってむぎゅ～っとシィに抱き着き頭を撫でた。

……後ろでそれを見ていたハンター達がまた何人か悶絶して倒れた。

アホか。

「……しゃあないですね、受けますよ」

「よっ！　流石大将、やっぱり話が分かるじゃない！」

諦めた様にジンがボソリと言うと、ライザが一気に持ち上げる。
どうせこっちが折れるという事が分かっていたからに違いない。
ずっと前から何言うか考えてただろう？　と訊きたくなる程様々な言葉で持ち上げてくるではないか。
ちょっと折れた事に後悔するジン。

「そんじゃ決まったし、クエストにゴーだね！」
「馬鹿言え、まだ依頼書にサインしてねぇだろ。討伐対象が古龍とは聞いても古龍の何かも聞いてないし、場所がどこかも聞いてない」

右腕を掲げてレッツゴーと元気良く言うシィにジンが突っ込む。
まだ何もクエストの詳細を聞いてないのに、この馬鹿は一体どこへ行くつもりだったのか？
きっと何も考えずに適当に言ったに違いない。
いつもの事だが溜息が出るのは不可抗力。
慣れたと言えば慣れたが、やはり溜息は出るのだ。

「承りました。それじゃ、今回のクエストの内容ね」

二人がサインを書いた依頼書を受け取り、ライザが真剣な顔になる。
今までのテンションから考えると俄（にわか）に信じられない切り替えの早さだ。
だが、これがライザという女性なのだ。

「本日未明に中継都市ヴィルマにて炎王龍テオ・テスカトルが現れたそうよ。現在は街付きのハンター達が交戦中、古龍観測所によるとクエストレベルは上位。貴方達二人には至急ヴィルマに行って討伐してきてもらいたいの」

中継都市ヴィルマ。
それはここドンドルマと同じく大都市ミナガルテを結ぶ交易ルート上にある、名前の通り中継都市だ。
重要な中継ポイントとしてそこそこ栄えている街であり、ここが潰れると色々と厄介。
具体的には物資の回りが悪くなる。
そんな都市に現れたのは炎王龍テオ・テスカトル。
生態系をも逸脱した力を持つ古龍種の一つに数えられる超強力モンスターだ。
その身に炎を纏うモンスターで近付く者を容赦無く焼き払い、尚且つ燃え盛る強固な甲殻に体を包む。
更には雄々しく天を向く角と、鉄をも容易に切り裂き砕く牙と爪を持つ。
その燃え盛る鱗や甲殻は生半可な武器では傷一つ付かず、逆にその業火の一撃で消し炭にされる。
性格は物凄く荒い。
過去にいくつもの街を襲い壊滅させたという記録もある。

「……上位ですか？　なら街付きのハンターでも十分対処出来るんじゃ？」
「確かに上位に位置付けられてる辺り、古龍の中では弱い方ね。でも古龍よ？　G級程ではないけど上位の中でも最高位のランク、並のハンターじゃどれだけ集(たか)っても一緒なの」

モンスターのランクには三種類ある。
それは下位、上位、G級の三つである。
たとえ同じモンスターでも下位と上位では全然違うし、ましてやG級なんて挑めるハンターは本当にごくごく一部、極めて稀なのだ。
ただし、いくらG級のモンスターと言えど『同じモンスター』の中

では圧倒的に強いというだけであり、例えば初心者ハンターの登竜門とされる怪鳥イャンクックのG級はあくまでもイャンクック。空の王と言われる生態系最上位の火竜リオレウスの下位よりは弱い。
そして古龍の場合はどんなに弱くても上位に位置付けされる。
下位という概念が無いのである。
即ち下位モンスターを専門に狩るハンターには、例えそのハンターが下位のリオレウスを倒せど挑めない。
それほどまでに圧倒的な存在なのだ。
だからこそ大長老はジンとシィの二人を指名して向かわせる事にした。
なんせ街付きのハンターでは手に余る怪物だから。

「……なら他のG級ハンターを送れば――」
「はい、もういいから行こーよジン！　早く到着しないと大変な事になっちゃうよ。ほら、よく言うじゃん、急がば回れって！」
「――……回ってどうする？　善は急げの間違いだろ」
「そうそれ！」

やっぱり納得がいかないジンだが、シィが会話を割って強制終了。
言う言葉こそ間違えたが的は射た発言だ。
ジンもそれ以上のボヤキを止めてしゃあねぇと割り切った。
ジンが割り切ったのを感じ取ったシィは今まで前のカウンターに置いていた金のキャップを頭に被り、ゴーグルを上に掛けるのだが……

「……あり？　なんかしっくり来ないな～？」
「アホか、キャップの前後が逆だ」
「おぉっ……！」

何故かしっくり来ないゴーグルに首を傾げる。

そんなシィを見て溜息一つ、ジンがシィのおでこをチョンっと軽く一発小突きながら指摘する。
小突かれたおでこを撫でながら、シィはキャップを被り直し、しっかりと収まったゴーグルを見て満足そうにする。
ジンは心の底から何故こいつがハンターになったのか疑問に思う。
普通はいない、自分の装備の前後が分からない奴は。

「それ、レッツゴー！　……のわわっ！？」

ゴーグルもしっくり来たし、テンションを上げてシィが元気良く歩き出すが、僅か三歩で躓いて転けた。
別に足下には何も無い。
要するに自分の足に引っ掛かった事になる。
ビダンッと渇いた音が酒場に響く。
ジンは心の底でなんで自分はこいつをパートナーにしたのか自問する。

「……しっかり足下見ろ、子供かお前は」
「うぇぇぇ～、鼻打った～」

少し赤くなった鼻を擦りながらシィがジンに飛び付く。
やれやれと首を振りながらジンは介抱するが、やっぱりハンターには見えないパートナーを見て溜息が止まらない。
……一応同い年なのだが、これじゃあ兄妹だ。

「……夫婦漫才もいいけど、結構事態は深刻だから早めにお願いね」

苦笑いをしながらカウンターの向こうでライザが言う。
今現在この酒場で二人に突っ込みを入れれるのは彼女のみである。
こんなアホらしいやり取りをしているが、この二人は何万といるハ

ンターの頂点に君臨するハンターなのだ。
なので元々二人と仲が良く、尚且つ誰が相手でも普通に話せるライザ以外は未だに沈黙を守っている。
まぁ……何人かは悶えて倒れたが。

「分かってますよ。後別に嫁じゃないです」

同じく苦笑いをしてジンが言葉を返す。
カウンターに置いていた赤い羽の様な物がついた銀のヘルムを片手にぶら下げ、ガチャガチャと纏った防具を鳴らしてしがみついてるシィを引き剥がし、腕を掴んで引っ張って行く。

「シィちゃんの武器はそれでいいの、分が悪いわよ？」
「大丈夫です。それにわざわざ代えに行く暇無いでしょう？」

シィの背負っている武器を見て心配そうにライザが訊くが、ジンは大丈夫と言って笑う。
直ぐに帰ってきますと言って裏口に向かって歩いて行く。
その背中を見ながらポツリとライザが呟いた。

「……無理言ってゴメンね」

酒場の裏口を出れば直ぐにギルドが貸し出す竜車や船がある。
迅速にクエストへ出発出来る様にする為だ。
普段ならば竜車を使ってクエストに行くのだが、今回は緊急事態、速度を考慮して移動は馬にする。

その分爆弾の様な大型の補助アイテムは持って行けないが、仕方ないだろう。
　ジンは適当に二頭の馬を選び、自分の装備と持っているアイテムを確認する。
同じようにアイテムの数や何か忘れた物が無いか確認するシィだが、アイテムの入ったポーチの中を見て「あり？」っと首を傾げた。

「……どうした？」
「回復薬が無いの、忘れちゃった♪」

　回復薬とはモンスターから受けたダメージを文字通り回復させる薬だ。
命懸けで戦うハンターにとって必需品と言える。
それを忘れたらしい。
やっちゃったと笑うシィ。
ジンは本日最大の溜息をして、語気を強めて言い放った。

「アホか、さっさと買いに行け！」
「はいぃぃぃ！」

　ジンは普段あまり怒鳴らない。
だからこそ珍しく怒鳴ると物凄く怖い。
それこそ炎王龍テオ・テスカトルにも負けないぐらい怖い。
流石のシィも情けない声を上げながら全速力で回復薬を買いに走った。

「……なんでハンターになったんだあいつは？」

　普段はおっとりとしていて、尚且つ抜けていて天然。
よくドジもすれば直ぐに転ける。

全然ハンターには向いていない様に見える。
が、何故かハンター。
しかも一年半前、女性ハンター史上最速、史上最年少の十七歳でG級ハンターに上り詰めた猛者。
パッと見だけなら天然少女。だが実は世間からは『月光（ルナ）』だの『女神の射手』と呼ばれる名実共に英雄クラスのハンター。
本当に人は見掛けによらない。
十人が十人、シィの見た目に騙される。
シィをナンパしにやって来るハンター達は皆、気が付けば床や天井に突き刺さって意識というか魂は川を半分渡る。
見た目は見た目だがG級ハンターだ、基礎能力も異常に高い。
未だにあのスプーン以上の重さを持った事がなさそうな細腕からあんな力が出てくるのか、謎だ。
人類永遠の謎である。

「……はぁ。事態は火急ってのにのんびりし過ぎだよなぁ、俺ら」

移動するために使う馬は既に隣にスタンバイ。
しかしそれに乗る肝心のハンターがいなければ、本末転倒もいいとこだ。
今現在も炎王龍が暴れ回っているヴィルマは大丈夫だろうか？
何度か立ち寄った事がある街だが、対古龍兵器なんて気の利いた物は無かった筈だ。
街付きのハンターに知り合いは……いない。
どれぐらいの実力者達がいるのか分からない。
最悪の場合、到着したら壊滅してたという事もあるだろう。

「……早くしろあのボケがぁっ！」
「ひぃっ！？」

積もり積もったイライラがジンの沸点を突破する。
少し日は空いてるし、G級と上位の差はあれど一応古龍と連戦である。
しかも街一つの運命を背負ってるときた、やけ酒でも煽りたくなるが、酒は苦手だ。
取り敢えず叫ぶ。
　すると何故か反応が返ってきた。
シィにしては早すぎる。
あのお惚(とぼ)け天然娘はそんなに素早く回復薬を買ってこれる筈が無い。
少なくとも片道三回は道中に転けている。
　冷静になって目の前を見るよりも、横からあまり嬉しくない気配が迫ってきた。
咄嗟にしゃがみ、腰に挿してるナイフを横に突き出す。

「……ハンターが人に武器使うのは御法度だぞ、気を付けろ」
「……！」

　真横にいたのは太刀を持ち、眼帯をした隻眼の少女。否、美少女と言える。
老山龍という古龍の素材から作る防具、凛シリーズを身に纏っている辺り、そこそこの実力者だろう。
　喉元に突き付けられたナイフ（素材剥ぎ取り用）のせいで動けなくなり、渋い顔をしているが、目だけは尚鋭い。
何か恨まれる様な事をこの子にしたかと首を傾げるが、何も思い付かない。
そもそもこの子誰だ？　謎は深まる。

「……御法度も何も関係無い。貴様はクリュウを驚かせた」
「クリュウ？」

前を見るとそこには鮮やかな紅蓮のレウスシリーズという防具を身に着けた少年が立っていた。
顔の造形が女の子っぽいのと防具とは対照的な鮮やかな若草色の髪が特徴か。

「さ、サクラ！？　いきなり何してるんだよ！？」
「……クリュウを驚かせた。これはどんな罪よりも重い重罪、万死に値する」

一瞬今の出来事についていけてなかった様子だったが、慌てて少年が隻眼の少女とジンの間に割って入った。
だが少女は動じない。
なんと言うか、我が道を突っ走ってる。

「その程度でっ！？」
「……十分な理由」
「いやいやいや、絶対におかしいからねっ！？　今のは冗談抜きで下手したら本当にこの人死んでたからねっ！？」
「……むしろ今生きている事に感謝してほしいくらい」

何を言われても動じないサクラと呼ばれた少女だが、何度も少年、確かクリュウといったか、の言葉を聞いて渋々太刀を鞘にしまう。
それを見てジンも喉元に突き付けていたナイフを腰に挿し戻す。

「ほんっっっとうにすいません！」
「……いや、なんか俺も君を驚かせたみたいで悪かった」
「……そうだ、貴様が悪い」
「さ、サクラァ！」

この眼帯少女、親の敵とばかりにジンを睨む。

それはもう、モンスターと呼ぶに相応しい。
こいつはヤバそうだ。
ジンはシィと違い空気は読める。
謝るのが得策と見てすまなかったと謝ろうと頭を下げようとしたところで更なる乱入者登場。

「……クリュウ様、一体どうなされたのですか？」
「公共の往来で何をやってるのだお前達は……」

いつの間にか側に立っていたのは桃色の防具、リオハートシリーズを着ている金髪の少女と蒼い防具、このクリュウという少年が纏うレウスシリーズに必要な火竜リオレウス。
その亜種である蒼いリオレウスの素材を使った防具、リオソウルシリーズを纏った銀髪の少女。
確かに太刀を鞘に戻したとはいえ未だに柄を握り、親の敵とばかりにジンを睨み付けるサクラと、その間で困ってるクリュウを端目から見ると変だろう。

「おっ、君は確か……」

現れた二人のうち一人はジンの知り合い、とまではいかないがともかく知ってる顔であった。
美しい銀髪と蒼いリオソウルシリーズのコントラスト、綺麗なので忘れる筈はない。

「剣聖ソードラントのシルフィードさん、だな？」

あっている自信はあるが、万が一外すと格好がつかないので最後は疑問系である。
それに剣聖ソードラントに身を置く彼女が何故この子達といるのか

も分からない。
見た感じそこそこの実力はあるだろうが、ソードラントに入るにはまだ若い気もする。
見習いか？

「確かに私はシルフィードだが、どこかで貴方にお会いしたかな？」
「あぁいや、覚えてないなら構わない。それよりも何故この子達といる？　ソードラント見習いか？」

火竜と呼ばれる番の竜、リオレウスとリオレイア、更には古龍の一角である老山龍の防具、凛シリーズを身に付けている辺り、見習いと見るのが妥当な筈だが、サクラという少女の視線が更に険しくなった気がする。
いや、間違いなく険しくなった。

「……私はあれから抜けたのだ。今は彼らがチームメイトさ」
「抜けた、ソードラントから？　へぇ、面白い事する子もいたもんだ」

現在最強と謳われるソードラントから自ら抜けるとは中々思いきった事をする。
そういう奴は嫌いじゃない。

「えっと……シルフィと知り合いなんですか？」
「シルフィ？　あぁシルフィードさんとか。まぁ一応顔見知りって事になるんだが、彼女は覚えていないらしい。まぁあの時と今とじゃ装備してる防具も武器も違うからな、しゃあねぇさ」

小柄なクリュウという少年に対してジンの背は高い。
自然に見上げる様にして質問してきた。

まぁ『一応』そうだと言っておくと、シルフィードが「忘れてすまない」と謝ってくるのでフォローも入れる。
相棒（シィ）だってよく知ってる筈の人の名前や、酷いときには存在自体忘れてる。
多分、ジンや家族、故郷の人達を除けばちゃんと覚えてるのはライザぐらいだ。
それに比べたら遥かにマシだろう。

「へぇ～。という事はやっぱり凄いハンターなんですよね？　防具を見たら分かります」
「んな大層なもんでもないさ。ところで君達、名前は？　蒼銀の烈風がソードラントを捨ててチームに選んだんだ、興味深い」

蒼銀の烈風とはシルフィードの通り名である。
見た目通りでこれほど親切な通り名もそうそう無い気がするのは秘密だ。
なんせ自分の通り名は『千手』、シィは『女神の射手』。
名は体を表すと言うが、その通りならジンは腕が千本ある事になる。
……これではハンターではなくモンスターだ。
狩人ではなく狩られる対象ではないか。

「クリュウ、クリュウ・ルナリーフです。ほら、皆も！」
「ルナリーフ……！？」

真っ先に名乗ってくれたのは若草色の髪をした少年。
よろしくお願いしますと礼儀正しくお辞儀をしてくれる。
だが、ジンはそれよりも彼の名字が引っ掛かった。
……ルナリーフ。

「……人に名乗らせるには先ず自分から名乗るべき」

「サクラァ……！」

ずーっとジンを睨みっぱなしの少女、もう『サクラ』って名前は覚えてしまったが、確かに言う事は正論か。
クリュウは困った様に声を上げるがジンは確かにと笑う。

「そうだ、確かに正論だ。俺はジン、ジン・フォルクス。見た通りしがないハンターだ。さて、俺は名乗った、君達の名を改めて訊こう」

自分の胸を指差して笑いながらジンが名乗る。
『千手』という異名を言わなかったのは目立つのが好きではないからだ。
再び少女達を見る。

「私はフィーリア・レヴェリと言います。よろしくお願いします」

ペコリとお辞儀をした少女はリオハートシリーズに身を包んだ少女。
ライトボウガンを持っているし、ガンナーだろう。
髪の色なんかを見て、少しシィと被るがシィは残念ながらこんなに礼儀正しくない。
取り換えたいなとこっそり思う。

「……サクラ・ハルカゼ」

未だにジンを睨み続ける隻眼の少女。もうサクラという名前は覚えていたが、名字はハルカゼというらしい。
名前からして別の大陸からきた子だろう。

「成程な、『桜花姫』に『隻眼の人形姫』、シルフィードさんが選ぶだけの事はあるな」

名前を聞いて気が付いた。この少女二人は最近巷で話題の将来有望のルーキーだ。

成程シルフィードの選んだ理由が分かる。

逸材ではないか。

……それに、ルナリーフ。

「つかぬことを訊くが、クリュウ君、君はどこ出身だ？」

「え？」

彼の答えによれば自分は余程のチームを見つけた事になる。

話題のルーキー二人に名実共に有名なシルフィード。

あとは、彼だけだ。

「イージス村、って言っても分からないですよね。辺境の田舎です」

「そうか？　旨い飯屋があると聞くが」

田舎者で恥ずかしいですと笑うクリュウにそっとフォローを入れながら、内心ジンはニヤリと笑った。

……ビンゴ。

『あの人達』の息子と見て間違いはないだろう。

この少年は、今は知らないが将来は大きく空へ羽ばたく。翔るぞ、高みを。

少し高鳴る鼓動を抑え、もう一つ気になった事を訊くために桜花姫フィーリアの方を振り返る。

「……フィーリアちゃん、名字はレヴェリと言ったね？　今俺がイメージしてるハンターは、君の姉でいいのかな？」

「はい……多分そうです」

苦笑いと共にフィーリアに訊くジンの表情を見て、フィーリアも同じく似た様な苦笑いで返す。

「……あの人の妹がこんなに礼儀正しい子とは、世界の神秘だな」

感慨深げに言うジンに、フィーリアはアハハと渇いた笑いしか返せない。

そりゃ姉と自分の性格の差は天と地ほど離れてる。

そう言われても仕方がないと言えば仕方がない。

特に、長子を知らないのならとフィーリアは思う。

別に姉を馬鹿にしてるわけでもなく、ただあまりの性格の違いに驚いてるだけなのだ。

「姉から常々話は聞いています、フォルクス様。貴方が――」

「ストップ。それは言わなくて結構だ、目立つのは嫌いでね」

フィーリアが何かを言おうとするが、ジンが割って入って強制終了。

二度目だが、ジンは目立つのが嫌いなのだ。

その通り名は不本意だが、有名らしいので言ってほしくない。

ジンの名前を聞き、フィーリアが何かを言おうとしたので思い出したのか、あぁと言ったシルフィードも目で制す。

「へぇ、フィーリアってジンさんと知り合いなんだ！」

「いえ、姉の知り合いですよ」

目立ちたくはないのだが、防具が目立ってしまうのはハンターの性か。

一応、世間一般的には凄い防具を纏うジンと普通に会話をするフィーリアにクリュウが驚きと、少しの尊敬の念が籠った声で言うが、フィーリアは姉のと謙遜する。
まぁ確かに事実、姉の知り合いでありフィーリアの知り合いではなかったのだが。

「……それよりも、貴様よく私の攻撃を躱したな」
「あれだけ殺気が込められた攻撃なら誰でも気付くぞ」

あれは大変だ。
まさしく獣の殺気だった。
少しクリュウをビックリさせてしまっただけなのに、あんなのぶつけられたら困るとジンは思う。
しかも故意じゃないし。
……そして、そろそろ太刀の柄を握るのを止めてほしいとも思う。
……ついでにもう一つ、ある事に気が付いた。

「ハァ……」
「……！」

ジンが溜息一つ、一気に地面を蹴って加速する。
サクラは一瞬遅れて反応し、太刀を鞘から抜こうとするが遅い。
ジンは既にサクラの後ろに行っている。

「……何お前も武器構えてんだ阿呆」
「うみゃ！？　だってだって、凄いこの子ジン睨んでたし！」
「そんな理由で気配を殺して弓構えて近付いてきたのか？」

ジンはサクラに攻撃するわけもなく、サクラの死角から弓を構えてせまる阿呆（シィ）の頭を思いっきり叩いた。

誰にも気付かれる事なくここまで間合いを詰めたのは褒めてやるが、いかんせん目的が目的だ。
ルールは守る物だ、破る物ではない。
いきなりのジンの行動とその速さ、ついでにシィの乱入により周りにいるクリュウ達、今しがた太刀を鞘から抜こうとしていたサクラでさえ固まる。
当たり前か。

「いやすまない、こいつは一応俺の相棒（パートナー）のシィ・シャネルだ。ほら、ちゃんと挨拶する！」
「一応じゃないもん！　生まれてからずっと一緒だもん！」
「いいから挨拶、シルフィードさんは覚えているか？」
「……う～ん、誰？　痛ぁっ！？　挨拶？　うぅ……こんにちは」

ジンに言い返すが何度も頭を叩かれて結局痴話喧嘩の様な会話はジンの勝ち。
シィは自分の頭を撫でながら、涙目でペコリと頭を下げる。
……何故防具であるキャップを被っていてそんなに痛がるのか？
ペコリと頭を下げたシィに、礼儀正しいクリュウは反射的にこちらこそとお辞儀をする。
シィとは違う、素晴らしい少年である。

「……で、買ってきたのか？」
「勿論！　はいこれジンの分。元気ドリンコ少なくなってきてたでしょ？」
「……何故俺の持っている物はそんなに詳しい？」

人のアイテム把握する前に自分のアイテムを把握しろと思う。
エヘンと胸を張るシィだが、ジンは相変わらず溜息しか出ない。
シィの私生活で褒めれるのは料理だけ。

他はてんでダメなのだ。

「さてと、クリュウ君達もクエストか？」
「いえ、僕達は村に帰るところですよ」

帰ったらまた飛び蹴りが待ってますとクリュウは苦笑いをする。
……この子は一体どんな私生活をしているのだ？
なんだ、帰ったら飛び蹴りが待ってるって。
するとサクラがクリュウにスッと寄り添い、「……大丈夫、私がクリュウの側にいる」という突っ込み所満載な台詞はこの際無視しよう。
それにサクラのその言葉を聞いたフィーリアも「私だって！」と突っ掛かるは、地味にシルフィードもクリュウとの距離を縮めてるだの、何故か桃色の空気が漂い始めた。
……なんかこのチームの形が見えてきたと思うジンである。

「それじゃあお別れだ、俺達はクエストなんでな」
「そうですか。また会えるといいですね」
「……そのままくたばればいい」
「さ、サクラァッ！」

にこやかに、爽やかに別れ言葉を言ってみたが、サクラの言葉で台無しだ。
生憎ジンは今回のクエストでくたばる気など無いが、流石に苦笑いが漏れる。

「悪いが俺はしぶといぞ、また暇があったらイージス村に行ってみるよ」
「そうですか、歓迎しますよ！」
「……村の前の階段から転げ落ちて死ねばいい」

呪詛の如くおぞましい言葉の攻撃を仕掛けてくるサクラをスルーして、踵を返す。
数分間後ろ手にクリュウ達に手を振り、やっと待機していた馬に乗る時がきた。
暇そうに草を食(は)んでるが、今からは忙しくなるぞ馬。

「ジン、楽しそうだね」
「……かもな。いい雛を見つけた、いつか空を雄々しく翔るぞ」

よっと馬に跨がる。
シィも同じく馬に乗り、不思議そうにジンに問い掛ける。
ジンはフッと笑って肩を二三回回し、後ろにいるシィを見る。

「大幅タイムロス、休み無しだ」
「うへぇ～、お尻が痛くなるよ」
「『善は急げ』、だろ？」

未だに片手にぶら下げていた銀のヘルムを被る。
その顔は今までのどの顔よりも鋭く、冷たい狩人の顔である。

「全滅してない事を神に祈ろうか」
「責任感じちゃうもんね～」

馬の腹を軽く蹴り、一気に大地を駆けていく。
蹄が大地を抉り、土を後ろに巻き上げる。
……ヴィルマへ向けて、二人が出発した瞬間である。

ＵＮＯ：　善は急げ（後書き）

初めましての方は初めまして。
いつもの方はいつもありがとうございます。
神威です。
リメイク版、モンハン作品。
基本的にはリメイク前と変わりませんが、描写やイベントを大幅加筆。
色々詰め込む予定です。
取り敢えず、黒鉄先生、こんな感じでよろしいでしょうか？
黒鉄先生の『モンスターハンター～恋姫狩人物語～』と連動しているため、先に読んでおくといいかもしれません。
……一話でコラボは終わりましたがね。
それでは！
なるべく速く更新します。

ＤＯＳ：　片道切符（前書き）

揺らめく炎に影一つ。
夏の火に飛び込んだ蛍はもう帰らない。
いくら願おうと。

DOS：片道切符

街の建物に深紅の炎が絡み付き、灰にし、崩していく。
太陽は南の空高くまで昇り、彼の者達を明るく照らす。
だが照らされた者達は顔いっぱいに汗にまみれ、苦しそうな顔をしている。
所々焼け焦げた防具、刃先の欠けた武器。
戦闘は激化するが、一方的。
十七人という、普通なら四人までのチームを組むハンターにとっては異例の大人数で攻めているというのに相手はまるでダメージなど無い様に速く、鋭く動き回り、ハンター達を苦しめる。
その一撃一撃が致命的な威力を持ち、その殆どが下位ハンターのチームを崩す。
近付けば纏う炎にその身を焦がされ、動きが鈍れば引き裂かれ、咬み千切られ、命を消される。
幸いまだ誰も犠牲にはなっていないが、時間の問題か。
全滅という最悪の未来とて十分にあり得る。

「……っ！　くそが、まるで効いてねぇぞ化物め！」
「スネーク、愚痴はいいからまだ避難出来てねぇ人探すぞ！　ここはゾルフさん達に任せるべきだ！」

迫り来る紅蓮の巨体を身を投げ出して回避し、自らの得物をしまって走る。
“やつ”の方が動きは速いので後方を確認しながら、スネークと共に逃げる。
“やつ”がこちら側を向いた瞬間、ゾルフが雄叫びを上げながら大剣を“やつ”の顔面に叩き付ける。
切り裂くとまではいかないが、少しは血が散る。

渾身の力であの量しか血が出ず、尚且つその圧倒的な回復力で直ぐに傷が塞がるのは恐ろしい。

「やぁぁぁっ！」

更にゾルフの反対側から同じく“やつ”の顔面に巨大なハンマーが撃ち込まれた。
ヴィルマの街に三人いる上位ハンターの中の一人、サラだ。
因みにゾルフも上位ハンターである。

「まだ全員避難したとは聞いてないわ！　スネークもマイルズも、全力で探してちょうだい！」

サラが二人に叫びながらハンマーを振るう。
無骨でシンプルな形状だが、その破壊力は絶大。
ゾルフの大剣の様に『切り裂く』のではなく『叩き潰す』武器ハンマー。
銘を大鬼鉄（おおおにくろがね）という。
強固な甲殻に身を包む“やつ”にどれぐらい効くのかは分からないが、その猛攻に“やつ”はたまらず後ろへ退いた。

「……くそっ、役に立ててねぇ。ゾルフさんやサラさんに任せっぱなしだ」
「言うなスネーク、そう思うんだったら早く全員避難したかどうか確認してゾルフさん達に加勢するぞ！」

綺麗に整備されていた筈の石畳はこの戦闘で既にガタガタ。
時々上から崩れた建物の破片が落ちてきたり、炎に包まれる建物を避けたりしながら街中を回る。
パッと見ただけなら人気などある筈も無いが、いかんせん“やつ”

が来たのは早朝で、警鐘は鳴らしに鳴らしまくったが逃げ遅れた人もいる。
そんな人達は決まって物陰に隠れじっとしている。
これがただのモンスターならまだいいかもしれないが、相手はあの炎王龍。
見つからなくとも纏う炎が建物に火をつけ、隠れたままなら焼け死ぬ。
それに、煙も危険だ。
だからこそマイルズ達はいち早くそういう者達を発見、保護、避難させなければいけない。
何度か避難場所である近くの丘陵地帯に逃げ遅れた人達を送ったらしい、仲間のハンターのリリス曰くまだ十数人足りないそうだ。

「マイルズ！」
「……リリス、とイズミか」

向こう側から走って来たのは赤い長衣（ローブ）の様な防具、フルフルDシリーズを纏った少女、双剣使いのリリスと、同じように赤い色をしているが、もっと見た目が可愛いザザミシリーズという防具を着た太刀使いのイズミ。
さっきから逃げ遅れた人達の殆どは彼女達二人が保護している。

「どう、誰かいた？」
「……全然だ、炎が街中に回って上手い様に動けないのも痛いな」

逃げ遅れた人達は中々見つからない。
隠れているから当たり前だが、こちらの呼び掛けには応えて欲しいところだ。
正直、面倒なのだ。

「どうだスネーク、ここら辺にいるか？」
「ぜんっぜん、人影一つ見当たらねぇな。紙の入れ物にでも入って隠れてるのか？」
「……皆、代わりに嫌なの来たよ！」

前方をグルーッと見回しながらスネークがのんびり言う。
崩れたり、焼け焦げた壁や石畳は最早元の形など分からない。
ただの炭と化している。
さてどうするかと首を捻ったところで、後ろを見ていたイズミが悲鳴の様な大きな声を上げ、一気にマイルズとスネークの横を駆け抜けて行った。
ちゃっかりリリスもイズミと一緒に走っている。

「……まさかな」
「……こういう運は俺達あるよな」

後ろにあった建物を蹴散らし焼き払い、“やつ”が現れた。
理性があるのか知らないが、ともかく今目の前にいるマイルズとスネークは敵と判断したのだろう。
牙を剥き、物凄い速さでボロボロになった石畳を抉り、更にボロボロにしながらこっちへ来る。

「これは洒落にならねぇぇぇ！」
「走れ、ともかく走れスネーク！」

情けないが敵前逃亡。
しかもそれすらままならない。
横にダイブして紙一重で躱せたが、下は元石畳の地面。滑る度に少し痛い。
だが、目前に、いや、つい今しがた真横を通り過ぎた『死』よりは

遥かにマシだろう。
すかさず立ち上がり、やっぱり情けないが逃げの体勢に入る。
隣のスネークも同じだ。

「二人共、逃げろ！　ここは俺が請け負った！」

まだどうにか健在な建物の屋根の上からヘビーボウガンを構え、連続で発射するのはこの街三人目の上位ハンター、ジャン。
鎌蟹と呼ばれるモンスターから取れる素材を使った青くて鋭利な感じのデザインなギザミSシリーズに身を包み、同じく鎌蟹からの素材で作ったヘビィピアースクラブというヘビーボウガンを操るハンターだ。
そんなジャンは屋根の上から“やつ”に向かって撃ちまくる。
装填された弾は貫通弾ＬＶ２。
名前の通り相手を貫く事に特化した弾丸だが、相手が相手だからか、中々貫きはしない。
が、それでも気をマイルズ達から逸らすのには十分か。
“やつ”は上から鬱陶しい攻撃を仕掛けてくるジャンを見上げた。
そして一度、素早く四本の足をたわめ、一気に屋根の前まで飛び上がり、羽を羽ばたかせて宙に浮く。

「……冗談キツイな」

空中で停止した“やつ”は首をもたげ、ジャンの方へ炎を吐き出した。
その直前にジャンは下へ飛び降り、事なきを得たが危なかった。
少しでも反応が遅れていたら今頃炭だ。
だが、安心するのはまだ早い。
“やつ”は炎を吐き出しながらジャンの方を向き、羽ばたきながら迫ってくる。

それも首を少し左右に振り、ついでとばかりに未だに建ち残っていた建物を焼き払いながら。

「うぉぉぉっ！？　死ぬっ！　これは反則だろ！？」

迫る炎を背中越しに見ながらジャンが走る。
自分の後ろに灼熱の炎が迫り、さっきまでまだ石畳っぽさのあった地面は焦げて炭になる。
ジャンが走った軌跡はそれを追う炎が同じく走り、真っ黒焦げの線になる。

「ラァッ！」
「ゴォォッ！？」

空を飛びながら炎を吐き続け、街を燃やす“やつ”。
ボロボロになった建物の瓦礫を立て続けに蹴り、ゾルフが宙を舞う。
“やつ”の背後から思いっきり抜刀した大剣を斬りつけ、“やつ”の背中から血飛沫が少量飛ぶ。
それでやっと、なんとか炎を吐かすのを止めさせた。
大剣はその威力の代わりにに重い。
空中で斬撃を放ったのは見事だが、その反動、振り下ろした大剣の遠心力でゾルフはまともに受身も取れずに地面へ激突。
その瞬間、“やつ”から目が離れる。
――それが、この狩場（せんじょう）と化した街（ヴィルマ）での命取りとなる。
すかさずゾルフが立ち上がるが、目の前には紅蓮の巨体。
身が凍る。
これはヤバい。
だが、天はまだゾルフを見放してはいない。

「ゾルフさんから離れなさい！」

怒号と共に銃弾が風雨の如く吹き荒れる。
ライトボウガンを握ったティリアが焼け焦げて穴の空いた建物の中から現れたのだ。
一発一発は微々たる威力だが、その全てが顔に飛んでくるのは流石の炎王龍とて堪らない。
グゥと唸る様な声を上げて羽ばたき、一度高度を上げ、街の西の方へ飛んでいった。

「大丈夫ですかっ！？」

ティリアのお陰でなんとか無事だったゾルフ。
大きく息を吐いてホッとする。
殉職が普通にあり得るハンターだが、やはり『死』の恐怖は拭いきれない。
駆け寄って来るティリアにありがとうと感謝の言葉を伝え、愛剣、真・竜ノ顎を背中に戻す。
“やつ”との戦闘でボロボロだ。終わったら鍛治屋に直行しなければいけないだろう。

「……あっぶねぇ、俺もお前も死んでたかもな。しかしゾルフ、お前そんなアクロバットな攻撃するんだな、常識はずれもいいところだ。もうちょっと自分の事も考えろよ、まぁそのお陰で俺は今生きてるんだが」
「……昔ドンドルマで会った少年の真似をしたんだが、彼の様に上手くはいかないな」

ティリアに遅れてジャンもゾルフの方に寄ってきた。
感謝の言葉と同時に先程ゾルフが見せたハンターの常識はずれで無茶苦茶な攻撃方法を諫める。

ゾルフに死んでもらっては困るとジャンが真面目に言うが、ゾルフはすまないと適当に返した。
彼は他人の為なら平気で命を投げ出す。
ジャンはそれを心配しているのだが、ゾルフには届かない。
親友として、そんな展開が起こらない事を祈るしかないか。

「……西側へ行ったな、追うぞティリア」
「はい！」

“やつ”が飛んでいった方の空を見ながらゾルフが言う。
誰かが交戦しているかもしれない、なるだけ早く行かなければと力を込めて三人一斉に駆け出す。
少し西側に傾き始めた太陽が、今日ばかりはあまりは明るく見えなかった。

街の西側はハンターから一般的に沼地と呼ばれるフィールドに面しているため、一応用心として巨大弩（バリスタ）と呼ばれる対飛竜用兵器を数機置いていた。
が、“やつ”との戦闘で業火に焼かれ、とっくの昔にただの炭の塊と化している。
“やつ”は今まで街の至る所に移動しては焼いて回っているのだ。
ドンドルマ程大きな都市ではなかったが、それでも普通に大きな街として栄えていたヴィルマの殆どが今は炎に包まれている。

「……どうだヴェン、誰かいたか？」
「残念ながらいないですね。どこか別の場所、それこそ沼地に避難したんじゃ？」

街の西側。
道幅の広い“元”大通りを二人のハンターが歩く。
一人は鮮やかな紫の防具、ガルルガシリーズと白く、丸い特徴的な形をした弓、ニクスファーボウ?を背負ったまだまだ若い青年ハンター。
もう一人は青い防具、まだまだ新人（ルーキー）の気分が抜けないクックDシリーズにランスと砲が融合したガンランスと呼ばれる武器の一つ、討伐隊正式銃槍を持つ、隣の青年ハンターよりも更に若い、少年と言ってもいい程若いハンターだ。
そんな二人も例のごとく避難しきれていない街の住民を探しているのだが、やはり見つからない。
実はもう避難出来てるんじゃと疑いたくなる程見つからない。

「まったく……こっちの身も考えてほしいぜ、あれだけ警鐘ならしたのに避難出来ねぇなんてな」
「仕方ないですよテラさん。朝も朝、まだ太陽だって昇りきってなかった時間でしたし」

ぼやく青年ハンター――テラにヴェンと先程呼ばれた少年ハンターが仕方ないですよと苦笑いする。
あんな朝早くにいきなり鐘で叩き起こされて、避難しろと言われても中々上手く対応出来ないだろう。
ましてや今まで一度も街の中にモンスターが入った事の無いヴィルマだ、住民には夢にも思わなかったであろう事態だ。
ハンターであるヴェンだってそんな事思っていなかった。
そんなとりとめの無い会話をしながら歩いていると、急に空が暗くなり、空気が唸る様に震える。
直ぐに空は明るくなったが、唸る様に震える空気は止まらない。
低い、荒々しさを秘めた声が少し後ろの上空から聞こえる。
しかも、先程までと比べると少しだが気温が上がり、肌をピリピリ

と刺す様なプレッシャーを感じる。

「……まずいな、俺達二人じゃ手に負えない」

「き、来た……」

『バサリ』と羽が上下に振られる度に風が巻き、ゆっくりと“やつ”が高度を下げてくる。

その存在感は、まさに怪物。

こんなのと比べたら世間一般にモンスターと呼ばれる生物など可愛いもんだ。

“やつ”こそ真の怪物（モンスター）だろう。

ズンと低重な音が響き、二人の後ろに“やつ”が降り立つ。

「逃げる……のは無理だろうな。今の俺達だけじゃ逃げ切れねぇ」

「……ここで僕達がこいつを足止めしてたら他の皆がその分人を探せますし、やるしかないですね」

ハァッと息を整えて、テラは折りたたんで背負っていた弓を展開させ矢を一本矢筒から取る。

それを素早く番え、弦をめいっぱい引き絞り放つ。

流れる様なその動作は彼の実力が高い事を無言で示している。

空を切り裂き矢は角に直撃するが、突き刺さらない。

ガァンと鈍い音がしてへし折れた。

うげぇとテラは呻くが、そんな余裕など無い。

“やつ”はつい今しがた矢などなかったかの様に石畳を抉り、大地蹴って一気にテラとヴェンの方へ突っ込んでくる。

「――っ！」

今まで対峙したどのモンスターよりも早く、そして何よりその目

が放つ無形の圧力に体の芯から凍り付く。“やつ”が近付く度に周りの気温が上昇し、肺に入る空気は灼熱。
だが、寒い。
その圧倒的な視線がテラを捉え、体を凍り付かせる。
まるで金縛り、指一本すら動かせない。

「う、うわぁぁぁっ！？」
「――！」

しかし隣のヴェンはそれを感じていないのか、情けなく声を上げてその突撃を避ける為に横へ走る。
その情けないヴェンの声のお陰か、プレッシャーに呑み込まれて動けなくなっていたテラの体が動く様になった。
……そうだ、ヴェンはまだ新米なのだ。自分が今、後輩を守らなければ一体誰が守るのと言うのだ。
動く様になった体で、弓を片手にヴェンとは逆の方向にテラも走り出す。
二兎追うものは一兎も得ず、“やつ”は反応が遅れた自分を狙ってくるだろう。
これならヴェンは大丈夫な筈だ。
そんなテラの読み通り、“やつ”はヴェンとは逆の方向、つまりはテラに狙いを定めたのか、テラの方へ軌道修正してくる。

「うぉぉぉぉっ！」

テラは“やつ”が自分の真後ろまで迫るのを肌で感じ、一気に横へ跳ぶ。
紙一重で“やつ”の突進攻撃は避けれたか。

「っし！」

すかさず立ち上がり、真横を通り過ぎて行った“やつ”に向かって矢を放つ。
このニクスファーボウの付加属性は氷。
凍てつくその矢は“やつ”にどれぐらい効くのかは知らないが、少なくとも弾かれても少々のダメージは与えられる。
案の定矢は燃え盛る鱗に弾かれへし折れたが、当たった瞬間に雪の様な白い冷気が出たので、属性によるダメージは少量見込める。
立て続けて矢を放ちたいところだが、直ぐにこちらに方向転換をしてきてヤバい。
『攻撃』に集中したら防御や回避は疎かになりがちだ。ましてや相手は古龍、疎かになった時にできる隙を見逃してはくれまい。
仕方ないので弓を折り畳み再び背中へ。
回避の体勢だ。　だが“やつ”は今回は突進をしてこない。
一度大きく首を天に向け、体をのけ反らせる。
これは、殆どモンスターがある事をするために行う予備動作。

「ヤバ……ヴェン！　逃げろ！」

ちょうど今、テラに加勢すべく走ってきたヴェンにそう叫び、テラも同時に走り出す。
そのテラの表情を見たヴェンも急いで反転、来た道を逆戻りだ。
急いで離れていくハンター達を見ながら、“やつ”こと炎王龍テオ・テスカトルはのけ反らせた体を元に戻し、大きく口を開ける。
その口から吐き出されるのは、長大な火炎。
全てを焼き付くし灰にする地獄の業火。
俗に言うブレスだ。

「おおおおっ！？」

背後から物凄い熱量の何かが迫るのを感じ、テラは必死に走る。
最後は思いっきり前にヘッドスライディング、どうにか射程距離内からは逃れられた。
先に走って逃げていたヴェンが直ぐ様合流し、今後を考える。
基本的にモンスターはブレスを行っている時は無防備で何も出来ない。
攻撃のチャンスでもあるし、逃げるチャンスでもある。

「後凡そ十秒ぐらいがあいつのブレス中の隙だな。お前は逃げろ」
「弓思いっきり構えて、説得力無いですよテラさん」

ヴェンが指摘した通り、テラは再び背中の弓を展開させて矢を数本に持っている。
やる気しか感じない。
テラとしては自分が囮になってヴェンを逃がす算段なのだが、見抜かれたか。
苦笑いしながらヴェンも背負っている討伐隊正式銃槍を構えた。

「バカ野郎！　ここは俺が引き受けるっつってるだろ！　すぐにゾルフさん達も来る、ここは俺が足止め、お前は応援を呼んでこい！」
「ゾルフさん達がすぐに来るなら、わざわざ僕が呼びに行かなくてもすぐに来ます。それよりも、一人より二人の方が生存率高いですよ？」

さっきから情けない声を上げていたヴェン。
今でも足が少し震えている。
そりゃそうだ。
ヴェンはまだルーキーもルーキー、初心者ハンターの登竜門、怪鳥イャンクックを倒してまだ日が浅い。
それなのにこんな化け物と戦おうとしているのだ。

恐怖を感じない方がおかしい。
なんせ相手は古龍。
どんなに熟達したハンターでも恐怖を完全に拭う事は出来ないし、テラだって恐怖はある。
だが、それでもヴェンは退こうとしない。
目には恐怖の色が映っているというのに、同時に『絶対に退きたくない』という意地の様な物を秘めている。これは梃子(てこ)でも動きそうにない。

「……勇気と死にたがりは違うぞ、蛮勇(ばんゆう)ってんだ」
「お互い様でしょう？」
「ハッ！　言い返せねぇのが悲しいな！」

テラの言葉に皮肉っぽく笑いながら返すヴェン。
テラは軽くそれを笑い飛ばし、矢を弓に番えた。
一気に数本の矢を弦で引き、未だに炎を吐く“やつ”の方に向ける。

「死んでも責任取らねぇからな！　恨むなよ！」
「それもお互い様でしょう！」

ブレスが終了し、再度首を上に向ける炎王龍に向かって、テラが再び矢を放つ。
先程と同じように強固な鱗や甲殻に弾かれるが、構わない。
次から次へと矢筒から矢を取り出し、射る。
その攻撃がやはり鬱陶しいのか、炎王龍テオ・テスカトルはテラに向かって牙を剥き、先程のブレスで灰とかした石畳を粉々にしながら走ってきた。
すかさずテラは弓を畳んで背中に戻し、横へと走って逃げる。
普通に走っても追い付かれて終わりなので、ギリギリのところで横っ飛び。

地面を転がりながらもなんとか避けれた。
突進を外したテオ・テスカトルは直ぐに立ち止まり、再びテラの方を見るが――

「ショット！」

いつの間にかテオ・テスカトルの真横にまで接近していたヴェンが引金を引く。
その瞬間、炎の塊がテオ・テスカトルの側面に直撃し、ヴェンもその反動で“元”石畳の上を滑る。
これはガンランスの必殺技、龍撃砲である。
相手の甲殻の固さを無視して一定のダメージを与えられる強力な技だが、連射は不可能。
一撃撃ったら放熱しなければならないし、武器の切れ味も落ちる。
ハイリスクハイリターンの技だ。
『シュゥゥゥ』と蒸気が槍から上がる。
その音が威力の高さを物語るが、側面に炎の塊を撃ち込まれたテオ・テスカトルは少しよろけるだけ。
ヴェンは勿論、流石のテラも驚きの表情を隠せない。
対モンスター兵器としては最高レベルの威力を持つ攻撃を食らい、よろけるだけとは。

「ゴォォォァァァッ！」
「うわっ！？」
「咆哮（バインドボイス）か……！」

バインドボイス。
モンスターの大咆哮である。
ブレスの様に何かを吐くわけでもなく、読んで字の如し咆哮だ。
だが、モンスターが内に秘める怒りなどの感情をその咆哮に乗せ、

空気を震わせるそれは、人間の根源的な恐怖を思い起こさせる。
どんなに熟達したハンターもこれには耐えられず、咄嗟に耳を両手で塞いでしまい、隙が生まれる。
隙としては一瞬だが、戦闘ではその一瞬が命取りになる。
咆哮を終えたテオ・テスカトルは直ぐに動けるが、テラやヴェンは一瞬体が硬直状態になり動けない。
モンスターの脚力は人間のそれとは比べ物にはならない。
直ぐに間を詰められてしまうのだ。

「ガァァァッ！」
「ヒィッ！？」
「ヴェン！」

尻尾を振り回し、炎王龍テオ・テスカトルはヴェンの方を向いた。
その目からは無形の力が込められ、ヴェンはバインドボイスが終わっても恐怖で足がすくみ動けない。
王の威圧感（プレッシャー）、それは炎が体の周りに渦巻いているというのに、寒気を感じ、体を芯から凍り付かせる。
そんなヴェンの様子を見たテラは一気にヴェンの方へ駆け出す。
テオ・テスカトルがヴェンとの間合いを詰め、その鋭く尖った爪を振り上げる。
恐怖で凍り付いた体は瞬きすら許さない。
振り上げられたその爪が自分の方へ振り下ろされるのがゆっくり、死に際だからかやけにスローモーションで見えた。
その鋭利な爪が自分に到達するコンマ数秒前、紫の影が飛び出してきた。

「オラァッ！」
「――！？」

爪が自分の体に食い込むほんの数秒前にテラが飛び出してきたのだ。
ヴェンの方へダイブし、押し倒す。
勢い余って地面を数回転がるが、なんとか爪は避けれた。
まるで何かが爆発したかの様な音がして、先程まで自分が立っていた石畳が粉砕されたのをヴェンは見た。

「バカ野郎！　しっかりしろ！」
「す、すいません！」

ヴェンの上から罵声が降ってくる。
勿論テラである。
「お前は死にたいのか！？」と叱り飛ばすのは、いつも自分がヘマをした時と変わらない。

「無事か？」
「はい。テラさんこ……そ……」

上に被さるテラを見上げて謝ろうとするが、途端に顔に何か赤い物が降りかかり、見えなくなる。
急いで目を擦ってみると、それは大量の血。
テラを見ると、右の手足が無い。
強固な筈のガルルガシリーズの半分が砕け散り、背負っていた純白の弓も朱に染まり、右の手足があった部分からは白い骨と薄い赤色の肉が覗き、血が吹き出す。
辺りは既に赤い水溜まりが出来ている。

「て……テラさん！」
「……喧しい。耳はついてるそんな大声出さなくてもちゃんと聞こえる」

今現在体には想像を絶する激痛が走っている筈なのに、顔色一つ変えず、テラが煩そうにまだついている左手をヒラヒラと振る。
いや、顔色は段々と青くなっているか。

「……俺は、ここまでだな、情けねぇ」
「そんな……！　僕のせいで――」
「喧しいってったんだ！」

やれやれと首を左右に降り、気休め程度に左手で右腕があった場所を押さえる。
勿論、そんな事しても血なんて止まる筈もなく、左手も直ぐに朱に染まった。

「お前は逃げろ。俺はあいつ食い止めるから」
「何言ってるんですか！？　テラさんも一緒に！」
「自分の体は自分が一番分かる、っつってもこの様なら見たら分かるだろ？　俺はここまでだ」

傷を押さえるのを止め、血塗れの左手でヴェンを押す。
いつもの拳骨などと比べると、遥かに弱々しく、小刻みに震えてる。

「でも……！」
「行けってんだ！　俺の命と引き換えにお前を逃がす！　俺の気持ちを汲み取れ、刺すぞ！」

かろうじてまだ腰にぶら下がる矢筒から一本の矢を取り出し、ヴェンの喉元に突き付けた。
その目からは涙が流れる。
それは恐怖から来る物ではない。

「……お願いだから……っ！　……お前だけでも生き延びろ……仇なんて討たなくていいから、生き延びてくれよ……っ！」
「――っ！？」

涙の理由は簡単だ。
ただ、ただただ仲間を思って泣いている。
自分の命を懸けて守った後輩を思って泣いているのだ。
初めて聞くテラの弱々しい声。
いつも仲間内の中でも明るく、兄貴分だったこの青年ハンターの、最後の願い。
……ゆっくりと、ヴェンは立ち上がった。

「……それでいい。ゾルフさん達によろしく頼むぜ、葬式は盛大によろしくってな」

真っ青になった顔で弱々しく笑うテラを見て、ヴェンが頷く。
するとテラはもう一度笑い、行けと叫んだ。
この世界は弱肉強食。
炎王龍テオ・テスカトルは相手の気持ちなど知らないし、知る気もない。
ただ仕止め損ねた相手を睨み付け、首を天に向けた。
ヴェンはテラ最後の叫びを聞いて、一気に街の奥へと走り出した。
テオ・テスカトルのしたあの動作はブレスの前動作。
今なら逃げ切れる。

「地獄への片道切符を買うには早すぎたか。ホントはまだ死にたくねぇけど、これはこれで有りだ」

小さくなっていくヴェンの背中を見届け、テラが弱々しく笑った。

そして、再び“やつ”を見る。
ちょうど、口を大きく開けたところだった。

「……中々の死に様だな、我ながら誇りに思う」

目前に迫る魔性の業火を静かに見つめ、テラは唇の片方を吊り上げて笑う。
ヴィルマの弓使い、テラ・ドレークに最後の時が来た。

「……おいおい火加減が強すぎるぞ、焼くならせめてレアにして欲しいぜまったく」

魔性の業火がテラのその身を呑み込んだ。

ＤＯＳ：　片道切符（後書き）

一人目。
皮肉を残して散りましたね。
いや、書くの難しい。
どうにか死に様だけは綺麗に書けた……事も無いか。
ですが今の私には精一杯だと思います。
ごめんなさい、クオリティ低くて。
次回からもこんな感じです。
色々と作者である私もキャラ達も悪戦苦闘していますが、更新を早めにしたいです。
なんか指摘とか、感想とか送っていただければ幸いです。
それではまた！
……本家作品を知る方には分かるかもしれませんが、段々と神威色が出てきました。
前書きとか。

TRES：　貸し二つ（前書き）

貴女と共に笑えた日々を、私は最高の宝にしよう

貴女の背中を守った事を、私の最大の誇りにしよう

貴女と出会ったこの事が、私の最初で最後の奇跡

TRES：　貸し二つ

「間に合わなかったか……っ！」
「……」
「んだよ二人共暗い顔して、たった今飛んでったあいつを逃がしたのがそんなに悔しいのか？　ペイント弾はちゃんと撃ち込んだぜ？」

街の西側にある大通りだった道。
脇に並ぶ建物は炎に包まれ崩れ、石畳はボロボロ。
先程までは炎王龍テオ・テスカトルがいたのだが、ゾルフ達が到着したと同時に羽を広げ、街の奥へと飛んで行ってしまった。
すかさずジャンがペイント弾を撃ち込んで今“やつ”がいる大体の位置は分かる。
さっさと行こうぜとジャンが急かすが、ゾルフもティリアも悲しみに目を伏せていて聞いていない。
それが何故かはジャンには分からないが、嫌な予感がしてきた。

「私の下唇のあたりが脂肪分でベタついています。……どこか近くに新しい焼死体があります」
「……あれを見ろジャン、人型の炭が横たわっている」

ティリアが目を伏せて静かに言い、ゾルフが街の奥へと続く道の前に横たわっている炭の塊を指差した。
確かに人型に見えなくもないが、確定したわけではないし、何よりあれを『人』とするならば、手足が一本ずつ足りないではないか。
見間違いだろう……とジャンは内心言い聞かせる。

「……勝手に仲間を殺したらそいつに恨まれんぜ？　見間違いだ見間違い、ほら、さっさと行くぜ！」

「……」

ジャンが無理矢理場の雰囲気を明るくしようと軽い調子で言うが、ゾルフがスッとその人型の炭の塊のすぐ奥を指差した。

……そこには、紫の防具の一部が投げ捨てられたかの様に無造作に置かれ、下には血溜まりが出来ている。

紫の防具の端、引き裂かれたかの様に荒い切り口から、少しだけ肉片の様な物が見える。

「……嘘だろ？　紫って言ったら……」

「……ガルルガシリーズ、テラだ」

静かに『それ』が何かを確定するゾルフ。

仲間の成れ果て。

片方の手足を失い、その身は炭となり、最早何か分からない。

ティリアの目から、涙が流れる。

ゾルフは静かにその亡骸の方へ歩いて行き、合掌する。

ティリアやジャンもそれに習い、ゾルフは焼けずに残った片方の腕と足を持ち上げ、ポーチから紐を取り出してくくり、腰にぶら下げた。

「ゾルフさん？」

「……あいつの思いは俺が背負う。“やつ”を追うぞ」

静かに、しかし先程よりも早くゾルフは駆け出し、ティリアとジャンもまた、続いて行った。

「いないわね……」
「そだねぇ～」
「……お前ら、さっき俺らを見捨ててどの面下げてんな事言ってんだ？」

街の中心部、最初に“やつ”が降り立った広場の近く。
いつも通りの街並みならば、この位置からじゃ建ち並ぶ建物で広場は見えないのだが、残念ながら全て“やつ”に焼かれ、崩れ落ちた。故に中心部にある広場がバッチリ見える。
未だに炎が燻り、黒煙が漂う。
綺麗だった街は今、炎に包まれボロボロの状態だ。
古龍は一頭だけで天災と同等の厄災を起こすと聞いていたが、その意味がやっと分かった。
そんな中心部近くの道を歩くのはマイルズ達四人。
ジャンのお陰でどうにか逃げ切れ、やっとの事四人合流して人を探すが、やはり見つからない。

「……皆、無事だよな？」
「何よスネーク、皆の実力を信じてないの？　大丈夫だって！」

“やつ”の常識を逸脱した能力と力を知り、不安になるスネークがポツリと呟く。
それにイズミがピクリと反応して大丈夫と笑い、しゃんとしなさいと背中を叩く。
今いる四人は全員同期、実力に多少の差はあれど、お互いを信頼している。
そこから生まれる強さは、ただ単にハンターが四人集まった集団とは違う。

同じようにヴィルマのハンターは皆強い絆で結ばれ、結束した強さは生半可な物ではない。
きっと……大丈夫。

「……あ、あっちからサラさん達が出てきたわ。皆いるじゃない」

リリスが建物が全て崩れて開けた視界で、広場の反対側から出てきたサラ達を見つけた。
サラを含め六人はいる。
全員が緊張した面持ちだが、生きている。
ホッと一息つく四人である。

「マイルズさん！」
「……ケーンとロットか、大丈夫か？」

更にはマイルズ達が歩いていた道の向こうから少年が二人、安心した様な声を出しながら走ってきた。
ケーンとロット、マイルズ達四人の後輩ハンターだ。
今ここにはいないがヴェンと同期で、二つ歳下だ。

「やっと合流出来たっすよ、ホント」
「……避難出来ていなかった住民七人を避難させてきました。町長曰く後四人だそうです」
「……マジで避難出来てねぇ人いたんだな」

ヘルムのバイザーを上げて、ホッとしましたと息をついたのがケーン、冷静に報告をしたのがロットだ。
ケーンはガレオスシリーズ、ロットはゲリョスシリーズと、まだまだ初級ハンターの防具を纏った新人、二人だけで避難させたのはさぞ緊張しただろう。

……だがそれよりも、マイルズとしては本当にまだ人が残っていた事に驚く。
そろそろ太陽は西へと沈み始め、空が段々と赤くなってきたというのに。

「……ヴェンは知りませんか？」
「さぁ？　最後に見た時はテラさんといたぜ」

今ここにはいない同期がどうなのかを心配した表現でロットが訊いてくる。
それにほぼ全員が無事だという事が分かり、ホッとした感じのスネークが返す。
まぁ心配はいらねぇだろうと言ってグッと親指を立てる。
ヴェンと一緒にいたテラの腕は、ヴィルマの街付きハンターの中では上位ハンターに位置付けされている三人を除けば一番と言われている。
十七歳とまだまだ若いマイルズ達とも少ししか歳の変わらないのに、才能溢れ、それを誇示しない好青年だ。
ガンナーという火力の少ないタイプのハンターだというのに、固い甲殻を持つ黒狼鳥イャンガルルガをたった一人で幾度と倒し、将来有望なハンター。
仲間内ではムードメイカーの様な感じであり、ヴェンは彼に憧れいつもくっついている。

「……そうですね」
「そうだぜロット、テラさんがヴェンにはついてんだ、絶対大丈夫だぜ。そっすよね？」
「そうね。少なくともここの男二人よりは頼りになるわ」

大丈夫ですよね、と少し心許ない様な顔をしているロットにケー

ンは安心しろよと肩を叩き、リリスはマイルズとスネークを見ながら笑う。
小馬鹿にされた感じのマイルズとスネークはイラッとくるにはイラッとくるが、事実なので何も返せない。
マイルズは轟竜（ごうりゅう）と呼ばれる生態系上位の飛竜、ティガレックスの素材を使った防具に、空の王と呼ばれるリオレウスの力が宿る灼熱の槍、プロミネンスピラーを持っていて、見た目だけならテラよりも強そうだが、これらの飛竜をテラの様に一人で倒したわけでもない。
倒した時はいつも隣仲間が、ゾルフや、それこそそのテラなんかもいた。
実力はテラの方が上だ。

「まぁお前よりは強いがな」
「何よっ！？」

自分を少し小馬鹿にしたリリスに向かって復讐とばかりに言葉を返す。
これもまた事実。
リリスは悔しそうに地団駄を踏むが、覆せない。
マイルズはニヤリと笑う。

そんな安堵感が漂うなか、特徴ある匂いが上空から匂い、大きな影が一瞬太陽の光を遮った。
それと同時に大気が唸る。
“やつ”の羽音だ。
紅蓮の巨体がゆっくりと、広場に舞い降りる。
向こう側にいるサラさん達が、武器を構えたのが見えた。

「っ！　ジャン達はどこにいるのよまったく！」

広場に舞い降りた炎王龍を見て、サラは舌を鳴らす。
相手は古龍。
いくら自分が上位ハンターだとしても、一人で勝てる確証なんて無い。
奇跡でも起こらない限り絶対に敗ける。
いや、どんな奇跡が起きても撃退ぐらいで討伐は無理だろう。
こういう戦闘での奇跡とは自分の身の丈にあった範囲の物しか起こり得ない。
そもそも十回戦えば十回敗ける相手だ。
奇跡に懸けても無駄である。

「まだ避難完了とは聞いてないから、皆は捜索で、私だけがあいつの相手をするわ……なんて言いたいけど、生憎一人であいつを止める力は私には無いわ。誰か手伝ってくれないかしら？」

まったく何してるのよあいつらはと首を振りながら周りを見るサラ。
サラの問い掛けに、オズオズと手を挙げたのは、一人。
他の者達はあっちを向いたりこっちを向いたり。
極力サラと目を合わせない様にしている。
……当たり前だ。
誰だって自分の命は惜しい。勝てないと分かっている相手に挑むという、勇気を通り越して愚かな選択を誰がすると言うのか。

元々十七人全員が最初集まったのは、“やつ”と基本戦うのはサラとジャン、それにゾルフの上位ハンター三人で、他の者達は専ら避難出来なかった者の捜索のためである。
“やつ”と戦う気など更々無い。
人任せと罵りたいが、これが『普通の人』の考えであり、今手を挙げたハンターは凄まじい選択をしたのだ。それこそ愚かな選択を。
その現状を見てハァッと息を吐き、どうしたものかと困るサラ。
すると、先程サラが通って来た道の奥からガチャガチャと鎧を鳴らしてヴェンが走ってきた。

「……あらヴェン？　どうかしたの？」

ヴェンはハァハァと肩を上下に揺らし、膝に手を置く。
そんなヴェンの頬に伝った涙の跡を見て、サラは何があったのかを訊く。
嫌な予感がするが、確認の為に訊かなければならない。

「……僕のせいでテラさんが！」

嗚咽を漏らし、時折涙を流しながら簡潔にヴェンは何があったかをサラに話す。
……場の空気が凍り付いた。
テラは上位ハンター三人に次ぐこの街の実力者だ。
そのテラがヴェンを庇ったとはいえ殺されたのは、テラよりも実力が下の者にとっては衝撃的な事実。
先程オズオズと手を挙げたハンターも、物の見事に決意の表情が消えた。

「む……無理だ、俺達なんかじゃ勝てる筈がない！」
「避難するぞ避難！　出来てねぇ奴なんて知るか！　そいつらが悪

い！」

自分よりも実力が上のハンターが死んだ。
その事実は他のハンター達の心を変える。
堰を切らしたかの様に口々にそう言って踵を返す。
無論、逃げるためだ。
自分達では敵わない、死にたくない。
家族を持つ者もいるのだ、当たり前と言えば当たり前か。
結局ヴェンとサラ以外のハンターが回れ右をして走り出す。
背中を見せるという事は、後ろが死角になるという事だ。
その隙を王は逃さない。
ちょうど先程仕止め損ねたハンターもいる。
一気に駆け出し牙を剥く。

「……マズイッ！？　ヴェン！」
「うわぁっ！？」

咄嗟に反応したサラは片腕でヴェンを横に飛ばし、自分も横に跳ぶ。
間一髪で避けれたが、後ろからは悲鳴が聞こえる。
ただ逃げるために走っていた彼らは迫り来る巨体を躱しきれず、その牙で引き裂かれ、あるいはその体を思いっきり弾き飛ばされた。
下位ハンターの纏う防具など、炎王龍テオ・テスカトルにとっては無意味。
紙切れの如く引き裂かれ、体の一部が離れる。
だが、人というものは手足の一本もがれようが、大火傷になろうが生き残る。
否、生き残ってしまう。

「が……はっ……！？」

「いてぇ、いてぇよぉ……」
「まだ、死にたくねぇ……っ！」

口々に、苦痛と絶望が混じった声を上げるが炎王龍には無論、言葉など通じない。
ただ荒々しい瞳で周りに転がる死に損ないを見下ろし、体を少しだけ縮こませる。
ボフッと音がして、テオ・テスカトルの体から何かが飛び散る。
キラキラと西陽を反射するそれは、なんだ？
サラは何か嫌な予感がして、ヴェンを引っ張って飛散する何かが届かない場所まで移動する。
本当は今あそこで転がっている仲間を引っ張って行きたいが、ハンマーも背負っているし生憎そんな腕力は無い。
ヴェン一人が精一杯だ。
サラがヴェンを引っ張って一旦下がったと同時に、テオ・テスカトルは自身と周りに転がるハンター達を包み込む様に飛散した何かを見つめ、ガチンッと牙を鳴らした。

「ガォォォアアッ！」

その瞬間、一気に何かが飛散していた場所一帯が炎に包まれた。
……粉塵爆発。
空中に飛散した粉塵が何かの拍子に発火、辺り一帯を焼き尽くす現象だ。
鍛治場でたまに起こる事故だが、まさかテオ・テスカトルは自分の意思で巻き起こせるのか。
炎の中央で咆哮を上げる姿を見て、たった今起きた爆発で発生した爆風と熱気を受けながら、サラの顔は青くなる。
爆発であり、炎は直ぐに消えた。
“やつ”、テオ・テスカトルの周りには何も無い。

灰と化した石畳が小さな炎を燻らせてるだけだ。
先程まであそこに転がっていたハンター達は、跡形も無く爆散した。
防具も、骨の一つも残っていない。
パラパラと上から落ちてくる灰が、仲間達（ハンター）なのか。
……なんて凶悪。
影も形も残らないとは正にこの事だ。

「……信じられない……」

それは正に地獄絵図。
燃え盛る炎は街を包み、それを操り従える王は中央に立つ。
それに先程の粉塵爆発、最も危険なのは威力ではない、範囲だ。
理論上粉塵爆発はその粉塵が着火点、要は粉塵が飛散する距離だけ焼き払う。
サラやヴェンの様な近接武器を操るハンターにとってそれは、回避不可能。

攻撃中に粉塵を飛ばされ、着火された終わりだ。
元々“やつ”は炎を纏っているため、近付くだけでもリスクがある。
それにあの技、『迂闊に近付くな』なんてものじゃない、『近付くな』と言うレベルだ。

「ヴェン、貴方は逃げなさい！　ここは私がどうにかするわ！」
「――！　嫌です！」

サラが片手でヴェンを逃げるように押すが、ヴェンは動こうとしない。
……その背中が、テラと重なって見えるのだ。
『生き延びろ』とテラは言った。
その言葉に忠実に従うなら、ここはサラを残して退散するどころだ

が、そんな事するつもりはない。
仲間を犠牲にして自分一人が生き延びるなんてのは、死ぬよりも遥かに苦痛だ。
テラには悪いが、ヴェンは戦うつもりである。

「何言ってるの!?　貴方じゃ敵わない、私だって絶対に無理よ！　だから貴方一人だけでも生き――」
「一人だけ生き残っても意味無いんです！　皆生き残らないと。死んだテラさんは皆が生き残るって信じてましたし、サラさんだけ残すなんて僕には出来ません！」
「――！」

「葬式は盛大に頼むってゾルフさんに言ってくれよ」とテラは最後に笑った。
テラは全員が生き残ると信じていたのだ。
全員で挑めば勝てると。
たった今五人死んだが、まだ数はいる。
上位ハンターの三人も生きている筈だ。
まだ希望はある。
一人だけ尻尾を巻いて逃げるなんて、ヴェンには出来ない。

「……でも――」
「あ！　サラさん、あいつが動き出しましたよ！」
「――!?」

サラがそれでも逃げろと言おうとするが、ヴェンはそれを遮ってサラの後ろを指差した。
慌てて振り返るが、“やつ”はこちらに動き出したのではない。
反対側だ。

「……あれは、マイルズ達じゃない！？」

目を凝らす。

……“やつ”が襲い掛かろうとしてるのは、向こう側にいるサラの後輩達であった。

「ヤバいヤバいヤバいっ！？　来たぞ！」

「煩いスネーク！　落ち着け、冷静に、冷静にだ」

灼熱の炎を纏い、長大な牙を口元からチラつかせながら迫る巨体を見て、スネークが悲鳴を上げる。

この中では一応マイルズが一番の手練れだ。

テラなんかには劣るが、それでも一応一番なのだ。

自分がどうにかしなきゃと恐怖に震える心を鼓舞し、周りに指示を飛ばす。

基本的にモンスターの突進は直線、横に移動してそのラインから外れれば楽に避けれる。

リリスとイズミを右へ、ケーンとロット、スネークを左に走らせた。

これでいくら方向修正をしても片方しか狙えない。

更にマイルズ自身は“やつ”が迫る中動かない。

自分にギリギリまで引き付ける作戦だ。

“やつ”は今まで相手をしてきた飛竜よりも遥かに速い。

膝が笑う。

「うぉぉぉっ！」

ギリギリまで引き付けて自分も右に思いっきりダイブする。
一度“やつ”には追い回された。速度は大体分かるので、跳ぶタイミングもまた分かる。
なんとか、本当にギリギリ避ける事が出来た。
だが、まだ安心は出来ない。
先程“やつ”が見せた攻撃、粉塵爆発が来る可能性がある。
全員無事に避けた事を確認するとマイルズは散開指示を出す。
攻撃はするな。
全員仲良く消し炭になるのは遠慮したい。

「おいてめぇ！　お前だ、そこの赤いお前！　お前の相手はこの俺だ、覚悟しろ」

全員が散り散りに走っていく中、マイルズは叫ぶ。
逃げの行為は相手に背中を見せる。
人の視界は三百六十度、全方位見える筈もなく、後ろは最大の死角だ。
その死角を見せるのだから、それなりのリスクは伴う。
マイルズはスネーク達のリスクを無くすため、わざと自分に注意を引かせ、囮になる。
全滅よりは遥かにマシ。

「グゥゥゥゥ」
「ハッ、いい目で睨むなお前！　来いよ！」

背負っていた赤い槍、プロミネンスピラーとランス特有の巨大な盾を構え、マイルズは睨み返す。
……逃げるな、逃げるな、逃げるな。
自分にそう言い聞かせる。

「ガァッ！」
「――！　あっぶね！？」

自分を睨むマイルズを引き裂く為に、テオ・テスカトルは体をたわめ、一気に地面を駆ける。灰と化した石畳は粉塵の様に舞い上がり、視界を悪くする。
マイルズは直感で盾を構えたまま横に三回足を滑らせる。
またもやギリギリのところ、間一髪で相手の攻撃を躱し、お返しとばかりに槍を突き出す。

「――いっ！？」

突き出した槍の先が、嫌な音を立てて弾かれた。
……固い。
プロミネンスピラーに付属された属性は炎。
突きの一撃と同時に小爆発が起こるが、炎を纏う炎王龍には多分意味を成さない。
槍の穂先が少し欠けたのを見て、マイルズは舌打ちをする。
更に厄介事は続く。
弾かれた事によりバランスを崩したのだ。
ランスは一撃一撃の威力は高いが、その分弾かれた時の反動も大きい。
ゆらりとよろけ、隙が出来る。
――その隙を、炎王龍が逃す筈が無い。
尻尾を鞭の如くしならせ、マイルズの腹に叩き込む。
咄嗟にマイルズは盾を掲げて直撃は防ぐが、ビリビリと右手は痺れ、地面をザァァッと音を立てて滑る。
後一撃食らえば右腕の骨が折れるかもしれない。
それ程の威力を今の一撃は持っていた。

「……なんつー威力だよ、尻尾であれなら爪とか想像したくねぇな」

尻尾なんてものはモンスターにとって主力武器ではない。
基本的に爪と牙だ。
たまに尻尾に毒の棘がついていて、強力な武器として使うモンスターもいるが、こいつは違う。
毒を含んだ棘も無いし、特別何かついてるわけでもない。
……要は、さっきの攻撃はただの牽制用だ。
マイルズが尻尾を防いだのをテオ・テスカトルは感じとり、すかさず方向転換。
ぎらつく牙を見せつけて、目の前にいるマイルズを睨む。

「やぁぁぁっ！」

が、今度は後ろから何者かの声が聞こえ、少しの衝撃が体に走る。
無論大した事は無いが、ともかく攻撃はされたのだ。

「リリスッ！？　馬鹿、お前なんで！？」

“やつ”の後ろから攻撃したのはリリス。
二本の美しい刃、ホーリーセイバーを突き立てて攻撃したが、やはり強固な鱗に阻まれてバランスを崩している。
“やつ”の目が光る。
再び尻尾をしならせ、後ろからという不粋な攻撃をした輩にお返しとばかりに攻撃をする。
轟音が響き、元は石畳だった地面が砕けて散るが、リリスはいない。
よく見ると、上からイズミが押し倒し事なきを得た様だ。

「リリス、何してるのもぅっ！　あたしが来てなかったらヤバかっ

たんだからねっ！」
「アハハ……ゴメン、ついね……」
「貸しだからね！」

イズミがリリスを引っ張り起こし、二人一緒に後ろに下がる。
テオ・テスカトルはリリスに追撃を叩き込むべくまたもや方向転換を試みるが、マイルズがそれを許さない。
体で最も柔らか場所の一つ、喉元に槍を突き刺したのだ。
穂先が少しだけしか刺さらなかったが、取り敢えず弾かれはしなかった。
だが、ここで深追いをしたら自分が死ぬ。
リリスへの追撃を止め、マイルズの方を向いたテオ・テスカトルからバックステップをして遠ざかる。

「はぁぁぁぁっ！」
「ゴォッ！？」

後ろに下がるマイルズを追おうと足を上げたテオ・テスカトルに、漸く広場の反対側からここに到達したサラが横からハンマーを叩き付ける。
ガァンッと音がしてハンマーは弾かれたが、衝撃全てを防ぐのは無理だ。
テオ・テスカトルも少しよろけた。

「ショットォ！」

更によろけたテオ・テスカトルにヴェンが追撃。
ガンランスの必殺技、龍撃砲を顔面にお見舞いした。
流石にこれ堪えたのか、テオ・テスカトルは一旦後ろへ大きく飛び、威嚇する様に牙を見せつけてくる。

その間に今この場にいる全員が合流。

「……何あいつ、本当に化け物ね、初めてよあんな固い奴」
「リリスが無茶するからでしょ？」
「……お前ら、俺は退けと言ったよな？」

双剣を背中に挿し戻しながらリリスがぼやく。
反動が相当キツかったのか、両手をヒラヒラと振り、痛い痛いと顔をしかめる。
そんなリリスに無茶するからとイズミは言うが、マイルズとしては二人共退けと言ったのに退かなかった事に腹が立つ。
いや、なんの為にさっき死に物狂いであいつと戦ったんだ。この二人を逃がすためだったのに……
見事に無視されてた。
それに、女の子二人は勇敢に残ったのに逃げたスネーク達三人って一体……

「ハァ……貴方達もヴェンと同じなの？」
「……どういう意味です？」

ハァッと溜息をつき、無骨で巨大なハンマーを肩に置く。
だが、マイルズ達は首を傾げるだけである。
『ヴェンと同じ』というのはどういう意味だろうか？
というより、ヴェンと一緒にいたテラはどこへ行ったのか？

「……テラの仇討ちよ」
「なっ……！？」

サラが威嚇する炎王龍の方を見ながら静かに言う。
ヴェンは俯き、マイルズ達三人は顔に驚愕の色を浮かべる。

何度も言うが、テラは上位ハンターの三人を除けばこの街最高のハンターだ。
実はもう一人、それと肩を並べるハンターもいるが、ともかくマイルズ達よりは遥かに手練れのハンターだ。
そんなテラの死を聞かされ、戸惑うなと言われても無理である。
途端に今、向こう側で威嚇する“やつ”が本当に怖くなってきた。
勿論今までも怖かったが、仲間の、それも手練れのテラが殺られたと聞くとその恐怖は倍増する。

「……知らなかったのね。ごめんなさい、嫌な事言っちゃったわ。でも、これを聞いたからには一つ訊かせてもらうわよ、貴方達は仇討ちに参加して今まで通り自分の仕事をする？　それともヴィルマ一の弓使い、紫蘭のテラ・ドレークを殺った相手には勝てないと判断して逃げる？　どちらを取っても誰も諫めないし、私は全力でサポートするから安心してね」

一定以上の実力を持ち、名の知れたハンターの証、二つ名。
紫蘭のテラ。
それがテラの二つ名。
そのテラが殺られたからには、テラ以下のハンターであるマイルズ達はそれこそ虫けらの如く容易く命を刈り取られるだろう。
逃げも一手。
……冷静沈着でちゃんと自分の実力を把握しているハンターなら、逃げるだろう。
だが、残念ながらマイルズもリリスも、イズミだって仇も討たずに尻尾巻いて逃げたくはない。
それぞれが残りますと強く言う。
サラは、困った様に苦笑いを漏らした後、そうと素っ気なく前を向いた。

「……なら先ずは自分達の仕事をしなさい。残り十数人の住民を――」

「残り四人です、さっき無事避難させてきたケーンとロットに聞きました。四人なら、俺達を除いた他の皆に探してもらっても大して支障は無いでしょう？」

サラの言葉を遮り、マイルズがガチャガチャと灼熱の槍を構えて言う。

リリスは再び双剣を引き放ち、イズミもまた、鞘から漆黒の太刀、黒刀【弐ノ型】を抜く。

ヴェンも俯いてた顔を上げ、銃槍を握る。

『仇なんて討たなくていい』とテラはヴェンに言った。

だが、ヴェンは自らの得物を構える。

テラの仇討ち、復讐の為ではなく、街を故郷（ヴィルマ）を守る為に。

少なからず仇討ちの気持ちが籠るが、それは仕方ない。

他者との繋がりを大事にして、他者と喜びや悲しみを分かち合う。

他者の怒りや無念も汲み取る。

復讐したいと思う気持ちもはそれから来る。

『人』とはそういう生き物だから。

「……残念だけど、私は私自身を守るので手一杯よ。それでもいいのね？」

「構いませんよ、俺達の気持ちは変わりません」

マイルズがそう言うと、サラが小さく微笑んだ。

それは少しの嬉しさと、こんな絶望的な戦いに巻き込んでしまったという罪悪感が入り雑じったもの。

静かに心を鼓舞させる。

――この子達を、何がなんでも守り抜こう。

向こう側にいた“やつ”、炎王龍が後ろの二本の足で立ち上がり、

咆哮を轟かせる。
ビリビリと大気を振るわせるそれは、王と呼ばれるに相応しい程威厳のある響き。
……だが、敗けるわけにはいかないのだ。
マイルズ達はそれぞれの得物を握り締め、一気に地面を蹴った。

「……ここも、炎で通れんかっ！」
「本格的にヤバいなこれは、間に合うか？」

道に横たわる、崩れた建物の瓦礫。
その殆どが炎に包まれ、思った様にゾルフ達は進めない。
これでもう三度目だ、この炎の壁のせいで進路変更させられるのは。
ジャンが撃ち込んだペイント弾のお陰で“やつ”のいる場所は大体分かる。
中央の広場近くにいる筈なのだ。
……なのに、辿り着けない。
歯痒いを通り越して上手く進めない自分を殴ってやりたい気持ちになるゾルフ。
だが、今自分を殴っても何もない。
イライラを理性で押さえ付け、あくまで表面上は冷静に進路を変える。
体の内に秘める、マグマの如くグツグツと温度を上げる気持ちを押さえ。

「あれは、ケーンとロットですよね？」
「ハァ、ひとまず俺達三人以外で生存者がいて安心だ」

こちらに向かって走ってくる二人を見て、ティリアとジャンはホッと息をつく。
取り敢えず自分達以外が全滅、というわけではないので一安心だ。
広場に着いたら全滅してたという最悪な事態はこれで無くなった。

「ゾルフさん！」
「ケーンか、どうした？　“やつ”が来たか？」

迷子の子供がやっと両親を見つけた時の様に、ケーンとロットは安堵の表情を浮かべて走ってきた。
……ただ、ゾルフの問いを聞いてすぐにまた暗い、恐怖に染まった顔に戻る。
ケーンが身震いをして、一気に広場で何が起こったのかを話す。
遠目からだったので今一分からなかったらしいが、ともかく“やつ”が起こした粉塵爆発で仲間のハンター達五人が死亡。
現在はサラやマイルズ達が交戦中であるそうだ。
ゾルフは更に増えた犠牲者を悔やみ、唇を噛む。

「クソが、また増えたか……」
「……ゾルフさん、それは？」

拳を握り締めて悔やむゾルフを見ながら、ロットがゾルフの腰を見ながら問い掛ける。
そこには紫の何かがぶら下がり、血がポタポタと滴り落ちる。
……テラの右腕だ。

「……テラの形見だ」
「……！」
「そんな！？　テラさんがっ！？　ヴェンはサラさんと一緒にいたのでてっきり……」

ケーンとロットが驚きの声を上げる。
そりゃそうだ。
テラ程の実力者が殺られるなど、普通は考えない。
特にまだまだルーキーの二人にとって、テラは目標だ。
その目標が殺されるなど、誰が考える？

「……そうか、テラはヴェンを逃がす為に死んだのか」
「……クソが、憎らしい程あいつらしい死に方じゃねぇかよ」

テラが何故死んだのか。
ずっと疑問に思っていた謎が今解けた。
彼は自らの命を懸けて後輩を、未来を逃がしたのだ。
ゾルフは静かに呟き、ジャンはバカ野郎と罵りながら涙を流す。

「テラや殺された五人のためにも急ぎましょう。サラさん達が危ないです」

しんみりとした空気が流れる中、ティリアが凛とした声で言う。
彼女は仲間を失った悲しみを体の内に押し込んで戦うつもりなのだ。
そんなティリアの声を聞き、上位ハンター二人が顔を上げる。

「……そうだな」
「貴方達二人は今どんなルートを通って来たのかしら？　街中に炎が上がってて思うように進めないの」

ティリアが溜息をこぼしながら言う。
事実、そのせいで今三人は広場に辿り着けないでいるのだ。
これ以上のタイムロスは避けたい。
上位ハンターのサラと下位のマイルズ達だけでは手に余る相手だ。

これ以上の犠牲者を増やさない為にも、今広場から逃げて来た二人に訊く。
彼ら二人の通って来たルートならば、まだ炎が回っておらず、迂回せずに辿り着ける可能性が高い。

「俺達が案内します、口で言うより早いっすよ」
「……同期のヴェンが戦ってるのに、僕達二人が逃げ回るのは嫌ですしね」

二人がそう言って踵を返す。
お前達はここに残れとゾルフ達が言おうとしたのが分かってるのか、何か言う前に駆け出す。
そんな二人を見て、見事に止めるタイミングを逃したゾルフ。
ハァと溜息一つ、仕方なく三人達も走り出した。

――その戦いは熾烈を極めた。
サラを中心に炎王龍の僅かな隙を攻め立てる。
が、強固な甲殻で身を包む炎王龍に攻撃がまともに入る事は殆ど無い。
更には粉塵爆発という反則級の技を持っているため、攻撃が弾かれようが弾かれずに入ろうが、畳み掛けれずにヒットアンドアウェイ。
微々たる攻撃を繰り返すばかりだ。
それでも五人は善戦している方なのだ。
炎を纏い近付くだけで体力が削ぎ落とされ、灼熱の空気を肺に入れ続けるのは体に悪い。
炎王龍の動きは早く、隙も少ない。
まだ誰も死んでないだけで既に奇跡と言っていい。

「……くっ！」

灼熱の空気の中、サラは自慢のハンマーを抱えて苦しそうに顔を歪める。

今戦っているメンバーの中で最も強いのはサラだ。

なのでサラが他の仲間をリードしなければならない。

自分が真っ先に攻め、相手の注意を引き付け、引き際も見極める。

ただ、ハンマーは盾が無いためガードが出来ない。

本当に紙一重、ギリギリの戦いをしているのだ。

そんなサラの様子を見て、マイルズはどうすべきかと思考する。

マイルズの武器はランス、動きは遅いが巨大な盾で攻撃を防ぎ、長大な槍で相手を貫く動く要塞。

サラのお陰もあって、まだ考える余裕はある。

……退くべきか否か。

「せめてゾルフさん達が来れば……」

結局上位ハンターのサラやゾルフに頼ってしまう自分が情けないが、マイルズやリリス、イズミの様な下位ハンターでは手におえない相手。

今生きていること事態が奇跡なのに、それ以上の物を願っても起こる筈がない。

奇跡は現在進行形で起きているのだ。

グッと柄を握り締め、槍を突き出す。

何度やっても弾かれ、この攻撃が効いているのかさえ怪しいが、しないよりはマシか。

最早気休めである。

命懸けの気休めなど悪いジョークだが、事実今そうなのだから仕方ない。

唯一ヴェンの砲撃だけは甲殻の固さを無視してまともにダメージを与えれるが、この中で最も場数を踏んでいないヴェンに近付いて撃ちまくれとは言えない。
さっきから本当に撃っては離れて撃っては離れてのヒットアンドアウェイ戦法しかしていない。

「ハァッ！」
「ヤッ！」

炎王龍の正面に立ち、爪を掻い潜ってハンマーを振るうサラと、その少し横で盾を構えながらサポートするマイルズ。
炎王龍テオ・テスカトルの意識は自然と前にいく。
その隙にリリスは双剣を、イズミは太刀を振るう。
二人の武器は同レベルの武器の中でも切れ味は優秀な方だが、いかんせん相手が相手。
中々上手い事いかないが、気にしない。
弾かれるのは慣れたので、せめて鱗一枚斬り飛ばそうとしているのだ。
しかし、やはり決まらない。
ガンッと鈍い音と共に弾かれ体勢が崩れる。
渾身の力を込めた攻撃の反動だ。
その瞬間、炎王龍の目が光る。
前方にいる二人と後方にいる二人、その邪魔で鬱陶しい挟撃の終止符を打つために前足を上げる。
マズイッとサラが顔をしかめて周りに退く様に指示を飛ばすが間に合う筈もなく。

「ガォォォァァァッ！」

恐々と響くバインドボイス。

それに籠るのは、圧倒的な王の圧力（プレッシャー）と殺意。
マイルズ達はハンターと言うがやはり人間だ。
その大音量の咆哮に堪らず耳を押し当て、籠っている殺気とプレッシャーで身動きが取れなくなる。
それは上位ハンターのサラも例外ではない。
唯一ヴェンは離れていたので効いてはいないが、逆に遠すぎて何も出来ない。
ちょうど度重なる砲撃で落ちた切れ味を回復させるために、砥石で刃先を研いでいたのも原因になるか。
誰も動けない最大のピンチ、誰がまず殺られるのか。
　全員が苦虫を潰した様な顔をしてる中、炎王龍は前足を下ろす。
その瞬間、羽を一度動かし暴風を起こした。
バインドボイスにより身動きが取れないマイルズ達にその暴風を堪えきれる事など無理だ。
四人はあっさりとその暴風に体を持っていかれ、地面を転がる。

「ぐぉっ！？」

　焦がされ抉られ、ボロボロになった石畳を転がり、もんどり打ってマイルズは漸く立ち上がる。
幸い炎王龍はこちらを向いてはいない。
が、リリスとイズミの方を向いている。
……ヤバい。
急いで立ち上がる。
近くで吹き飛ばされ、倒れていたサラもハンマーを担いで地面を蹴り、遠くからは武器を一旦背中に戻して全力疾走するヴェンも見える。
間に合うか。

「ガァァッ！」

「――ぁぐっ……ぁ！？」

振り上げられた爪の先にはイズミ。
イズミは立ち上がっては間に合わないと判断しと地面を転がるが、
それを正確に追尾して爪は降り下ろされた。
一番近くにいたリリスも間に合わない早業。
それに、イズミの武器である太刀はガードが出来ない。
鉄をも簡単に切り裂く魔性の爪はイズミの体を紙の如く、至極簡単に引き裂いた。
断末魔の悲鳴すら上げられず、イズミは後ろにぶっ飛ばされる。
飛ばされるイズミの傷口からは血が噴水の如く溢れ出す。
太刀を握ったままのイズミは鞠の様に一度地面をバウンドし、動かなくなった。
血の池が出来る。

「イズミィィィッ！」

リリスが泣き叫び、血の池の中心に横たわるイズミに駆け寄ろうとするが、王はそんな甘い事はさせない。
今飛ばされたイズミに意識が集中しているリリスは格好の獲物。
先程イズミを引き裂いたその爪で、今度はリリスを引き裂きに掛かる。
マイルズとサラはせめてこちらを向かせようと尻尾に攻撃を仕掛けようとするが、鞭の様にしなった尻尾の攻撃により逆に飛ばされる。
なんとか二人共ハンマーの柄や盾で直撃は避けたが、飛ばされた分距離はまた開く。
ヴェンも間に合わない。

「っ……！？」

振り上げられたその爪の標的が自分だとリリスも気が付くが、遅い。
結局、親友（イズミ）の下にも行けずここで死ぬのか。
死んだら、またイズミと楽しく喋れるのだろうか？
迫る爪をただ見るだけで、避けはしない。
降り下ろされた爪がリリスを引き裂き――はしなかった。
突如黒い何かが飛来し、それが炎王龍の降り下ろされる前足のうちの一本に直撃。
血が少し舞い、軌道を逸らされ爪はリリスの真横の大地を抉った。
……飛来した物は、黒刀。
軌道を逸らしたそれは、リリスの前に炎王龍から立ちはだかる様に地面に突き刺さる。
飛んで来た方向を見て、リリスは絶句する。
……イズミが立っていた。
赤いザザミシリーズは半分以上砕け、その間から見える白磁の綺麗な肌は朱に染まり、痛々しい生傷からは血が滝の如く流れ落ちるが、立っていた。
飛ばされたと同時に砕けたヘルム。
分かる様になったイズミの表情は正に鬼神。
防具を着ていない時に拝める大きくて、綺麗で可愛い赤の瞳は鋭く炎王龍を居抜き、自慢と言っていた艶やかな黒髪には血がベッタリとついている。
……彼女が投げたのか。
太刀なんて武器は投擲に全く向いてないし、そもそもが大きいのでイズミの様な女の子が投げるなんて芸当はあり得ない筈なのに、彼女が投げたのか。
全身全霊、残りの生命力を込めた一撃で親友（リリス）を守ったのか。
茫然とするリリスにイズミはニコッと、いつも楽しく会話をしている時に見せる笑顔を見せて、指をピッと二本立てた。

「……貸し、二つ目だね。また……今度、美味しいお菓子とかデザートいっぱい奢ってもらうから覚悟して……ね」

ニコッと、最後に親友（リリス）に笑い掛けて、イズミ・グランツはゆっくりと後ろに倒れ、再び血の池に沈んだ。

TRES：　貸し二つ（後書き）

……長いので次話と二つに分けました。
だからと言って次話が書けてるわけではありません。
だって、一番次話が難しいもの。

こんにちは、神威です。
女の子を躊躇無く殺す神威です。
……おかしいな、連動している筈の恋狩ではこんなシーンはまず無いぞ？
仕方ないのですけどね。

リメイク前は名前すら出なかったイズミという子。
リメイク後にこんな見せ場を持っていたという事が発覚。
私が面倒だったのでカットしただけですけど。
だから書き直してるんですけどね。
彼女のモデルはイメージ的に、あくまでもイメージだけですが、ベルメールさんを幼くした感じ。
誰か？　ワンピース読んで下さい。

恋狩の後書きで黒鉄大和先生が宣伝してくれました。嬉しいのですが、果たして恋狩の読者にこんな血深泥な作品受けるのか謎です。
……無理やね多分。

それでは！
次回もなるだけ早く更新したいと思います。
感想なんかも募集中ですよー、気さくに書いていただいたら嬉しいです。

CUATRO：Gracias（前書き）

友へ、愛する人へ
ありがとう。

CUATRO：　Gracias

二度も命を守ってやったんだから、お返しとしていっぱいお菓子やデザートを奢ってもらおう。
絶対にリリスの財布の中身がスカスカになるぐらい食べてやる。
一度やってみたかった、ヴィルマのギルドの出張所兼酒場で「メニューにあるデザート全部下さい！」ってのをやってみよう。
夢の大人買いだ。
隣でうへぇ～と嘆くリリスの顔が目に見える。
間違いなくお金が足りないだろうけど。
うへぇ～と嘆くリリスだけど、一度食べ始めたらきっとまたいつも通り会話に花が咲くだろう。
あたし、そんなにケチじゃないし買った物はちゃんとリリスにもあげるから、絶対に盛り上がる。
またいつも通り、マイルズについて弄ってやろう。
顔を真っ赤にしながら噎(む)せるリリスの顔が瞼に映る。
……楽しみだ。

ゆっくりと血の池に沈む。
ベチャリと音を立てて、自らの血でできた池の中へ。
その顔は、最後に見せた笑顔のままだった。

CUATRO：　Gracias

「イズミィッ！」

最後の最後に笑顔を見せて、最後の最後にあんな事を言ったイズミの方へ、リリスは走る。

イズミの最後の攻撃により浅くとも傷を負った炎王龍。

その怒りがリリスを逃す筈もなく、再びリリスを切り裂き噛み千切るために爪を振り上げ牙をギラつかせるが、漸く炎王龍の下へ辿り着いたサラがその炎王龍の体にハンマーを叩き込む。

更にはヴェンが砲撃を開始し、マイルズが槍を構えて突進してくる。

リリスを狙う暇などなく、しゃあなしとばかりに後ろに飛び退く。

やっと、やっと親友（イズミ）の下へ辿り着いたリリスだが、目からは涙が溢れ、その無惨な骸をただ見る事しか出来ない。

引き裂かれ、砕け散った防具の隙間から見える傷は深く、肉や骨も見える。

……顔も大量の血が流れ青くなっている。なのにだ。

なのに、口元は少し上がり、表情は笑顔。

とても安らかな顔だ。

いい夢を見ている時は、こんな寝顔なのかもしれない、と思うぐらい。

まるでリリスに「安心して」と言わんばかりの安らいだ表情。

リリスは血の池と化した地面からそっとイズミを持ち上げる。

……冷たくなった体は、同い歳の女の子にしてはやけに軽く感じた。

「ハァ……ハァ……イズミ……」

広場の向こうで横たわる同期の仲間を見て、茫然と呟く青年ハンターが一人。
スネークだ。
今現在必死に戦っているマイルズとリリス。
力及ばず殺られたイズミ。
三人共自分と同期だ。
マイルズがスネーク達に退けと叫んで囮になった時、リリスとイズミはそれを無視して助けに行った。
ケーンとロットは命令を聞いて逃げた。
スネークは……リリスやイズミと共にマイルズを助けに行こうとしたが、微かな音が聞こえて立ち止まった。
それは、人の声。
まさかと思い崩れた建物の瓦礫をマイルズ達が必死に戦う中退かし、見つけた。
最後の四人。
瓦礫の下敷きになり動けないでいた男の四人組だ。
彼らを避難させれば任務完了。
マイルズ達の手助けになる。
全ての瓦礫を退かしたわけではなかったので、必死に全ての瓦礫を退かし、あるいは自らの得物、片手剣のガノフィンショテルで叩き割り、やっとの事で全て退かした。
後は立たせて避難場所である丘に連れて行くだけだ。
目立った外傷も無いし、歩けるだろう。
さぁ立ってついて来てくれ、そう言って一人の手を掴んで立たせるが、立った一人はバランスを崩して再び倒れた。
よく見ると、四人とも目がおかしい。
失明とかじゃなく、何か違う。
「あぁ〜、あぁ〜」と呂律も回っていないし、ただもがくばかり。

「まさか……くそっ！　砲弾神経症（シェルショック）か！？」

砲弾神経症（シェルショック）、それは度重なる爆撃や砲撃の音、炎、激しい怒号などが渦巻く激化した戦闘の中に長時間いるとたまになる病気というか、症状だ。

噂では老山龍（ラオシャンロン）と呼ばれる超弩級古龍を相手にしたとき、たまになるハンターがいるとは聞いた事があったのだが、まさかここでも起こるとは。

確かにこの広場で最も長く戦闘は行われたし、炎王龍の炎やスネーク達ハンターが使った爆弾などにより、なりそうな条件は揃っていた。

何より先程まで上にあった瓦礫のせいで辺りは暗く何も見えない中、燃え盛る炎の爆ぜる音や爆弾の爆発音、粉塵爆撃、などの音を聞けば気が狂う。

ハンターでもない一般人なら尚更だ。

……どうする？

一人でこの四人を運ぶのは不可能だ。

かと言って見捨てられない。

彼らはまだ生きているし、まだ死ぬには若い。

自分も若いが彼らも若い。

ここで死なせるわけには――

「スネェェェークッ！」

「――！？」

マイルズの叫び声が聞こえた。

慌てて振り返ると、そこには羽を羽ばたかせ、低空飛行をする紅蓮の巨体。

見間違える筈がない存在。

炎王龍テオ・テスカトルだ。

今まで彼らに気を取られて気付かなかったのか。
慌てて片手剣と盾を構える。
自分の装備は雪獅子と呼ばれるモンスター、ドドブランゴの素材を使ったブランゴシリーズ。
雪獅子と呼ばれる様に、炎にはめっぽう弱い。
せめて、彼らだけでも守り抜かなければ。

「オラァァァッ！」

片手に握った剣を大上段に振り上げて、低空でホバリングする巨体に挑み掛かる。
足を斬りつけるが、ガァンと鈍い音がして弾かれる。
が、それでいい。
この武器、ガノフィンショテルは睡眠毒を刃先に含む。
弾かれようが毒は少しずつ注入され、いつか眠る。
それまで自分が耐えればいいのだ。
踏み潰そうと後ろ足で地面を叩き付ける炎王龍の攻撃を転がって避け、再び剣を振る。
こっちに気を取られろ。
彼らを見るな、俺を見ろ。
そう願いながら。
が、王はそんなスネークの願いを打ち砕き、横たわる四人の方に顔を向け、ホバリングしながら一度首を天にもたげた。

「……マズイッ！？」

スネークは無意識に盾を構え、王と彼らの間に割って入って行ったのだった。
それが何を意味するのか、ちゃんと理解しながらもである。

リリスから気を逸らしたマイルズ達三人は追撃の為に飛び退いた炎王龍を追って得物を構えて走っていた。
マイルズは槍と盾を構え炎王龍に突撃し、サラは自分を軸にして独楽の様にハンマーを回転させる。
たとえ弾かれようとも二人の執拗で強力な攻撃は続く。
炎王龍も流石に呻き声の様な声を上げて怯む。
サラの目が光る。
今だとばかりに回転させていたハンマーを一気に下段から大上段にまで振り上げた。
その強力な一撃は炎王龍の顎を叩き上げる。
すると炎王龍はクラクラと体が揺れ、動かなくなる。
俗に“めまい”と呼ばれる状態だ。
今なら完全に相手はフリー、こんなチャンスはそうそう無い。
サラにマイルズにヴェン、三人が一斉に襲い掛かる。
イズミやテラの仇、取らせてもらう時が来た。
マイルズの目の端ではイズミの骸を抱えて泣いているリリスが見える。
今この場は戦場だが、親友が死んだのだ。
まだ二十歳にもなっていない、同い歳のマイルズが思うのもあれだが、まだまだ青い子供だ。
それに、イズミは最後の最後までリリスを守ろうとした。
あの姿を見て泣かずにはいられないだろう。
リリスの思いもマイルズは槍の穂先に乗せて、串刺しにせんと突き出す。
弾かれるが関係無い、体勢が持ち直し次第何度も突き刺す。

ヴェンも一撃、真っ先に龍撃砲をぶっぱなし、続いて砲撃を何度も撃ち込む。
刃が通らないなら砲撃で甲殻を焼くまでだ。
しかしそのチャンスタイムは早々に終わる。
僅か数十秒でハッと“めまい状態”から復活する。
今まで自分を袋叩きにしてきたハンター達を蹴散らすために、爪と尻尾を振り回す。
今までよりも更に早いその攻撃。
よく見ると口元から黒煙と炎がちらついて見える。
ハンター達が言う『キレた』状態だ。
この状態はいつもよりも攻撃の威力は上がり、動きも早くなる。
元から圧倒的な炎王龍ならば、更に注意が必要だ。
爪や尻尾を掻い潜り、三人とも一度距離を置く。
すると炎王龍は一度体を縮込ませた。
それは、あの攻撃の前に行う動作。

「……マズイッ！？　全員、全力で逃げなさい！」

サラが叫ぶ。
マイルズもヴェンもあの前動作が何を表すか分かっている。
急いで武器を背中に戻し、全速力で走り出す。
炎王龍テオ・テスカトルは縮めた体からキラキラと光る粉塵を飛ばし、羽を羽ばたかせてそれを辺りに飛散させる。
マイルズはリリスの方へ走り、お前も逃げろと叫ぶ。
リリスはずっとイズミの方を見て泣いていたのだが、マイルズの声に反応して顔を上に上げる。
目が泣き腫れて真っ赤になっていた。
しかしリリスもハンター。
その身に迫る粉塵を見てすかさず立ち上がり、イズミを抱えて走り出す。

「……」

そんなリリスを見てマイルズは無言で走る方向を切り替える。
リリス達の進行方向からして横に走り、イズミの形見である黒刀を地面から引き抜いて再び炎王龍から離れる様に走る。
……これをあの爆発に巻き込ませたくなかったから。
ガチンッと後ろで音がする。
すると一気に爆発が巻き起こり、荒れ狂う暴風がマイルズ達を吹き飛ばす。
幸い誰も爆発には巻き込まれなかったので無事だ。

「ガォォォォァ！」

爆発の中心点で炎王龍は咆哮を爆発音にも負けないぐらい轟かせ、羽を動かし始めた。

「逃げるのかっ！？」

古龍は一定量のダメージをくらうと逃げる習性があるという。
仇を討てないのは残念だが、元々自分達ではどうにもならない相手。
逃げてくれるなら大金星だ。
少しの無念と期待を込めてマイルズは言うが、ハズレ。
炎王龍テオ・テスカトルは低空飛行というか、ホバリングをするだけだった。
こちらに来るかと思いきや、クルリと反対側を向く。
その先には、スネーク。
何かを起こそうとしている。もしかしたら、最後の住民を見つけたのかもしれない。
必死に何かを引っ張り立たせたが、その何かはゆらりとバランスを

崩しと倒れた。
死んでいるのか？

「スネェェェークッ！」

何にせよヤバい。
間違いなく炎王龍の狙いはスネークだ。
必死に走り追い掛けながら、スネークの名を呼ぶ。
スネークが反応し、炎王龍テオ・テスカトルに気が付いた。
逃げてくれと願うマイルズだが、スネークは握っていた片手剣を振りかざし、炎王龍に立ち向かう。
足を斬り掛かるが弾かれる。
踏み潰そうと地面を叩き潰す炎王龍の攻撃を転がって避け、何度も刃を振る。
自分に気を向かせ様と必死に見える。
あるいは、あの片手剣に仕込まれた睡眠作用のある毒が効くのを待っているのか。
だが無情にも、炎王龍はスネークが守ろうとしていた物の方を向く。
首を天に向けた。
……ブレスの前動作だ。
スネークは盾を構え、その間に割って入った。

スネークにはその一瞬が、やけに長く感じた。
相手が首をこちらに向け、その口から灼熱の炎を吐き出すだけのそ

の一瞬が。
走馬灯が頭の中を駆け巡る。
初めてマイルズと出会ったのは五歳。
お互い小さい頃からハンターを目指していた身。
直ぐに意気投合した。
ドンドルマのハンター養成所に行くときにはマイルズだけじゃなく、同じくハンター志望のリリスとイズミも仲間に入っていた。
　養成所時代は、やれ氷の女神と呼ばれる後輩が可愛いだのなんだのと下らない会話をマイルズとして、リリスやイズミに変態とぶん殴れたりもした。
一緒に最高のハンターになろうと夢を語ったりもした。
　卒業後は皆で故郷（ヴィルマ）に戻り、先輩ハンターで自分達が養成所に行く前からハンターをしていたゾルフさんや、まだまだルーキーなのに頭角を現してたテラさんのと一緒に狩りに行き、腕を磨いた。
必死に、着実に実力を付けてきた自信はあった。
が、炎王龍テオ・テスカトルの前ではこのざまだ。
情けない。
　炎王龍の口から自分を焼き尽くす炎が吐き出される。
……この盾じゃ後ろの四人も守れないし、自分も死ぬだろう。
砲弾神経症（シェルショック）により体のバランスは取れないし、そもそも今自分に迫る『死』を分かってるのかも怪しい。
何もせずに、何も守れずに死ぬのは遠慮したい。
せめて、死に際に一矢報いてやろうではないか。

「くらえこの、化け物がぁっ！」

　さっきイズミが見せたあれのパクりだが、これしか思い付かない。
自分の手にある片手剣を炎王龍の角に向かって放り投げる。
いつもよりも力が出た気がするそれは、吐き出される炎を掻い潜って角に当たる。

ガァンッと弾かれたが、少しだけ罅（ひび）が入ったのが見えた。
……上出来だ。
スネークの唇の端が吊り上がる。
だが、同時に涙も流れる。

「悪いなマイルズ……夢、俺は叶えられねぇ。だけど、お前は叶えろよ。……イズミ、俺も今からそっちに行く。ストーカーって言うなよ？　前言ったろ、俺はお前に惚れてんだ」

炎がスネークを呑み込む。
不思議と熱さは感じない。
多分、即死だからだろう。
だが、スネークは最後に言葉を残す。

「マイルズ、今まで仲間（つれ）でいてくれてありがとう。お別れだ」

スネークの意識は、風前の塵の如く消し飛んだ。

ガァンッと音を立ててスネークの片手剣が弾き飛ばされる。
クルクルと空中を回転しながら落下していく。
ガシャンと乾いた音と共に地面を一度跳ね、もう一度ガシャンと音を立てて転がる。
スネークは炎に飲まれ、黒い炭になった。
最早何がなんだか分からない状態。
防具も全て灰になったのか、どの炭の塊がスネークなのか分からない。

「スネェェェークッ！」

マイルズは無意識に叫ぶ。

何度も何度も。

何度も何度も何度も親友（スネーク）の名を呼ぶ。

一緒に語った夢はどうした、まだ全然果たせて無いじゃないか。

まだ、下位ハンターで、まだまだ最強には程遠いじゃないか。

一緒に最強のハンターになるんじゃなかったのか。

ゾルフさん達と一緒にここヴィルマをドンドルマにも負けない大都市にするんじゃなかったのか。

なんで、なんでスネークもイズミもテラも死ぬんだ。

なんで、ハンターの犠牲者が八人になるんだ。

なんで、避難させようとした人達も死ぬんだ。

マイルズは槍の柄を強く、強く握り締める。

散った仲間の、イズミの、テラの、スネークの仇。

悠々と低空飛行をしているあの“バカ野郎”に向かって槍を向ける。

狙いすまして突撃しようとマイルズが腰を低くした瞬間、銃声が響いた。

同時に何か灰色の影が高速で炎王龍に駆け寄り、背中に背負う巨大な桃色の剣を振り下ろす。

その強烈な一撃は誰も越えられなかったあの強固な甲殻を切り裂き、血を吹かせる。

と言っても、まだまだ斬り込みは浅い。

畳み掛け様と大剣を振りかざすが、何度もくらう義理など無い。

炎王龍は一度大きく羽を動かし、まとわりつく鬱陶しい灰色の影を吹き飛ばす。

だが、たとえその影を吹き飛ばそうと銃声は止まない。

堪えるのか、その場に舞い降りた炎王龍は弾の飛んでくる方へ飛ぶように走り、辺りを見回す。

その目が何かを捉えた。
ギリギリ、本当にギリギリ残っていた建物の方を向き体を仰け反らせ、吐き出すは魔性の業火。
全てを焼き尽くし、灰に、炭にする火炎。
辛うじて建っていた建物はあっさりと崩れ、炎に包まれる。
いぶり出される形で二つの影が現れた。

「熱っ！　猫舌じゃねぇのかよこいつは！　挙式前の俺を焦がす気か、焦げ臭い花婿は遠慮したいぜ」
「猫じゃないでしょう、この見た目は。それに今ここでそんな話しないで下さい。死にますよ？」

忽ち（たちま）燃え上がり、崩れて倒れる建物の影から二人のハンターが現れた。
青と赤の防具、ジャンとティリアだ。
そこに先程まで炎王龍テオ・テスカトルに大剣を振りかざしていた灰色の影、ゾルフが合流する。
巻き起こされた暴風で飛ばされただけであり、怪我は無い。

「……目視出来るだけでもこの有り様か」
「……減ったな、大分と」
「イズミ……」

やっと姿を現した狙撃者達を睨み付ける炎王龍を余所に、ゾルフ達は現状を見て苦虫を噛み潰した様な顔をする。
二人はヘルムで表情自体は分からないが、声の感じからしてどんな表情かは容易に分かる。
ジャンが言った通り、まず人が少ない。
先にロットとケーンから聞いていたが、更に減っている。
リリスに抱えられているイズミは腹から血を流し、別の場所には血

溜まりがある。……彼女の血でできている事など一目瞭然だ。
流れ出た、あるいは今も流れ続けている血の量を見るに最早生きてはいないだろう。
それに、スネークもいない。
彼の片手剣のみ向こうの方に転がっているが、肝心の彼がいない。
近くに人らしき形の炭が五つ。四つは横たわり、一つはまるで片手剣とセットの盾を構えた様な姿をしている。
……スネークだろう。
死して、炭にまでなってなお立っている。

「……苦しいな」
「まったくだ……」

大きく首を前に振る男二人。溜息だろうか。
そんな二人を見てティリアもまた、自らの武器、ライトボウガンを強く握る。
今まで三人を睨み付けていただけのテオ・テスカトルが動いた。
地面を踏め締め、飛び掛かろうと身をたわめる。
――が。

「うらぁっ！」

ゾルフ達の後ろから、小さな球が投擲された。
その瞬間ゾルフ達は一斉に顔を背け腕で目を覆うが、テオ・テスカトルには“それ”が何か分からない。
空中で“それ”は弾け、莫大な量の光が炸裂する。
ハンターが使用するアイテムで、閃光玉と呼ばれる。
名前の通り、閃光により相手の視界を数十秒ないし数秒ホワイトアウトさせる。
これにより相手は一時的にハンター達の居場所が分からなくなり、

特定のモンスターは動けなくなる。
が、残念ながら炎王龍の動きを封じる事は出来なかった様だ。
手当たり次第爪を振り回している辺り、ハンター達が見えていないのは分かるが、暴れ回って中々近付けない。

「ナイスだロット。ジャン、ティリア、狙撃しながら移動だ。サラ達と合流する」
「はい！」
「りょーかい。やっと合流だ、そろそろ反撃と行こうぜ」

ゾルフ達三人と後ろに控えていたロットとケーン、総勢五人が手当たり次第爪を振り回す炎王龍を避けながら移動する。
その間もティリアは走りながら弾を連射し、威力が高いが動きが制限されるベビーボウガンのジャンはいち早くサラ達と合流、そこから撃ちまくる。
実はガンナーであるケーン。
ヴェンと同じくテラに憧れいたケーンは弓を武器にしている。
ソニックボウと呼ばれる虫の素材でできたその弓は、放つ度に矢の周りに雷が纏われる。
相手は憧れだったテラを殺した相手。
自分よりも遥かに格上。
全ての矢が貫かずに地面に落ちようとも、射続ける。

「……遅い。スネークもイズミも殺られたわ」

やっとゾルフ達と合流出来た。
が、遅すぎるとサラはいつに無く、ゾルフとジャンの二人を睨む。
目の前で何人もの仲間を殺されたのだ、気持ちは分かるので二人共何も言えない。
サラ先程までスネークの仇と突っ込もうとしていたマイルズを押さ

え付けおり、ヴェンはイズミを抱えて放心状態のリリスの前に立って盾を構える。

「……わりぃ」

「……言い訳はしない」

二人揃って小さく答える。

事実自分達がもっと早くここに着いていれば犠牲者は減っていただろう。

イズミもスネークも死ななかっただろう。

だが、それは所詮『たられば』の話。

もしかしたらゾルフ達がいても二人共死んでたかもしれないし、誰も責める事は出来ない。

炎王龍を抑えきれなかったサラやマイルズにも非はあると言えばある。

「……それ、テラ？」

「形見だ。……マイルズ」

「――？」

サラがゾルフの腰にぶら下がった紫の防具の一部を見ながら訊く。

ゾルフは前に訊かれた時と同じように答え、下を向いていたマイルズに何かを投げる。

咄嗟に受け止めたそれは、ガノフィンショテル。

スネークの片手剣だ。

「……すまない。俺達がもっと早く――」

「仕方ないですよ。誰もゾルフさん達を責めれませんし、仮に俺がゾルフさんを責めたらスネークに顔向け出来ません」

謝ろうとするゾルフの言葉を遮り、マイルズが言う。
片手剣をテラの腕よろしく、マイルズはポーチから取り出した紐でくくって腰に下げる。
片手剣（これ）を受け止めた瞬間、不思議と心が落ち着いた。
……そうだ。
まだ俺にはやるべき事がある。
スネークの仇討ちじゃなくて、故郷（ヴィルマ）を守るという大事な事が。
スネークやテラが愛したこの街を。

「……すまない」

そんなマイルズを見てゾルフは再び謝罪の言葉を言って向こう側を見る。
ちょうど閃光玉による一時的な足止めから解放された様だ。
静かにこちらを振り向いた。
口から零れる炎と黒煙。
キレている。
だがゾルフはそれに臆さず言う。

「……逃げたい者は逃げろ、避難場所の丘へ行け。ここに古龍がいるんだ、近くにいたモンスターはみんな逃げていないだろう。ここよりは遥かに安全だ。だがもし逃げないのなら、俺に続け」

そう言うと他の仲間の返事も聞かずにゾルフは地を蹴って走り出す。
背中に担いだ大剣の柄を握り、姿勢を低くしてグングン間合いを詰めていく。
それに習い直ぐにサラが走り出し、ジャンとティリアのガンナー二人は弾を装填し直してから別々の方向、炎王龍テオ・テスカトルの側面から攻撃するために回り込む。

マイルズも一度槍を背中に戻し機動力を上げ、走る。
ヴェンにロット、ケーンも負けじと足に力を込めた瞬間、後ろから声が掛かった。

「……待って」

静止の言葉に咄嗟に反応した三人は前につんのめりながらもなんとか止まり、振り返る。
そこにはリリス。
静かに立っており、後ろにはイズミの骸が寝かしてある。
マイルズが持ってきてくれた黒刀は背中の鞘に戻されていた。

「三人は逃げないのね？」

静かに、リリスが訊いた。
三人共答えは一緒。
すかさず頷くとリリスは一度後ろのイズミを見て、再び三人を見る。

「イズミを向こうの、この戦闘に巻き込まれない様な場所に持っていってくれないかな？」
「……リリスさんはどうするんです？」

お願いと頼むリリスに、ヴェンが訊いた。
雰囲気からして戦いに行くつもりだろうが、無茶をしそうな感じもする。

「戦うの。皆を守らないとイズミに怒られちゃうしね」
「……死にませんよね？」

静かに、炎王龍と交戦し始めたゾルフ達を見ながらリリスが答え

る。
ヴェンが更に質問を飛ばすと、リリスは何故かクスッと笑った。
「死なないわ。……だって、イズミのお墓の前にこれでもかって言うぐらいお菓子とデザート積まないといけないもの」
それはイズミの遺言。
『奢ってよね』と言って散った親友。
その約束を守るために、リリスは死ぬつもりなど無い。
ヴェンはリリスの目をしっかりと見た後、ロットとケーンに目配せをして、三人でそっとイズミを運んで行った。
リリスはヴェン達が運び始めたその瞬間に駆け出し、背中にある二本の剣を引き抜き、一気に突貫する。
ただの攻撃は弾かれる。
だから、なるべく鱗や甲殻の少ない関節部を狙う。
切れ味が優秀なこの武器ならなんとかなる筈だ。
一気に間合いを詰めたリリスは正面にいるゾルフとマイルズに気が向いている炎王龍の後ろ足の関節に、二本の剣を叩き込む。
狙い通り、少しだが切り裂けた。
「……よしっ！」
これならいける。
リリスの攻撃に気付いた炎王龍は尻尾を振って迎撃するが、リリスはしゃがんで避ける。
一瞬後ろを見た炎王龍テオ・テスカトルには隙が生まれ、そこにゾルフがつけ込む。
大上段に振り上げられた大剣を振り下ろし、顔の鱗を弾き飛ばす。
切り裂くとはいかなくとも、血は舞うし、そこそこ効いてる筈だ。
更にマイルズがそのゾルフが鱗を弾き飛ばした部分を的確に槍で突

き、追い討ちとばかりに横から現れたサラのハンマーがテオ・テスカトルの鼻頭を叩き潰す。
無論潰れてはいないが、流石に威力は高い。
「グゥッ！？」っと呻き声の様な声を漏らして怯む。
そこに更に銃声が響く。
すると羽に何かが突き刺さり、爆発し、また別の方向からは別の銃弾が飛んでくる。
当たった瞬間水をぶちまけるそれは水属性の銃弾。
燃え盛る鱗の炎を鎮め、炎王龍にダメージを与える。
リリスは尚も関節部を集中的に攻撃し、連携は抜群。
同じ街を拠点にしているハンターだ。
それも小さい頃からお互いを知っている様なメンバーだ。
連携は取りやすい。

「ゴォォォァァッ！」

テオ・テスカトルは体を縮こませ、キラキラと沈みかけた西陽を反射する粉塵を飛ばす。
危険を直ぐに察知したサラが回りに逃げるよう指示を飛ばし、自分も全力で逃げる。
ガンナー、即ち遠距離型のジャンとティリアは構わず撃ち続けるが、近接武器のサラ達にはこの攻撃は脅威だ。
粉塵が飛散しきれない場所まで走る。
一度飛ばせば直ぐに点火するという事は、飛散距離や時間に一定のボーダーラインがあるという事だ。
ならば、そのラインを越えれば絶対安全なのだ。
――が、サラの、ゾルフの、マイルズやリリス、ティリアも予想外にしていた事が起きた。
粉塵の届かない距離にいた筈のジャンのヘビーボウガンがボシュウッと急に音を立てたのだ。

よく見れば、テオ・テスカトルの撒き散らした粉塵ではないか。
風。
テオ・テスカトルは羽を羽ばたかせて粉塵を飛散させるが、それ以外にもまだ方法はある。
それが風だ。
自然の気まぐれが、ジャンに牙を剥く。
ヤバいと思うジャンは咄嗟にヘビーボウガンを放して後ろにバックステップで跳ぶが、遅い。
既に牙を鳴らした後だ。
　点火された炎は粉塵を伝い爆発を巻き起こす。
荒れ狂う暴風と炎、それにジャン巻き込まれ、吹き飛ばされた。

「ジャンッ！」

　急いでサラが、他の全員がジャンの方へ駆け付ける。
幸いテオ・テスカトルは爆発のど真ん中で咆哮を上げており動く気配は無い。

「――っ！　――ぃ！　――ぁがっ！」
「……っ！？」

　幸い体の全てが丸焦げになっているわけでもないジャンを見て真っ先にジャンの元へ辿り着いたサラは息をつくが、直ぐに異変に気が付いた。
地面に丸まっているジャンが、苦しそうに呻いて動かない。
サラは嫌な予感がして、ジャンに駆け寄り踞（うずく）ったジャンを見る。
……その光景に息を飲んだ。
　……両の腕が無い。
粉塵が付いたヘビーボウガンからバックステップで距離を取ったとはいえ逃げ切れなかったのか、それとも腕にも粉塵が付いてたのか、

ともかくジャンの両腕は吹き飛ばされ、肘より先が無い。
血が溢れ出し、ヘルムは吹き飛び、露になったジャンの顔は苦しそうに歪んでいる。

「ジャン！」
「……騒ぐなサラ、生きてる」

涙を浮かべてジャンにしがみついたサラにジャンは静かに答え、遅れてやって来たゾルフ達に檄を飛ばした。

「バカ野郎、お前ら全員集まったらあいつの格好の的だろが！　散れ、俺は問題無い！　だからお前らは――」
「強がるな！」

血が流れ青くなっていくジャンの顔。
それでも檄を飛ばそうとするジャンをゾルフが遮った。

「まだ間に合う。ハンターは無理でもまだ生き残れば先はなんとでもなる。ロット、ケーン、お前達二人はジャンを避難場所に運んで治療、その護衛に当たれ！」
「「りょ、了解しました！」」

イズミを運び、やっとこさ合流したヴェン達三人の内の二人にゾルフは命令する。
有無を言わせないその強い語気に二人は上ずった声で返事をし、ジャンに駆け寄る。
のだが――

「ゾルフさん！」
「――ちっ！　空気読め、このクソ野郎！」

大地を蹴ってテオ・テスカトルが地面のギリギリ上を滑る様に飛んできた。
いち早く気付いたマイルズとリリス、ヴェンは横へ待避しゾルフの名前を呼ぶ。
ゾルフも上位ハンターらしく、直ぐ様反応して横に跳んで回避。
ロットとケーンも慌てて逃げた。
ギリギリ、正しくテオ・テスカトルの目と鼻の先にジャンと、ジャンを抱えたサラがいる。
最悪の展開だ。

「……逃げろサラ。お前は俺と違って戦える、お前死ぬな！」
「……なんでよ……なんで自分が死ぬ前提で話ししてるのよ……挙式もまだなのに……」
「花嫁が炭になるのと花婿が炭になるの、なるなら断然花婿だろ？」

ヴィルマの上位ハンター、サラとジャンは近々結婚する予定であった。
だからサラはこの街のハンター達のリーダーであるゾルフではなく、無意識にだが『ジャン達』と言っていたのであり、ジャンも花婿云々と言っていたのだ。
それはゾルフ達も勿論知っていた事であり、だからこそ今、様々な意味で『最悪』の状態なのだ。

「ヴィルマのハンター、碧砲（へきほう）のジャンはここで終わり。変わりにお前が生き残る」
「……」

碧砲のジャン。
これがジャンの通り名だ。

紫蘭のテラと同じく、彼もまたかなりの実力者。
本当はテラさえも凌ぐ。
　炎王龍が体を仰け反らせた。
ゾルフ達が必死に斬りかかり、あるいは砲撃を行うが止まらない。
格なる上はとティリアが眉間に一撃、貫通弾を撃ち込んだが、無情にも弾かれた。
もう、止まらない。

「逃げ――！？」

　血が流れ出す肘でサラを押し、最後に叫ぼうとしたジャン。
が、サラの唇によって防がれた。
驚くジャンにサラはニッコリと笑い、ハンマーの柄を握り、ポーチからネットを取り出した。。

「……女の子っていう歳でも無いけど、ともかく女は愛する人が自分のせいで死ぬのは耐えられないの」

　炎王龍の口から炎が吐き出される。
ゾルフが何か叫び、マイルズ達はただ固まって見る事しか出来ない。

「……だから生きて、ジャン。私の代わりに長生きしてね、上で気長に待ってるから。最後に……好きって言ってくれてありがとう。初恋の人にそう言われたから私、その日は嬉しくて眠れなかったのよ？　本当に嬉しくて。……ジャン、ありがとう、愛してる」

　ネットでハンマーの先にジャンを縛りつけ、サラがハンマーの柄を振りかざす。
精一杯の力で振られたハンマーは宙を舞い、炎の上を通過し、見事にゾルフの上に落ちてきた。

ゾルフが慌てて受け止めるのを見て、サラが笑う。

「う～ん。私、やっぱり女の子らしく無いわね。どうやってジャンみたいな素敵な人落とせたのかしら？」

テラやスネークを呑み込んだ魔性の業火は、サラをも呑み込んだ。
ジャンの悲痛な叫びが響くが、後には何も残らない。
ただ、一つの炭の塊が横たわるだけである。
ジャンは両腕を失った痛みよりも、生涯の伴侶を失った痛みの方がやはり、痛く感じるのであった。

ゾルフはハンマーにネットで無理矢理くくりつけられたジャンを見て、なんと声を掛ければ良いのか分からなくなっていた。
恥ずかしながらゾルフには婚約者どころか彼女もいない。
ジャンの真の苦痛はゾルフの想像の範疇を越えている物だ。
ゾルフ自身、ずっと仲間だったサラを失った悲しみは大きいが、ジャンと比べたら小さい。
くくりつけられ動けないのに、肘より先が無く、傷口から血が溢れるのに必死にもがき、サラの名前を呼ぶジャンに、どうやってやれば良いのか分からない。
……だから、サラが望んでいた事をしようと決意した。

「ロット、ケーン、ジャンを！」
「――ゾルフ！？　待て、待ってくれ！　サラが！」
「……お前が生き残る事を、サラは望んでいた」

あまりにも悲痛な叫び。
ゾルフは親友（ジャン）を見られない。
ロットとケーンは直ぐにハンマーにくくりつけられ横たわるジャンの下にやって来て、応急措置としてポーチから包帯を取り出し、傷口をグルグル巻きにしながら慎重に運ぶ。

「ゾルフ！」
「……すまない、ジャン」

先程よりも少し後ろから聞こえるジャンの声に小さく答えるゾルフ。
もう、あまりにも悲痛で後ろを振り返れない。

「……だったらお前は生き残れ！　お願いだ！　妻（サラ）がダメなら親友（おまえ）だけでも！」

更に遠くから、ジャンの叫びが聞こえた。
静かに、親友（ジャン）の言った言葉を守ろうとゾルフは決意する。
テオ・テスカトルは仕止め損ねたジャンを殺すべく、慎重に運ばれていくジャンの方へ地面を蹴った。
が、突如下から振り上げられた大剣を顎にくらい、急停止させられる。
無論、止めたのはゾルフだ。
静かに、ゾルフは闘志を燃やす。
マグマの様にグツグツと温度を上げる心を抑え込み、その力を剣を振るう時のみ解放する。

「……ここはこの、灰狼（かいろう）のゾルフの名に懸けて通さん」

大剣を構え、煮えたぎる心を抑え、ゾルフが言う。

灰狼のゾルフ。
それがゾルフの通り名。
全てを懸けて、ゾルフは炎王龍を潰しにかかる。
王に狼が牙を剥いた。

CUATRO：　Ｇｒａｃｉａｓ（後書き）

Ｇｒａｃｉａｓ。
スペイン語で『ありがとう』。読み方はグラシアス。
サブタイトルに外国語を使うのは私、神威の定番ですが、こちらでは初めてですね。
因みにＣＥＲＯ～ＣＵＡＴＲＯはスペイン語で０～４です。
モンハンはＰＳ２でＤＯＳって使ってましたし、基本をスペイン語にしてみました。

今回死んだ二人の最後の言葉は元々「ありがとう」にすると決めていたので、サブタイトルのＧｒａｃｉａｓは自動的に決まりました。
でも、まぁ有名ですから皆様ご存知でしょうがねグラシアス。
グラッシアスって言っても通じますよ、私の経験上では。寧ろこっちの方が正しいのか？
まぁいいや。

わー、本編で人がばったばった死んでますー。
忘れがちですが、地味に二人がドンドルマから出発してるんですけど、間に合うのかなぁ？
三日掛かるって設定なんですよー。

気軽に……こんな作品に気軽に感想送れるのかは分かりませんが、感想なんかを送っていただければ幸いです。
次回もなるだけ早くに更新します。
でわ！

ＣＩＮＣＯ：　ヴィルマの大英雄“灰狼”ゾルフ・ヴァルフレア（前書き）

彼の者の背中に逃げ傷無し

狼の牙は王の証を砕き、誇り高きその咆哮は天を衝く

さぁ覚悟せよ、灰狼の牙は何よりも鋭い

ＣＩＮＣＯ：　ヴィルマの大英雄〝灰狼〟ゾルフ・ヴァルフレア

ゾルフの灰色の影が霞む。
迫る爪を掻い潜り大剣を振りかざし、弾かれようが関係無い。
大質量の武器である大剣。威力は数ある武器の中でも最高クラスだが、反対に機動力は殆ど無い。
だがゾルフはその大剣使いとは思えない程鮮やかに、素早く立ち回る。
爪を躱し、牙を避け、一瞬の隙を見つけては大振りの一撃を叩き込む。
時には自らの大剣の大質量を利用し、振った瞬間に地を蹴って長距離移動という芸当まで見せる。
少しでいい。
少しでいいから着実にダメーシを積んでいき、倒す。
塵も積もれば山となる、正にそんな戦いだ。
大剣は巨大だ。
今ゾルフが縦横無尽に振り回し、駆け巡れるのは周りに、少なくとも傍には誰もいないからだ。
近接武器のマイルズとリリスには今までゾルフが来るまでの間ずっと負担を掛けていたので戦火から離れ、休む様に言ってある。
遠距離型のティリアが援護射撃をし、そのティリアをヴェンが守る。
それが今のフォーメーションだ。
……今ここで、こいつを倒さなくては。
仲間の仇、取らせてもらう。
灰色の影が更に加速した。

……なんだこれは？

ヴィルマを拠点にしているハンター、マイルズは壊滅状態と言っていい程ボロボロになった故郷を見て立ち尽くす。

すっかり陽は沈み、もう既に夜なのに街を包む炎のせいで昼間の様に明るい故郷を。

街付きのハンター達、総勢十七人で必死に戦い住民を避難させ、なんとか被害の増加を抑えているが、それでも被害がゼロとは全く言えない。

スネークも、イズミも、テラもサラも死んだ。

この街は比較的安全な場所だった。

近くに沼地と呼ばれるフィールドはあるが、大したモンスターが現れた事は一度も無い。

せいぜい中級飛竜のフルフルぐらいだ。

だからこそここまで栄え、今後も栄え続けるだろうと思っていた。

“やつ”が来る迄は。

全ての始まりは今朝、まだ太陽が昇りきってない時間帯。

マイルズが家で寝ていると警報の鐘の音が突然、聞いたことの無いくらい大きな音で街中に響き渡った。

何事かと普段クエストを受注するギルドの出張所兼酒場に駆けつけると、見張りをしていた今は亡き親友、スネークが青ざめた顔で言ったのだ、「炎王龍が来た」と。

炎王龍テオ・テスカトル。

古(いにしえ)より炎を統べる王。

英雄と呼ばれたハンター達を何人も塵にした魔獣。

マイルズの様な下位ハンターでは相手にもならない怪物。

それがこの街にやって来た。

急いで住民達の避難を開始させ、ギルド本部に救援要請を出し、街付きのハンター十七人でなんとか住民全員が無事に避難出来る迄

の時間稼ぎをしようと迎え撃った。
この街、ヴィルマにはドンドルマやミナガルテの様な立派な対モンスター兵器が揃っているわけではなかったが、数台のバリスタがあった。
なので時間稼ぎぐらいは出来るだろうと思っていたのだ。
……だが、“やつ”にそんな物は通じなかった。
バリスタが機能していたのはたったの二時間。
直ぐに“やつ”の業火に焼かれ、ただの焼け焦げた障害物になった。
住民達を避難させようにも危険過ぎて下手に誘導出来ず、結局被害が出てしまった。
苦肉の策でギルド出張所の役員に頼んで避難出来た住民達だけドンドルマに疎開させてくれと頼んだが、住民達がここに留まると言い張って聞かず、結局避難場所である近くの丘陵地帯にまだいる。
ジャンは治療をちゃんと受けているだろうか？

「ちくしょう……っ！」

焼け焦げ、炎に飲まれて崩れていく建物を見ながらマイルズは悲痛の声をあげた。
ハンターを目指し、ドンドルマのハンター養成所で必死に学んで故郷に戻ってきた。
それから様々なクエストをこなし、まだ一人では無理だが轟竜ティガレックスを倒せるまで成長した。
だからだろうか、“やつ”が来た時も『俺や俺達ならなんとかなる』と思っていたのかもしれない。この身を包む轟竜の鎧を見て慢心があったのかもしれない。
だが、実際はこれである。
その慢心は幻想で、先輩ハンターや同期、後輩も次々と死んでいった。
今現在この街で戦えるハンターは五人。

もう、五人だけ。
向こうで咆哮を轟かせ、街を焼き払う“やつ”を見ても止めようとする気力が出なくなっていた。

「何そこで突っ立ってんの!?　ほら、さっさとあれ片付けて復興作業よ!」
「……リリスか。もういいのか?」

マイルズが振り返るとそこにはリリスが立っていた。
薄い赤色の防具、フルフルDシリーズを纏い背中には刃が美しい双剣、ホーリーセイバーが煌めく。
少しつり上がった、気が強そうな碧眼にブロンドの髪。
美少女と呼ぶに相応しいが、今はまだ目は赤く泣き腫れているし、涙が頬を伝った跡もある。
イズミという親友を亡くしたのだ、当たり前か。

「ほら、ボサッとしてないで早くあれ倒そう、皆の仇だよ」

マイルズの隣まで歩き、強気に言う。
彼女の防具は既に至る所が焦げており、今まで“やつ”と激戦を繰り広げていた事を無言で語っている。
“やつ”が今までのモンスターとは次元が違うレベルだと分かっていながらも、倒そうと、仇を取ろうと言う彼女。
その身をもって“やつ”がどれだけの化物かを知っているのに尚挑もうとする彼女。
親友を亡くしたのに、目の前で殺されたというのに。
マイルズには彼女が眩しく見えた。

「……どうしたの?」

ずっと黙りっぱなしのマイルズを見て不思議そうにリリスが顔を覗く。
マイルズもまたスネークという親友を亡くした。
リリスもイズミもスネークも、マイルズと同期。
共に修行を積んで、嬉しさも悲しさも分け合ってきた仲だ。
マイルズの気持ちは分かるが、リリスの中のマイルズは、こんな時は空元気でも周りを励まそうとする奴だ。
なのに、今は返事が無い。

「……どうしてお前はそんなに強い……？」

マイルズの顔を見て、その言葉を聞いた瞬間、彼女の目は信じられない物を見たかの様に目が見開かれた。
……彼女の目に映ったのは、今まで見た事が無い程虚ろな目をしたマイルズの顔だったのだ。
彼女の知る限りマイルズという青年は物事を簡単に諦める事はしなかった。
むしろ恐れ知らずというか、ともかく諦めの言葉を吐く奴ではなかった。
たとえ親友や仲間を亡くしても、諦めの言葉なんて言う奴ではなかった筈だ。
リリスは暫し黙る。
マイルズの気持ちは分かる。
だからこそ、ちゃんとした答えで返さなければ。

「……私はね、イズミの骸に誓ったの」

リリスの覚悟。
もうイズミの様な、スネークの様な犠牲を出さないと、リリスはイズミの亡骸で誓った。

勿論リリス一人でどうこうなる相手ではない。
だが、自分が出来る限りの事をしようと誓いを立てた。
そして今出来る事は、ゾルフ達と一緒にあいつを倒す事だ。

「……」

マイルズは腰にぶら下げた親友（スネーク）の形見、ガノフィンショテルを見る。

……あいつも最後まで人を守ろうと戦った。

最初十七人で挑んでも大したダメージを与えられなかった相手に、今の様なたった数人で挑むのはあまりに無謀。

二人は住民の護衛に回って退いただけだが、既に十人殺されている。

それに戦闘が始まってから半日どころか一日ぐらいぶっ通しで戦っている。

古龍はある程度ダメージを受けたら逃げる習性があると聞くが、一向に逃げる気配が無い。

要するにまだまだ体力があるという事だ。

しかしこちらは交代で少し、ほんの一瞬だけの休憩を繰り返して今まで戦っている。もうもたない。

街を捨てて退くのが最も賢い作戦。

それはリリスもゾルフも分かっている事だろう。

「私はまだ諦めてない。だから私は戦うよ」

「……」

リリスという少女は優しい。

戦意が消えているマイルズを責めはしないし、否定もしない。

ただ自分の覚悟を言って、ゆっくり前に歩き出した。

自分が如何に愚かな事をしようとしているか分かる。

ただ、今も戦っている仲間を見捨てられない。

何より故郷が見捨てられない。
後ろで立ち尽くすマイルズを置いて、彼女は向こうで仲間と戦っている“やつ”に向かって駆け出した。

駆け出す少女の背中を、ただマイルズは見つめる事しか出来なかった。
彼女、リリスは昔からずっと一緒にいた奴だ。同じようにハンターを目指し、同じようにドンドルマのハンター養成所に通い、同じように“やつ”に挑んだ。
だが彼女は未だに自分の信念を曲げずに刃を振るい、自分は情けなく立ち尽くす。
……この差はなんだ？
ハンターとしての実力は自分の方が上だ。
それは自他共に認める事実、リリスも悔しげだろうが認めるだろう。
しかし、彼女は自分よりも勇気があり、“やつ”に挑む。
人は彼女を蛮勇と呼ぶかもしれないが、少なくともマイルズの中では勇気ある行動だ。
マイルズは急に自分が情けなく感じた。
手に持つ自分の得物を見る。
プロミネンスピラー、空の王リオレウスから取れる素材をふんだんに使った赤い灼熱の槍。
誇り高い天空の支配者の槍を持った自分がこんなに情けなくてはいけない。
何より、スネークと語り合った『夢』を叶えるのならこんなところで怖気づいていたらダメだろう。
スネークになんて顔して会えばいいんだ？
槍の柄を握り締め、マイルズも一気に駆け出した。

先に炎王龍テオ・テスカトルに向かって駆け出したリリスは背負っていた双剣、ホーリーセイバーを握り締め、突貫する。
相手は今、唯一戦闘が出来る上位ハンター、大剣使いのゾルフに向かってその鋭い爪を振るっているところであり、まだリリスには気付いていない。一歩一歩近付くごとに周りの空気の温度が上がる。なんせ相手、テオ・テスカトルは体の周りには炎が渦巻く。近付くだけでこちら側の体力は減っていくのだ。
だが、目前に迫った今でもまだリリスの存在に気付いていない。
チャンス。
二本の剣を前に突き出し、攻撃する。
ホーリーセイバーは水属性、炎を纏う炎王龍には向いている武器だ。

「やぁぁぁぁっ！」

渾身の力と自分体重を込めて二本の剣をテオ・テスカトルの側面に突き刺す。
前までと同じ要領で関節部を狙って。
が、無情にも耳障りな音がして剣は甲殻に弾かれた。
バシャッと音がして付加された水属性の斬撃は辛うじて決まったが、刃自体は甲殻に阻まれた。
誰かが攻撃したのか、少し甲殻の装甲が薄い箇所を狙ったが武器の切れ味が足りなかったのだ。
渾身の力を込めた反動か、弾かれた瞬間に体のバランスが崩れて後ろに倒れそうになる。
なんとか立て直すが、その一瞬の隙が命取りだった。
炎王龍テオ・テスカトルは自らの体に剣を突き刺そうとした不届き者を見逃しはしない。
目の前の大剣使いを片方の前足で吹き飛ばし、すぐさま反転。

バランスを崩しているリリスに向かって鉄をも簡単に切り裂く爪を振り下ろした。

「……っ！？」

双剣は武器の構造上ガードは不可能。
ましてや相手はテオ・テスカトル。
逃げようにも間に合わない。
せめてもの抵抗で体の前に双剣を交差させ、迫り来る鋭利で巨大な爪を受け止めようとする。
勿論こんな物では防ぐ事は不可能、確実に双剣は砕かれて防具も引き裂かれる。
最悪死だ。
リリスとしては藁にもすがる思いで交差させる。
ハンターとしていつでも死ぬ覚悟は出来ていたつもりであったが、あくまでも『つもり』の様だった。
『死』の恐怖が体に迫り、戦闘中にはご法度の目を瞑るという行動をしてしまう。
……死んだらイズミに会えるだろうか？

「ラァァァッ！」

マイルズらしき声が聞こえた。
それと同時に体に衝撃がきて後ろへ飛ばされた。
地面に打ち付けられた背中以外の痛みは感じなかった。
即死で他の痛みは感じなかったのか？
そう思ってもみたが耳からは怒号とあの炎王龍の荒い、吠える様な声が聞こえる。
恐る恐る目を開けてみるとそこには――

「馬鹿かお前！　無茶苦茶し過ぎだ！」

深紅の巨大な盾を構えたマイルズが立っていた。
盾には大きな罅（ひび）が入り、後一撃でも受ければ砕け散る様な罅。
それでもテオ・テスカトルの爪を防ぎきった。
ただ防いだだけで、衝撃自体は全て吸収出来ない。
そのため庇ったリリスは衝撃の余波で後ろに吹っ飛び、マイルズも数メートル地面を滑った。
しかし安心したのも束の間、テオ・テスカトルは一撃防がれたら更なる追撃を繰り出す。
ほんの少しだけ、本当に一瞬だけ体をたわめ、元々は綺麗な石畳だったが今はぐちゃぐちゃになった地面を蹴って襲い来る。

「っ！？　ヤバい！」

体の芯から震え上がる程の気迫と咆哮、それを同時に放ちながらテオ・テスカトルは二人に迫る。
マイルズは避けきれないと判断し、せめてリリスだけでも守ろうと罅の入った盾を構えた。
だが爪と同じく鋭く尖った牙が盾の目前まで迫った瞬間にそれは起きた。

「ショット！」
「ゴォォッ！？」

いつの間にかマイルズの斜め前を陣取り、ランスと同じく巨大な盾と槍を持った青年が迫るテオ・テスカトルに槍の先を向けていた。
ガンランス使いのヴェンだ。
ショット、その掛け声と共に引き金が引かれ、槍の先から爆風が巻き起こる。

ガンランスの必殺技、龍撃砲だ。
威力は絶大だが連続して使えず、尚且つ槍の切れ味が落ちる最終手段の技。
それを見事にテオ・テスカトルの顔にぶち込み、牙が盾にぶつかる前に横へ吹き飛ばした。
　更に横倒しに倒れたテオ・テスカトルの顔に先程吹っ飛ばされた大剣使いのゾルフが自慢の大剣、真竜ノ顎をさっきのお返しと振り下ろす。
叩き斬る事は出来なかったが、流石にダメージは大きい、スネークの最後の攻撃で罅が入っていた角に更に亀裂が走り、呻き声の様なものが聞こえた。
　それにまだ終わらない。
何発かの銃声が聞こえると同時に数発の弾が羽に突き刺さり、立て続けに爆発した。
徹甲榴弾Ｌｖ１だ。
撃ったのは少し離れた所に立っているティリアだ。
全身を一角竜と呼ばれる飛竜モノブロスの鱗や甲殻で作られたモノブロシリーズで固め、グレネードボウガンというライトボウガンに分類される武器を持っている。

「無事かっ！？」
「えぇ、なんとか生きてます。ゾルフさんこそさっきぶっ飛ばされてましたよね？」

　一度地面でもがくテオ・テスカトルから距離を置いてゾルフが仲間の現状を確認する。
ハンターは四人までのチームを作るのが暗黙の了解であるが、今回は緊急事態、十七人で挑み現在は五人。
こういう時は仕方ないのだ。

「……こんなもの、ジャンと比べたら何でもない」

背中に愛剣を戻し、左腕をグルグルと回すゾルフ。
マイルズにはその愛剣に少し罅が入っている様に見えたが、何も言わないゾルフを見て黙る。
気のせいという事だって大いにあり得る。
それに、現状を考えてゾルフが戦闘から離脱したら終わりだ。
彼の立ち回りのお陰で今自分達が生き残っているのだから。
大剣使いにしてあの機動力。
『昔会った少年の真似』と本人は適当に言っているが、そんな事無いだろう。
確実に血の滲む様な努力と、今まで潜り抜けた修羅場の数があの動きを可能にしているんだ。
だからこそ“灰狼”
狡猾な狼の様に相手を狩るのがゾルフの十八番だ。

「……二人共、いけるか？」
「愚問ですね、俺はバリバリの全開ですよ」
「私も問題ありません」

ゾルフの問いかけに二人が頷く。
こんなところでへばっていてはいけない。
槍の、双剣の柄を強く握りしめ、二人は今ちょうど立ち上がった炎王龍テオ・テスカトルを見つめる。
少し角に罅が入っている以外は特に目立った傷も無く、今まで散々斬り付けた鱗や甲殻は未だに健在。正しく化け物。よく見れば多少傷ついているが、古龍特有の圧倒的な回復力により傷口らしきものはない。
鱗や甲殻が少し欠けてますかね？　という感じだ。
その王は立ち上がった後は何もせず、ただこちらを見つめている。

意図は分からないが、誰から潰すのかを吟味しているのかもしれない。

「……マイルズもリリスも、お前達二人の武器じゃあいつに効果的な攻撃が出来ない。遊撃に徹しろ、俺が攻める」

「「了解です」」

マイルズやリリスの本当の気持ちとしては、ゾルフ一人に任せるのは嫌だ。

相手はあの炎王龍、一人で相手を引き付けるのは危険過ぎる。

だが、不甲斐無い事にこの作戦が最もベスト。

マイルズがゾルフの役をしたら多分、数分で殺られる。リリスもまた然り。

ヴェンなど論外だ。

ゾルフの次に場数を踏んでいるティリアはガンナー、近距離戦は専門外。

仕方ないのだ。

ゾルフが炎王龍に灰色の影を引き連れて突貫する。

いくら大剣を背中に戻してるとはいえ普通では考えられない早さ。

それこそが“狼”。

俊敏で狡猾な狩人。

その牙は王の喉笛さえ噛み切る。

ゾルフが灰色の影を引き連れるなら、炎王龍は紅い影か。

ゾルフに向かって飛び掛かり引き裂こうとする。

が、ゾルフはそれに動じない。

背中にある大剣の柄を握り大剣を背中で横向きにする。

そして自らの体を回転させて、大剣を解放、横薙ぎの一撃を放つ。

たとえ弾かれても威力全ては防げない。

その一撃は暴風の如く荒れ狂った風切り音と共に炎王龍を迎え撃つ。

ゾルフを引き裂こうと迫っていた牙はゾルフに到達する前にその横

薙ぎの一撃をぶち込まれ、横倒しにされる。
甲殻なんてついていない牙はその威力に耐えられず、一本が砕けて宙を舞った。
――通常、大剣使いの抜刀術は背負った大剣を上から高速で振り下ろすものだ。
自らが走っていた時に生まれる前へ進むベクトルを大剣に乗せ、更に大剣の重さも利用、それにより高速且つ強大な一撃になる。
のだが、ゾルフは普通の抜刀術とは違う芸当を見せてきた。
横薙ぎの一撃。
定石（セオリー）に当てはまらないそれは、如何にゾルフが実力高いハンターかを示している。

「報いを受けろ」

横倒しにされた炎王龍の顔に標準を合わせ、大上段から大剣を振り下ろす。
大剣は太刀や片手剣、双剣の様に『切り裂く』武器でもハンマーの様に『叩き潰す』武器でも、ランスやガンランスの様に『突き刺す』武器でもない。
大剣は『叩き斬る』武器。
多少弾かれようが力で無理矢理切り捨てる。
それが大剣。
ハンターの持つ数ある武器の中で最も強大な威力を誇る武器だ。
振り下ろされた刃は正確に炎王龍の顔に叩き込まれ、呻き声の様な声が上がる。
が、やはり完全に切り裂く事は出来ず、頬の部分の甲殻が弾け飛んで浅い傷が走るだけ。
血は流れているが、痛手とは言えないか。
マイルズも突撃し、鞭の様にしならさせ攻撃してくる鬱陶しい尻尾を切り落とすためにリリスと共に攻撃する。

ティリアは通常弾の嵐を浴びせ、ヴェンも負けじと砲撃を行う。
　そんな猛攻が続く中、ゆらりと王が立ち上がる。
辺りの空気が灼熱に変わり、確実にハンター達の体力を削る。
炎王龍テオ・テスカトルの真骨頂は炎の制御。
どの生物も成し得ないその能力は、天が王にだけ許した能力か。

「一旦退け！」

　ゾルフが叫ぶ。
今の今まで猛攻をくらい続けたのだ、間違いなく怒りで何か仕掛けてくる。
それがモンスターなのだから。
　ゾルフの指示通りにマイルズ達は一旦距離を取る。
大咆哮（バインドボイス）や粉塵爆発に巻き込まれるのはごめんだ。
ガンナーのティリアのみ、遠距離攻撃が出来るだけあって攻撃を止めない。
炎王龍の射程範囲を越えている場所から攻撃しているのだから、まだ安全性は高い。

「ゴォォォァァッ！」

　吹雪の様な冷たい殺気と圧倒的な圧力を込めたバインドボイス。
だがしかし、ゾルフの的確な指示により誰もその射程範囲内にはいない。
その場に留まって吼えているので、ガンナーのティリアからしてみれば格好の的だ。
引金を引く。
装填された弾は撤甲榴弾ＬＶ１。
彼女の武器、ライトボウガンのグレネードボウガンは撤甲榴弾ＬＶ１を速射する機能を持つ。

一度引金を引けば一気に数発撃てるという事だ。
ティリアの正確無比なその射撃により弾は見事に炎王龍の頭に突き刺さり、爆発する。
無論炎を操る炎王龍にはその程度の爆発、大したダメージではない。
が、それでもいいのだ。
頭で爆発が起きれば、数回じゃ無理でも何度も何度も起こせば頭は揺れ、必ず脳震盪を起こす。
それこそがティリアの狙いだ。
バインドボイスが終わり、宙に上げていた前足地面に下ろした瞬間にゾルフやマイルズは駆け出し、再び切り刻まんと迫る。
が、炎王龍はバインドボイスを終えると同時に体を縮こませ、ボンッと粉塵を飛ばした。
羽を動かし飛散する範囲を広げ、一気に焼き払う算段か。
流石にこれはヤバい。
慌ててゾルフ達は急停止し、踵を返して逆戻り。
早くこの爆発範囲から出ないと炭すら残らない悲惨な最後を遂げてしまう。
ただ、ティリアだけは冷静に粉塵の飛散距離を見積り、ガチャリとレバーを引いてある弾を装填した。
スコープで標準を相手の頭にする。
『ガチンッ』と牙を鳴らす音が響く。
その瞬間炎王龍の周りは爆発による炎と熱、暴風が渦巻く灼熱地獄と化す。
ギリギリゾルフ達近距離型ハンターは射程内から抜け出していたが、それでも後ろで起こった爆風により飛ばされる。
ハンターが使う爆弾、その中でも最も強力な大タル爆弾Gすらもこれに比べれば威力なんて可愛いものだ。
洞窟なんかで使ったら確実に天井が落ちてくる。

「……よしっ！」

炎王龍は粉塵爆発の巻き起こっている一帯のど真ん中で咆哮を上げ、動きはしない。
それはティリアが見つけた王の隙。
圧倒的な破壊力を持つこの技の後は、何故かいつも咆哮を上げて動かない。
……そしてそれは遠距離攻撃が専門のガンナーにとっては格好の的。
ティリアが引金を引く。
バンッと銃口から音がして、深紅のマズルフラッシュが煌めく。
放たれた銃弾は、今までのと比べると遥かに遅い。
だが、質量はデカイのか撃ったティリアは反動で少し地面を滑っている。
ゆっくりとした速度だが、それでも正確に炎王龍の頭に吸い込まれていった。
その銃弾は頭に当たるやいなや爆発、更に小さな何かを下に撒き散らし、その何かも爆発。
――拡散弾ＬＶ１。
そう呼ばれる銃弾だ。
相手の甲殻の固さを無視してダメージを与えられる強力な銃弾。
ガンナーにとっては最強の攻撃手段と言ってもいい。
それを見事に炎王龍の頭に直撃させたティリア。
見事ととしか言い様の無いその一撃。
頭にあれを喰らったのだ、いくら炎王龍テオ・テスカトル確実に怯むだろう。
そうタカをくくってレバーを引き、一発しか装填出来ない拡散弾の空薬莢を出す。
すかさずこのボウガンが最も得意とする撤甲榴弾を腰のガンベルトから外し、手慣れた手つきで素早く装填、前を見る。
――見て、絶句した。
……ティリアの目前に、王の牙が迫っていたのである。

ゾルフはティリアの一撃を見て舌を巻いた。
完璧な一撃、あんなの喰らったら普通のモンスターなら完全にノックアウトだ。
ただ、『普通の』モンスターならばだ。
ゾルフは今の一撃に舌を巻いたが、同時に妙な胸騒ぎがした。
そしてその胸騒ぎが勝手にゾルフの足を動かしていた。
向かう先はティリア。
今の一撃に手応えを感じたのか彼女は前を見ずにレバーを引き、空薬莢を取り出している。
斜め前、即ちティリアからして正面をチラッと目の端で見ると、そこには紅蓮の巨体が物凄い速さで駆けていた。
……あれを喰らってまだ走れるとは。
勿論現在銃弾を再装填中ティリアは気付いていない。
見事なあの一撃は確実に炎王龍に大きなダメージを与えている。
が、あまりにも完璧過ぎたその一撃が彼女の隙を生んだ。
炎王龍は怯みもせずに、今しがた強力な一撃をくれた彼女に向かって駆けている。
炎王龍は最後に思い切りよく地面を蹴り、ティリアに飛び掛かる。
ゾルフも無我夢中で間に向かって飛んだ。
漸く炎王龍の存在に気が付いたティリアの顔が驚愕と絶望の色に染まる。
だがその身に王の牙が食い込む前に、灰色の影を引き連れたゾルフが滑り込み、ティリアを片手で突っぱねた。
ゾルフは自らが纏う灰色の防具、バサルSシリーズが砕ける音も、

その身に食い込む牙と灼熱の風も、ただティリアを守った事に満足感で感じなかった。

マイルズとリリス、ヴェンはその光景をただ見つめる事しか出来なかった。

完璧な一撃を決めたティリアと、その復讐とばかりにティリアの隙につけ込んで飛び掛かった炎王龍テオ・テスカトルの間に割って入ったゾルフ。

ちゃんと片手でティリアを飛ばし、守った。

強固なバサルSシリーズは砕け、露になった腹から血が吹き出すゾルフ。

灼熱の吐息がその腹を焼き、人肉の焼ける嫌な臭いが立ち込める。

ティリアがゾルフの名を――名を、呼ばずに、マイルズ達からすると考えられない呼称で呼んだ。否、叫んだ。

だが、ゾルフは反応しない。

死んだのか。

ヴィルマ最強のハンターの『死』。

それを信じたくないマイルズ達の目が、更に大きく見開かれる。

ゾルフの右手がゆっくり動き、背負っている大剣の柄を握った。

そしてそれを、大質量の大剣を片手一本で持ち上げ、炎王龍の頭に振り下ろした。

この一撃は先程のティリアの一撃も相まって、耐えられなかった炎王龍は食い込ませていた牙を外し、少し後ろに距離を取る。

が、すぐに地面を蹴って間合いを詰め、イズミを引き裂いた爪を振る。

もう既に致命傷を喰らっているゾルフにそれは避けれない速さ。
左肩口から袈裟斬りに爪が走り、更にゾルフのヘルムと防具が砕け散り、信じられない量の血が吹き出る。が、後ろに飛ばされない。
もう死んでるとしか思えないのに……それなのにゾルフはもう一度大剣を、今度は横薙ぎに振るい、追撃とばかりにもう一方から振られた爪を弾き飛ばす。
更に大上段にまで大剣を振り上げ、一歩、前に踏み込んだ。

「オォォォォッ！」

まるでバインドボイス。
溢れ出る血を無視して、覇気と強い意思の籠った叫びを上げる。
そのゾルフの叫びと共に振り下ろされた刃は、罅の入っていた炎王龍の角を木端微塵に砕いた。
とその同時にゾルフの愛剣も砕け散る。
やはり、罅が入っていたのだ。
生涯最後の一撃。
それは自らの得物と命を対価に王の角を破壊し、仲間を守った。
この一撃には炎王龍も堪らず怯み、大きく後ろに飛び退いた。
急いでマイルズ達三人が駆け寄る。
ティリアはもう放心状態。
溢れる涙を拭いもせずにただゾルフを見つめていた。
マイルズがゾルフに駆け寄る。
ゾルフは砕けて柄だけになった大剣を握りしめ構えたまま、そして立ったまま、既に死んでいた。
握った柄には血が滲み、切り裂かれ、噛み切られた腹や肩口からは血が流れ落ち、それでも立っていた。
……そして何故か少し笑っていた。
誰かを思う優しい笑顔。
誰に向けての笑顔なのかは分からない。

そっとマイルズは見開かれた目を、笑顔を作る口元とは対照的に、鬼神の様に鋭く虚空を睨んだ目を閉じてやる。
ヴィルマ最強のハンター。
マイルズの、今は亡き親友のスネークや先輩のテラの憧れ、両腕を失った上位ハンター、碧砲のジャンの親友。
灰狼のゾルフの命が散った。

――いつからだろう、彼女が自分の事を兄さんと呼ばなくなったのは。
いつからだろう、自分の背中を守ると泣いて誓った彼女を知らず知らず愛していたのは。
走馬灯がゾルフの頭の中を駆け巡る。

ティリア・ハートレスは近所に住む自分の妹の様な子だった。
内気で大人しく、せっかく可愛い顔をしているのにピッタリと自分の背中にくっついて離れない少女だった。
彼女の母親に頼まれ、ハンター修行の合間を縫って人見知りの激しい彼女が唯一心を開いて兄さんと呼ぶ自分が遊び相手になってやった。
ハンターの師匠からはロリコンと弄られたが、引っ付くんだから仕方ない。
ずっと一緒に遊んでやった。
師匠の元を離れ、初めて怪鳥イャンクックを倒した時、親友でライバルのジャンやその幼馴染のサラよりも先に、ティリアのその怪

鳥の鱗を見してやった。
ピンクのそれは彼女の目にどう映ったのかは分からないが、急に泣き出し、ハンターになると言い出した。
いきなり兄さんの背中を守ると泣いて誓いを立てた。
自分を含め周囲の反対を押し切って、人見知りの少女とは思えない程大胆に、ハンターになると言って聞かず、結局ドンドルマのハンター養成所に入ってしまった。
　それから数年。
帰ってきた彼女は行く前とは別人と思える程しっかりとした子になっていた。
人見知りも治り、自分の背中にくっ付く事も無くなったし、自分の事を兄さんとも呼ばなくなった。
　いつしか彼女は朱郭（しゅかく）と呼ばれる程のハンターになり、自分の背中を昔誓った通り、守る様になっていた。
人見知りのあの少女は、いつしか自分の手の中から消えていた。
　だが、最後はやっぱり自分がいなくてはダメらしい。
どんなに強くなろうが根は変わらないのか、やっぱり自分の世話が必要な子。
　いつの間にか愛していた人見知りの少女を守る為に、無我夢中で飛び込み、砕けても剣を振るった。
……久々に“兄さん”と呼ばれた気がした。
振り向いて「久々にそう呼んだな」と頭を撫でてやりたいが、もう足に力が入らない。
……潮時か。

　灰狼（かいろう）のゾルフ。
世間は自分をそう呼ぶ。
狼とはまた大層な名だが、響きは気に入っていた。
由来は色々あるらしいが、大剣使いとは思えない速さが狼の様だと

言われたのが最初らしい。
……何度も少年に習ったと言ったのに、結局誰も信じてはくれなかった。
思い浮かぶのは、ドンドルマの酒場。
その場に不似合いな程若い少年と少女が一組いた。
誰もが胡散臭い目で彼らを見ていたが、自分は少し興味を持って彼らに話し掛け、クエストに誘った。
そして、驚愕した。
見た事の無い動き。
自分の間合いを完璧に把握したその動きはどのハンターにも真似出来ない一つの境地と呼ぶに相応しい。
まだまだ幼い彼らは、一体何があってハンターになったのかは知らないし、訊いてもいない。
その動きを真似たらそうじゃないと、一回りも違う少年に動きを教わった。
気が合って意気投合するのには時間など大して必要じゃなかった。
クエストが無事に終わり、彼らとの別れ際に言われた言葉が今でもはっきりと耳に残っている。

『……俺、あんたみたいなハンター目指すよ』

実力は彼らの方が遥かに上。
なのに何故か、そう言われた。
冗談めかして苦労するぞと言ったら、だからこそ目指す価値があると返された。
未だに自分の何を見て彼らがそう言ったのかは分からない。
何故『彼ら』にそう言われたのか。
風が避難場所の丘の方角から吹いてきた。
その風に混じって、懐かしい『彼ら』の気配がやって来る。
……この街は救われた。

自然と笑みが溢れる。
愛するティリアよ、信頼出来るマイルズ達後輩よ、心配するな。
――この街は救われた。

ＣＩＮＣＯ：　ヴィルマの大英雄〝灰狼〟ゾルフ・ヴァルフレア（後書き）

神威です。
取り敢えず物語は中盤まで進みました。
血ばっか書いてる気がしますが、そんな事は無いと勝手に思っときます。

ではまた次回。
なるだけ早く更新しますので！
感想など送っていただければ幸いです。

SEIS：　千手と月光

灰狼のゾルフが倒れた。
それはマイルズ達が最も見たくなかった未来であり、絶望や死と直結する最悪の事態である。
ゾルフがいたから今まで自分達はあの戦闘で生き残れた。
ゾルフに『生かされていた』と言っても過言ではない。
そのゾルフが死んだのだ。
嘆く前に構えなければ、自分達がゾルフの後を追う。
それはゾルフが望んではいない事。
ならば、無理矢理にでも頭を切り替えて生き残る術(すべ)を探すしかない。
幸い炎王龍テオ・テスカトルはゾルフの最後の一撃が余程響いたのか、未だに向こう側で威嚇しかしてこない。
死して尚立っているゾルフに気圧されているのかもしれない。
だが、それも時間の問題。
いつまた攻めて来るか分からない。
相手は獣。
意志疎通など不可能だ。

「……っ！　やっぱりここは囮だな」

マイルズは周りを見て瞬時に判断する。
この中で最も実力があり、尚且つ場数を踏んで頭が回るのはティリア。
だが今は放心状態。
……当たり前だ。
サラがジャンをを愛していた様に、ティリアもまたゾルフに想いを抱いていた。
ゾルフ本人は気付いてなかったが、それはヴィルマのハンターどこ

ろか、街の殆どの人が知っていた。
そのゾルフが自分を守って目の前で死んだのだ、今ティリアがどんな気持ちなのか、その苦しみは想像不可能、ショック死ものだ。
　ティリアの次、それは自分。
それに自分はランス使いで盾もある。
ガードが出来ない双剣のリリス、まだまだルーキーのヴェン、囮役には向いていない。
……ここは、自分がやるしかない。
それが最もベストな選択。
否、これしかもう選択肢が無い。
灰狼のゾルフは死に、朱郭のティリアは放心状態、ここはマイルズが囮になって残り二人を逃がすしかない。
もう、炎王龍を倒す術など潰えている。
ならばせめて、一人でも多く生き残るべきだ。
そしてそれは今、自分しか出来ない。

「……リリス、ヴェン、ティリアさんとゾルフさん連れて退け！」

　前を、炎王龍を見ながら後ろにいるリリス達にマイルズが叫ぶ。
これは頼みではなく『退け』という命令。
リリス達はどんな顔をしたのか分からないが、無理矢理にでも従ってもらう。
いつまた炎王龍が攻め込んでくるか分からない状況下で無駄な言い争いはしたくないし、リリス達だって馬鹿ではない。
自分の、マイルズの気持ちぐらい汲み取れる筈だ。

「何言ってんの！？　マイルズ一人残せる筈無いでしょ！」

　……気持ちを汲み取ってくれると思ったが、リリスはそんな事なかった。

全然、欠片も汲み取ってくれなかった。
いや、頭では理解していても意地か何かで残る気かもしれない。

「煩せぇっ！　俺が引き付けるからその間にお前らが避難、それを確認したら俺もイズミ担いで避難するんだよ！」

まるっきり嘘である。
リリス達を逃がせるかどうかも分からないし、仮に逃がせたら尚更マイルズは逃げれない。
閃光玉という気の利いた物も無ければ、相手がのろまなわけでもない。
断言出来る。
絶対に逃げれない。
……それに、マイルズ自身は逃げる気が無い。
向こう側にいる炎王龍の方を向いたままのそう言うイルズを見て勘づいてるのか、リリスはマイルズの言う事を聞かずに動かない。
ヴェンはどうしたら良いのか、何を言えば良いのか分からず、取り敢えず静観。
ただ、ヴェンもあまり退く気は無い。

「行けって言ってんだ！　お前らが残るより俺一人の方が上手くいくんだよ！　分かるだろ！？」

時に嘘とは現実味を帯び、あたかも真実の様な顔をする。
今のは正しくそれだ。
確かにマイルズはランス使いであり、ガード不可の双剣を操るリリスと違い、その巨大な盾と槍を駆使すれば生き残れそうな気もする。
また、ガンランスというランスの親戚の様な武器を扱うヴェンはまだルーキーで心許ない。
故にマイルズ一人の方が上手くいきそうだ。

だが『生き残れそう』であり、実際は分からない。
もしかしたらリリス達が逃げてる途中であっさり殺されるかもしれない。
しかし、語気を強めて言うマイルズのそれは一時的だがその言葉の信憑性を急激に上昇させる。

「ヴェン！　連れて行け！」
「え、あ、いや……でも！」
「ほら来たぞ、行け！」

ずっと威嚇らしき行動を繰り返していた炎王龍が遂に動いた。
地面を抉り粉々にし、地上数十センチ、地面すれすれの跳躍をして飛び掛かってきたのだ。
マイルズは盾を構え、飛び掛かってきた炎王龍の爪を斜めに受けて威力を流し、なんとか堪えながら後ろにいるヴェンに叫ぶ。

「……っ！　リリスさん、行きましょう」

たとえその背中がテラと重ねて見えようが、今のヴェンでは何も出来ない。
ならば、せめてマイルズの願いを叶えなければ。
ヴェンは胸が苦しく感じながらもゾルフの亡骸を抱え、リリスとティリアに声を掛けた。
ティリアからは反応が無い。
リリスは涙を流しながらもなんとか動いてくれた。
ティリアを引っ張り、出来るだけ早く後ろへ走る。
ゾルフとティリアを避難場所に移動させ次第、またここに戻るつもりで。

マイルズは後ろに下がっていくリリス達の気配を感じ取り、取り

敢えず一息つく。
先程から炎王龍の爪が何度となく盾に振り下ろされ、元々あった罅が更に蜘蛛の巣状に走るのを感じながら、なんとか堪え、一瞬の隙にバックステップをして間合いを開ける。
……そろそろこの盾も限界か。
というか、盾を構えている右腕の骨自体が限界だ。
既に盾同様罅ぐらいは入ってそうだ。
だが、そんな痛みや危惧など関係無い。
今自分がやるべき事は、こいつを止める事。
牙をぎらつかせて炎王龍が噛み付いてくる。
牙の何本か折れているが、それでもまだ脅威なのは変わり無い。
盾で防いだらヤバいと判断し、体を滑らせその攻撃を避ける。
カウンターと槍を突き出し一撃入れるが、やはり中々貫けない。
強固な甲殻は槍の穂先を弾き、槍の先端が欠ける。
更に反動でマイルズの体勢が崩れる。
そのバランスが崩れたマイルズには隙ができ、それを見逃す程炎王龍は甘くない。
爪を上から叩き落とし、マイルズの五体をバラバラにしようとする。
マイルズはかろうじて盾で防いだが、盾は砕け散り、右腕が悲鳴を上げた。
多分、骨が折れた。

「くそがっ！」

盾がなくなったのなら重量武器の槍など危険しかない。
マイルズは迷いもなく左手に握っていた槍の柄を放し、腰にぶら下げていた亡き親友、スネークの形見である片手剣を握った。
折れて力が入らずブラーンとした右腕を無視して、左手に握った片手剣を構え、追撃にと振られた爪を掻い潜って炎王龍の喉元を斬りつける。

完全に切り裂いたとは言えないが、弾かれずにちゃんと剣は振れた。

「っし！」

やはり喉元は他の体の部位と違い、若干柔らかい。
これならこの剣に仕込まれた睡眠毒も効きやすいだろう。
まだ戦えるとマイルズは思うが、それはいささか早計だ。
喉元は相手の懐に入らなければ攻撃不可能。
特にリーチの短い片手剣。
かなり奥まで入らなければならない。
それは相手の間合いに突っ込んで行くという事だ。
無論相手の間合い内ならば、分は相手にある。
炎王龍は前足を振り、懐に入っていたマイルズをぶっ飛ばす。

「ォァッ！？」

爪で切り裂いたわけではないのでマイルズはまだ生きているが、ダメージはデカイ。
地面を転がり、なんとか起き上がった時には目の前に炎王龍の牙があった。
……終わりか、そう思った瞬間、炎王龍とは別の、だが炎王龍をも凌ぐ圧倒的なプレッシャーを感じ取った。
冷たく鋭い、刃の切っ先の様なプレッシャー。
それを敏感に感じ取り反応した炎王龍はすかさず後ろに飛び退き、突然の来訪者に威嚇する。
ガチャリ、隣で鎧が鳴る音が聞こえた。

「……やっと到着だ」
「おぉ、角壊れてるよ、ラッキ～！」
「マイルズ！」

先程の刃の様なプレッシャーにやられ、薄れゆく意識の中、マイルズは泣きながら自分を抱えたリリスの顔が見えた。

ヴェンは自分よりも大きなゾルフを抱えて必死に、リリスは泣きながらティリアを引っ張って避難場所である街の近くの丘陵地帯の方角へ走っていた。
炎王龍が撒き散らした火炎は既に街の殆どの物を焼き尽くし、灰にし、自然と鎮火している。
そんな、焼け野原と化した街の中を走っていると、前からロットが二人のハンターを引き連れて走ってきた。
金と銀の防具を身に纏い、見た事の無い蒼い太刀と金と黒の弓を持ったハンター。

「リリスさん！」

ロットがリリスの名を呼び、合流する。
希望に満ちた顔をしていた。

「ドンドルマからの援軍です！」
「……ドンドルマ？　……竜車で三日は掛かるのに、そんな筈は……」

ドンドルマのギルド本部に緊急支援を出したのは事実。

烽(のろし)を上げて、それを古龍観測所の気球が確認、あとは気球から光の信号をまた別の気球に送り、リレー方式で伝達する。
故にドンドルマにヴィルマの緊急事態は直ぐ伝わるが、ハンターは光と違って超高速で移動は出来ない。
主なハンターの移動手段である竜車なら、ドンドルマからここヴィルマまでは三日は必要。
援軍なんて早すぎる。
魔法でも使わない限り無理な早さだ。
無論、魔法なんて都合のいいものは無い。

「ギルドの上が馬を出してくれてな、竜車の三倍速い」

銀の鎧に身を包んだハンターがサラリと種明かしをした。
馬、王族やギルドの最高位の者が所有する現在人間が使用可能な移動手段の中では最速の物。
それを使って来たらしい。

「そう……」

リリスは唇を噛む。
ギルドは最高の策を打ってくれた。
だが、それでも皆死んだ。
たった一日で十七人いたハンターの殆どが死んだ。
夜空に輝く月が、これほどまで弱々しく感じるのは初めてだ。

「……それは、骸か」
「ゾルフさんっ！？」

銀のハンターがヴェンの抱える亡骸を見てポツリと呟いた。
ロットは信じがたいものを見た様に目を見開き、アワアワと口に手

を押さえる。
ピクリと、銀のハンターがゾルフの名を聞いて反応した。
「……ゾルフ？　灰狼のゾルフか？」
「……ええぇ」
驚いた様な声を上げ、銀のハンターがヴェンに訊く。
ヴェンが苦し気に頷くと、銀のハンターはそうかと呟き、手を合わせた。
それに習い隣にいた金の鎧を纏った女の子のハンターも手を合わせる。
「現状は？」
手を合わせ冥福を祈った後、銀のハンターがヴェンに問い掛ける。
そうだと声を上げ、ヴェンは手早く今までの戦闘と現状を伝え、最後に未だ戦っているマイルズを助けてくれと嘆願した。
「……無論そのマイルズって奴は助ける。この先にある広場だな？　シィ、行くぞ」
一歩前に出て銀のハンターがそう言うと、シィと呼ばれた金のハンターも前に出る。
「あの……私も行かせて下さい！」
リリスが後ろから二人に声を掛けた。
ティリアをロットに任せ、お願いしますと頭を下げる。
銀のハンターの表情はヘルムの中で分からないが、呆れられているかもしれない。

「……シィ」
「うん。分かった」
「えぇ！？　あの……？」

銀のハンターが名前を呼ぶと、金のハンター――シィがリリスの側まで歩き、所謂お姫様抱っこというやつをする。
自分と同じくらいの背丈に、銀のハンターとは違い表情が分かる金のハンターは確実に自分と近い年齢だ。
そんな子にこんな事されるとは誰が思うのか？

「私は別に大したケガはしてませんし、走れます」
「……勘違いしないでほしい。事態は火急、こうした方が移動は早くすむまでだからするんだ」

サラリと銀のハンターが言うと、一度大きく息を吸い、そして一気に地面を蹴った。
同じくシィと呼ばれる女の子も地面を蹴る。
……速い。
先程までロットと一緒に走っていた速度とは比べ物にならない程。
人はこれほど速く走れるんだと思う程。

「呼吸一つで人の力は大きく変わるんだよ～」

シィが飛ぶ様に走りながらニコッ笑って言う。
――呼吸。
それは確かに戦闘や、それ以外でも体を動かす事において大切なポイント。
スタミナがなくなると息が上がるのはこのためだ。
熟練のハンター程この呼吸の扱いに長け、凄まじい瞬発力などを披

露すると聞いた事はあるが、実際は呼吸ごときにそんな集中力を使う暇など無いと殆どのハンターからは無視されているものだ。
……それにこれは、流石に度が過ぎている。

「筋肉の使い方とタイミング、それと呼吸でね、人は信じられない程の力を出せるんだ。凄いよね～」

超高速で走りながらシィが笑う。
涼しい顔をしていて、まるでシィが走っていない様な錯覚さえ覚える。
驚くリリスを他所にニコッと可愛い笑顔を弾けさせ、着いたよとシィが言う。
ハッとしてリリスは前を見ると、ちょうどマイルズに炎王龍の牙が迫っているところだった。

「マイ――っ！？」

思わず叫び声を上げるリリスだが、途中で途切れた。
前にいる銀のハンターから信じられない程圧倒的なプレッシャーが放たれたからだ。
炎王龍はそれに反応し、マイルズを攻撃する事無く後ろに飛び退いた。
シィがリリスを下ろし、ゆっくりと銀のハンターと共に歩き出す。

「……やっと到着だ」
「おぉ、角壊れてるよ、ラッキ～！」
「マイルズ！」

二人はゆっくりと歩き、炎王龍を見据える。
リリスは崩れ落ちるマイルズを抱える。

意識は無いが生きている事に一安心し、再び二人を見る。
二人は背負った武器を鞘から引き抜き、あるいは背中から外して構える。

「君はそいつを連れて下がれ。こっからは激しい戦争だ」

銀のハンターが蒼く煌めく太刀を構え、前を見ながらリリスに言う。
先程のプレッシャー、このハンター達はそこら辺のハンターとは次元が違う。
リリスは素直に引き下がる。
そんなリリスの行動を感じ取った銀のハンター――ジンは炎王龍を見据えながらポツリと呟く。

「……『憧れ』を失うのは二度目だな」
「そだね……」
「だが……これも自然の摂理だ、仕方ない。だが、きっちりと報いは受けて貰おうか」

ガチャンと太刀を地面に突き刺し、ジンが炎王龍に一度頭を下げて礼をした。
シィもそれに習い頭を下げる。
どんな相手にも敬意を払い、相手に礼をするのが二人のスタイルなのだ。
その瞬間炎王龍は前足を上げて咆哮を轟かせた。

「……さて王よ、火遊びはお終いだ」

地面に突き刺した太刀を引き抜き、構える。
炎王龍は咆哮を終わらせ前足を地面に下ろしたと同時に大地を蹴り、

元石畳の地面を砕きながらジン達二人に飛び掛かった。
　二人も動く。
シィは矢筒から二本の矢を取り出し、地面の上数十センチを飛んでいる炎王龍の下にスライディングして潜り込み、腹に矢を突き刺した。
相手は自分と行き違いで真っ直ぐ後ろに飛んでいき、シィは何事も無かったかの様に立ち上がり矢を番えた。
弦を目一杯引き絞り、矢を放つ。
放たれた矢は雷を纏い炎王龍の後ろ足一本を貫通し、炎王龍は悲鳴を上げた。
　それに対してジンは走りながら再び地面に太刀を突き刺し、その鐔を蹴って高く舞い上がる。
炎王龍の突撃は無論ジンの真下で行われ、突き上げられた太刀はジンの手元に戻ってくる。
それと同時にシィの放った矢が後ろ足を貫き炎王龍は悲鳴を上げて動きを止める。
……その隙をジンは見逃さない。
自分に掛かる重力と、大上段に振り上げた太刀を振り下ろす。
自らの体が縦に三百六十度回転し、黒い光を纏った刃は炎王龍の羽を叩き斬り、変な方向に折り曲げる。
この黒い光、龍属性と呼ばれ古龍種が最も苦手とする属性だ。
龍殺しの属性と言っていい。
　その普通ならあり得ない上からの強烈な一撃に炎王龍は堪らず怯み、体が傾ぐ。
……のだが、倒れない。
先程の無茶苦茶な斬撃を放った後、あっさりと着地したジンに向かって尻尾を振るい、弾き飛ばそうと試みる。
が、ジンは地面を蹴って一気に間合いを詰めて尻尾を掻い潜り、太刀を振るって体を切り裂く。
ヴィルマの誰もが完全に突破できなかった強固な甲殻が嘘の様に切

り裂かれ、血が吹き出す。
更に横から矢が何本も飛来して体を射抜く。
その度雷が体を駆け巡り、堪らず炎王龍は呻きを上げた。
しかし呻いたところでこの猛攻は止む筈が無い。
ジンは太刀を普通のハンターからすると考えられない角度から振り下ろし、手首を軸にバトンの様に回転させ、体をどんどん斬り刻む。
シィはシィで矢を高速連射、矢筒から取り出して放つまでの時間が以上に短い。
まさしく矢の嵐だ。

「ゴォッ！」

炎王龍はその猛攻に必死で耐えながら体を縮こませる。
粉塵を撒き散らして一気に二人を焼き払う魂胆か。

「ジン、どうする？」
「シィは少し離れろ。回避次第また頼む」

飛び散る粉塵を見ながらのんびりシィがジンに問い掛ける。
ジンもシレッとシィの問いに答え、連撃を止めない。
変な方向に折れ曲がった羽と正常な羽、その二つを必死に動かして粉塵を飛散させ、復讐とばかりに牙を鳴らす。
その一瞬前にジンは太刀を炎王龍の体に突き刺しそのまま地面を蹴った。
炎王龍の背中に立ったジンは更に跳躍、ちょうど頭の真上の辺りに跳んだ。
そんな事は気にせず炎王龍は粉塵爆発を巻き起こす。
爆風が吹き荒れる中、シィは片手に弓を持ちながらバク転、巻き起こるその爆風と同時に腕を跳ね上げ爆風に乗って空に舞い上がった。
粉塵は重い。

そこまで高くは飛散しないし、飛ばしたらなるべく速く起爆しないといけない。
それを知る二人は見事に爆発を回避、シィは空中なのに慣れた感じで矢を番え、放つ。
力の限り引き絞った弦から放たれた矢は万物を貫く。
見事に炎王龍の喉を貫き、同時に雷が走り喉を焼く。

「花火は空に上げるもんだ。そんな爆発、綺麗じゃあねぇな」

ジンもまた空中から炎王龍を強襲。
振り下ろされた刃は炎王龍の顔を引き裂き血を吹き出させる。
二人の攻撃にやられ、地面に倒れ伏す炎王龍。
だが、二人の攻撃は止まらない。
シィは何本もの矢を一気に番え、放ち、倒れて見える炎王龍の腹に突き刺していく。
お次は放つ矢を一本ずつに切り換えて思いっきり力を込めて矢を放つ。
腹のまだ矢が刺さっていない場所を貫き、更にその突き刺さった矢と全く同じ場所を射続ける。
それにより矢は深く、深くに突き刺さり、鏃（やじり）は体の中へめり込んでいく。
継ぎ矢と呼ばれる技術だ。
ジンは頭上で太刀をグルグルと回転させ、練気と呼ばれる力を解放。
太刀使いの奥義、気刃斬りを尻尾に叩き込む。
尻尾はあっさりと分断され、切り裂かれた尻尾は宙を舞い地面に落ちる。
炎王龍はやっとのことで起き上がり、体中から血が吹き出る中羽を動かして空を昇っていく。
……逃げようとしているのだ。

それを見てのんびりとジンが呟いた。

「……いい判断だ。その羽で飛ぶとは見事だが――」

見上げるジンの後ろから、風切り音が聞こえ、一本の矢が炎王龍の翼膜を貫き、雷が迸り、炎王龍は堪らず地面に落ちてくる。

「――残念ながらシィの射程範囲内だ」

落ちて地面でもがく炎王龍を気の毒そうに見つめながらジンがゆっくりと近付く。

血を撒き散らし、ゆらりと立ち上がった炎王龍は怒りで我を忘れてジンに爪を振るう。

だが、当たらない。

常人ならばあり得ない反応速度で爪を躱し、先程シィが喉にぶち込んだ矢を引き抜いた。

血が溢れ、呻く炎王龍を見上げてジンが引き抜いた矢を夜空の星の光に当てて光らせる。

「矢の乱用はダメだぞシィ、ちゃんとリサイクルしないと勿体無い」

ギラリと光った鏃を炎王龍の頬に突き刺す。

悲鳴を上げて炎王龍は仰け反る。

その瞬間ジンの左腕が霞み、超高速で太刀が振られる。

喉元を切り裂き血が吹き出した。

「ゴォォァァッ！？」

ズシンと地鳴りの様な音を立てて炎王龍は倒れた。

今のは断末魔か。

ダラリと太刀を下にしながらジンがゆっくりと炎王龍から踵を返して歩く。
が。

「ガァァァァッ！」

最後の力を振り絞り、炎王龍は立ち上がり前足を振り上げる。
ジンは静かに振り向きそれを見る。
爪が振り下ろされる瞬間、一本の矢が炎王龍の右目を貫いた。
雷が目の周りで暴れ、炎王龍は叫び声を上げて怯む。

「眼球の水分が雷で沸騰するのは痛いんだよ！」

ニッコリと、しかし炎王龍に負けず劣らず強烈な殺気を撒き散らしながら笑うシィが言う。
彼女はジンにぞっこんだ。
彼女の事を知っている人物は口を揃えてそう言う。
そんな彼女の愛しのジンを引き裂こうとした今の行動にシィの何かがぶち切れた。
故に最も残忍な一撃を放ったのである。

「……見てるだけで痛いな」

ジンが炎王龍を可哀想な物を見るような目付きで見て言う。
目に突き刺さる矢を取る事は炎王龍には出来ない。
正に拷問だ。

「ガァァァァァッ！」

出血量などからして死は確定した。

しかし、せめて今、目の前にいる憎いこの人物を引き裂こうと炎王龍は隻眼で睨み付けて爪を振り上げた。
ジンはそんな炎王龍をのんびり見つめる。
ダラリと下がったままの太刀。
何がしたいのか？
　爪が高速で振り下ろされた。
だが、ジンはヒュッとあっさり躱し、未だ溜まっていた練気を解放。
ダラリと下がっていた太刀を神速の、万物を切り裂き断ち切る魔性の刃にして振り上げる。
俗に言う居合い。
瞬発的に最大の力を刃に乗せ、一瞬で振るう待ちの技。
黒い光が荒れ狂い、炎王龍の首が吹き飛ぶ。
ゴトリと鈍い音を立て、首が地面に落ちた。
ついで首が無い体から血が滝の様に吹き上がり、崩れ落ちる。
ヴィルマを壊滅まで追い込んだ炎王龍の最後であった。

「……残念だったな、俺達を焼くには火力不足だ」

　サラリとそう言うとジンはカチャリと刃を鞘に戻し、手を合わせて冥福を祈る。
シィも隣に駆けて来て、同じく祈る。
これも二人のスタイル。
この世の流れは生から死のみ。
自らが手を掛けた相手の冥福を祈り、讃える。
　ヴィルマの大惨事に幕が下ろされた瞬間である。

ＳＥＩＳ：　千手と月光（後書き）

テオ討伐。
しかしまだ物語は続きます。
これからはリメイク前、全部カットした描写なので、リメイク前を読んだ方もどんな展開か分からない筈。
頑張ります。

では！
感想など送っていただけば幸いです。

ＳＩＥＴＥ：　想いの果て（前書き）

死んだ人は風になって、貴方の周りでダンスを踊るの

だって、死んでも貴方の側にいるんだもの

ＳＩＥＴＥ：　想いの果て

紅蓮の巨体が炎を纏い、揺らめく陽炎を引き連れて暴れ回る。
ジャンの両腕は吹き飛ばされ、テラが死んだ。イズミやスネーク、サラ、ゾルフまでもが生命（いのち）を刈り取られた。
数多の仲間の命を刈り取った紅い死神は、今度はこっちを向く。
長大な牙をこちらに見せつけ、信じられない速さで迫る。
その牙が、自分の身体を――

「……うおっ！？」

牙がこの身を引き裂く前に、マイルズの意識が覚醒した。
ガバッと音を立てて起き上がり、薄暗い中見えるのは、何かテントの様な物の天井。
よく見れば自分には毛布が掛けれており、今のは夢だと理解する。

「……夢か？」

まさか、『あれ』が夢だとは思えない。
そんな三流小説のオチみたいな事は無い筈だ。
それに夢にしては現実味が在りすぎる。
今のが夢ならスネーク達に土下座して謝らなければいけないだろう、縁起悪すぎだ。
グルッと周りを更に見渡す。
仮に今この自分が寝ていた場所が自分の部屋なら本当に『あれ』が夢かもしれないが、テントである。
確実に避難用のやつだ。
はぁっと息をつき、両手を今まで寝ていた毛布を取ろうとする。

「……っ！？」

腕を伸ばしたその時、突如右腕に痛みが走る。
よく見ればマイルズの右腕は包帯でグルグル巻きにされており、その包帯の中では何か、添え木の様な物の感触もある。
……やっぱり『あれ』は夢じゃない。
あの時、気を失う直前に自分の右腕の骨は折れたのだから。
『あれ』が夢じゃないと言える、動かぬ証拠がここにある。

「……」

右腕をジッと見る。
そういえばあの時最後にリリスの顔が見えた気がする。
彼女は無事なのか？
街はどうなったのか？
炎王龍は倒したのか？
次々と疑問が頭に浮かび、渦を巻く。
自分にこうやって手当てがされて寝かされていたという事は、少なくともあれから何かが起きた筈だ。
再度周りを見渡す。
避難用といえど、このテントはそこそこ広い。
いくらマイルズが怪我人だろうとまさか大切な寝床を一人に独占させてはいないだろう。
仮に街や皆が助かったのなら、ヴェン達がいる筈。
……だが、現実はマイルズの予想の斜め上を行っていた。
マイルズの隣、しかも同じ毛布の中。
顔にはガーゼが貼られ、額には包帯が巻かれているがその魅力は霞まない。
無防備に隣で寝ているのはブロンド髪のセミロングの女の子。
……見慣れた顔。

間違いなくリリスだ。

「……なんだ、やっぱリリスも無事だったんだな……って、ハァァッ！？」

よかった、リリスも生きていたと安心したのも束の間。

マイルズは今現在自分が起これているこの謎なシチュエーションに色んな意味で悲鳴を上げる。

自分が無事ならリリスも無事な可能性は高い。

だから無事に生きていて、疲れているだろうから寝ているのは分かる。

それは分かる。

分かるが、なんで隣で寝ている？

しかもこのテント内にいるのはマイルズとリリスだけ。要するに二人っきり。

テントの数が足りなくて仕方ないから……って事ではないだろう。

っていうか足りなくても色々頑張ったらリリスを別のテントへ、その代わりに適当にヴェンでも持ってこれるだろう。

……誰かの作意を感じる。

言っておくが、マイルズ・シャーロック十八歳は健全な青年ハンターである。

もう一番言おう、健全な『男』である。

隣で無防備なインナー姿の美少女（リリス）がいるとどーしても気になる。

凄い気になる。

無視とか無理だ。

一人で炎王龍を倒すくらい無理な話だ。

一人顔を真っ赤にしながらどうしようかと困るマイルズ。

うーんと腕を組もうとするが、右腕が痛くて組めない。

そんな悩めるマイルズにこのリリスという子は容赦無い追撃を仕掛ける。

「……ぅん」

普段抱きまくらでも使っているのだろうか、ガシッとマイルズの腰に顔を押し付け抱きつく。

……ストライーク！

マイルズは自分の心臓に何かが突き刺さった錯覚をおぼえる。

無論錯覚であり、胸を押さえても何もない。

「……ヤバい、あの時と負けず劣らず危機的状況だ……そもそも俺はなんで、さっきまであんな状況に置かれてたのに今はこんな平和感漂う事態なんだよ！？」

マイルズはついさっきまで炎王龍と激しいドンパチをしていた。

炎王龍の牙がこの身に食い込む直前まで追い詰められていた。

なのに気が付いたら相手が炎王龍からリリスに変わってるは、牙じゃなくて顔が当たってるとかなんか真逆の状態になっている。

生命の危機から理性の危機に変わっている。

「……おい、起きろ。せめて手を放せ」

「……ィヤ～」

軽くリリスの体を揺すって起こそうとするが、寝顔のまま眉間に皺を寄せたリリスは何故か甘い声を上げただけ。

……余計理性に危機が！？

惚れてまうやろ！

「くそっ、放せ、自分の為に放せ」

大声を上げて叩き起こすのはこの寝顔を見せられたら不可能であ

る。
故に小声。
しかし、小声では中々通じない。
う～っと眉間に皺を寄せ、更にマイルズにきつく抱きつく。
流石にこれは困ったもので、マイルズは左手で頬を掻くしか出来ない。

　リリスとマイルズは六歳の時に出会った。
既にマイルズはスネークと共にハンターを目指す為にドンドルマのハンター養成所へ行くことを決意しており、かなり地味ながら自己流トレーニングなどを続けていた頃である。
第一印象は「こんな子がハンターになるのか？」の一言につきる。
リリスにせよその隣にいたイズミにせよ、ハンターを目指すにはちょっと勿体無い程整った、綺麗な顔立ちをしていたからだ。
そんな少女二人が「私達もハンター目指すの」っていきなり現れたらそりゃ、スネークは笑うしマイルズだって度肝を抜かれる。
……だが、端正で整った顔立ちの女性ハンターが全くのゼロではない事をマイルズ達は知っていた。
自分達より先に養成所に行っていたティリアである。
彼女こそこう、「お姫様！」って感じの子だったのに、ゾルフや周囲の反対を押し切ってハンター養成所へ行ってしまった。
故に笑いはしたがその夢を否定はせずに、一緒になって色々とした。
夢を語り合ったりもした。

『俺達はなぁ、最強のハンターになるんだぜ！　なぁマイルズ？』
『そうそう！　んで、ゾルフさん達と一緒にヴィルマをドンドルマにも負けねぇぐらいすげぇ大都市にするんだ！』
『ほんとに～？　マイルズ達がなれるんなら他の人達も皆なれそうだけど』
『んだとリリス！？』

『アハハ……リリスちょっと言い過ぎ』
『ちょっとじゃねぇだろ！』

あのやり取りが、今でも直ぐに頭の中に思い浮かぶ。
一緒に笑って、喧嘩して、養成所に入ってからは一緒に滅茶苦茶ハードなトレーニングもした。
卒業後は一緒に何度も死線を潜り抜けてきた。
……だが、今回の炎王龍の襲撃でいつものメンバーの四人は二人に減った。
だからリリスは今マイルズに抱き付いているのだろうか？

「……」

自分も言えた義理では無いが、リリスだってよく見れば傷だらけだ。
炎を纏う炎王龍に突貫したのだから、綺麗な肌の所々に火傷の様な箇所もある。
イズミは引き裂かれ、スネークは焼かれた。
……本当にもう二人だけ。
あの四人での馬鹿らしいけど楽しいやり取りは、もう出来ないのだ。
あの時はもう何もかもが必死で滅茶苦茶だったが、落ち着いた今、急に泣きたくなってきた。
もう一度リリスの腕を外そうと試みる。
……今度は不思議と、あっさり外れた。
マイルズはテントの外に出る。
街の真ん中、自分達が炎王龍相手に必死に戦った広場の真ん中にテントはあった。
周りにもたくさんのテントが立っており、どうやら避難していた住民は全員ここでテントを張って寝ているらしい。
自分が気を失う直前はちょうど、陽が沈んで夜になった頃だ。

今もまだ空は暗い。
一日寝てたのか、それともまだ夜が明けてないのか、マイルズは分からないが、ただこんなテントが建ち並ぶ直中で泣くのは迷惑だろうし恥ずかしい。
そっと広場の端の方へ移動しようと足を上げる。

「……何処へ行くんだ、トイレかマイルズ君？」

聞き慣れない声にマイルズはピクリと反応して振り向く。
そこには銀の鎧を纏ったハンターが立っていた。
ヘルムは被らず、片手でブラーンと適当に持っているそのハンター、少し長めの黒髪はツンツンとはねており、髪と同じ漆黒の瞳は鋭い。
目付きが悪いのではなく、ただ切れ長なだけかもしれないが。
だがその鋭い目を含めても端正な顔立ちと言える程整っている。
美青年とでも言おうか。

「……誰です？」
「ドンドルマからここの救援に来たしがないハンターだ、悪いが炎王龍は俺達が討伐したからな。まぁそう身構えなくてもいい、別にお前を取って喰おうってわけでもねぇし」

見知らぬハンターを訝しげに見るマイルズ。
そりゃこんな夜中にいきなり名前を、しかも全然面識の無い奴に呼ばれたらそんな顔もする。
敬語なのは、一応である。
そんなマイルズを見て苦笑いする銀のハンター。
見た感じマイルズと大した歳の差は無いだろう。
せいぜい、どんなに多く見積もっても二十歳かそこらだ。
訝しげに見てくるマイルズに向かって両手を上げて、何もしませんとジェスチャーを送る。

「……何か用ですか？」
「まぁな。君が起きるのを待ってたんだ、少し話があるからな」
意外にも復活がお早いよーで、などと笑いながら歩み寄って来る銀のハンター。
防具は纏っているが武装はしていない。
どうやら本当に話をするために待ってたのだろう。
……だが、マイルズは情けないが、今から泣きに行こうと思って外に出たのだ。
他にも一応理由はあるが。リリスとかリリスとかリリスとか。
ともかく、泣きに行こうとした寸でこのハンターと話す気は起きない。
「……すいません、後でいいですか？」
「全く構わない。ただ――」
銀のハンターの返事を聞いて即座に踵を返し、広場の外れの方に向かうマイルズ。
だが、後ろから銀のハンターが言った言葉にピクリと反応する。
「――君が死にに行くのなら俺は止めなきゃいけねぇな」
再度振り返る。
先程と同じく、銀のハンターは苦笑いをしている。
どうやら苦笑いをしながらシレッと今の言葉を紡いだらしい。
気に掛けてるというよりは、面倒事を増やすなと言っているようだ。
「……なんで死ななきゃいけないんです？　生き残ったこの命、無駄にしたらあの世で仲間に何言われるか分からないじゃないですか」

「ならいいさ。何処とでも好きな場所に行くといい。但し、死ぬなよ？」

再度死ぬなと言い、フッと笑って今度は銀のハンターから踵を返した。

マイルズの気持ちや心境を見抜いているのか、深入りもせず、ただ死ぬか死なないか質問しただけ。

……だがそれは逆に言えば、死のうとした人がいるという事。

「ちょっと待って下さい！」

「……なんだ？　散歩か何かをするんじゃなかったのか？」

今の質問が心に引っ掛かる。

マイルズは思わず銀のハンターに声を掛けて止める。

銀のハンターは直ぐに振り返り、そんなマイルズを不思議そうな目で見つめる。

……いや、心の底を見抜いている。

返した言葉こそのんびりとした言葉だが、実際は全てを見抜いている感じ。

多分今からマイルズが何も言わなくとも、このハンターならマイルズの言いたい事を見抜いて話してしまうだろう。

「……ちょっと着いてきてくれませんか？」

「生憎……男と並んで散歩って趣味はねぇんでな……って言いてぇが、いいだろう。俺でいいなら着いていこう」

銀のハンターはニヤッと笑って断るのかと思いきや、あっさり承諾する。

マイルズのすぐ隣にまで歩き、何処へ行くんだと再度訊いてくる。

マイルズは無言で歩き出し、銀のハンターも静かにマイルズを追っ

た。
　着いたのは広場の東側。
まだ空は白んでおらず、星が煌めく。
つい先日までは様々な高さの建物が並んでいたのに、今では全てが灰と瓦礫になっている。
……こんなに開けて見えるのは悲しい。
無言でマイルズは立ち止まる。

「さて……何か俺に用か？　それとも相談か？」

　立ち止まったマイルズの隣で、鎧をガシャガシャと鳴らしながら銀のハンターが座る。
何故自分が呼ばれたか、大方の予想はついているだろうが、形だけ一応マイルズに問い掛ける。

「……誰が死のうとしたんですか？」
「大方……君自身察しがついてるんじゃ？」

　隣に座った銀のハンターを見下ろしてマイルズが問い掛ける。
やはり銀のハンターは質問が分かっていたのだろう、すぐさまそう切り返してきた。
横に立っているマイルズを静かに見上げている。

「……気になる人が二人いるんで」

　マイルズが顔を曇らせながら言う。
候補は二人……
　一人目はジャン。
婚約者であるサラと親友のゾルフを立て続けに失った。
それがもたらす心の傷は、マイルズには想像出来ない。

二人目はティリア。
自分がずっと想い続けていたゾルフが目の前で、自分を庇って死んだ。
ただ死んだのではなく、自分を庇って。
愛する人が自分を庇って死んだのだから、自責の念と心の傷は相当の量がある筈。
ましてや女性はそういうのに弱い人が多い。
ティリアが持ちこたえているかどうかは怪しい。

「……碧砲のジャンは強いな。苦しみながらも前を向こうとしてる。尊敬するよ、俺には無理だ」

近くに落ちていた瓦礫の小さな破片をつまみ上げ、ヒュッと前に投げながら銀のハンターが言う。
素直にジャンに尊敬の念を込めた声。
自分がヴィルマに到着する前に何が起こり、それがジャンにとってどの様な悲劇だったのかを聞いたのだろう。
本当に強い人だと再度言う。
先程銀のハンターが投げた破片が軽い音を立てて瓦礫の上を跳ぶ。
だがマイルズは銀のハンターの答えが指す一つの意味を知り、素直にジャンが前を向いている事を喜べない。
破片が跳ねる度に、マイルズの心に波紋が広がる。

「……という事は……」
「朱郭（しゅかく）のティリア。彼女だ、君が思った通りな」

瓦礫の上を弾み、やがて隙間に落ちて見えなくなった破片。
その行く先を見つめながら、銀のハンターが静かに言う。
……やはりティリアだったかとマイルズが顔をしかめた。
ジャンかティリア、自殺を図ろうとするならこの二人しかいない。

予想は出来る、そうしようとする気持ちも分かる。
が、だからと言って励ます事は出来ない。
マイルズが知らない苦しみが原因なのだ。
それを知らない者が励ませる筈が無い問題。
炎王龍はこの銀のハンターが倒したが、ティリアの苦悩は倒せまい。
……どうしたらいいのだろう？

「まぁそう心配するな。彼女には俺の仲間（つれ）が付いてる、なるようになる」

銀のハンターはのんびりそう言い、再び別の破片を手に持ち、また投げる。
軽くて渇いた音が夜中の静寂の中響く。
マイルズはのんびりとした銀のハンターを睨んだ。
当たり前だ、そんな簡単にどうこうなる物ではないのだから。

「あんた、そんなのんびりと――」
「同じ苦しみを知ってる奴が側にいるっつってんだ、少なくとも君が朱郭の下へ駆け付けるより遥かにマシだ。言っておくが、俺は君が思っているよりもずっと酷い地獄を掻い潜って生きてきた。彼女の傷がどんな物か、君よりもずっと理解している」
「――！」

マイルズが口を開けた瞬間、銀のハンターが無理矢理話しに割り込んで止める。
その目は確かに、何かを知っている様な目。
流石のマイルズも黙らせられる。

「安心しろ、朱郭は前を向く。……それよりも、俺がずっと訊きたかった事を訊いてもいいか？」

座ったままマイルズを見上げ、静かな視線を送る銀のハンター。
今はこのハンターを信じてみよう、そう思ったマイルズはその銀のハンターの質問とやらを聞くために頷いてみせる。

「リリスと言ったか……？　あの子は君の彼女か？」
「……は？」

今までのちょっとしたシリアスな雰囲気を吹き飛ばし、銀のハンターがふざけた質問を飛ばしてくる。
いや、銀のハンターの目を見るかぎり本人的には結構真面目に訊いている。
……のだが、さっきまでの会話とは真逆の質問。
固まるマイルズ。
それを見て銀のハンターは図星だったかと納得して頷いた。

「いやいや違いますから!?　大体なんでそんな事を急に!?」

顔を真っ赤に、否、火山の溶岩の如き紅蓮にそめてマイルズが叫ぶ。
その赤さたるや、炎王龍にも負けない。
折れた骨に響いて痛いが、叫んでしまったのだからしょうがない。
銀のハンターは「あれ？」っと声を上げて首を傾げた。

「いや……なんでってなぁ。あの子、君が治療受けてる間もつききっきりで側にいたし、テントにだって誰が言ったわけも無く、自分で『私が看ます』って言って入っていったから……その、なんだ、てっきりそういう仲なのかなとな」

違うのか？

そう言いながら片手をヒラヒラ振る。
火照った顔を冷ませと言いたいのか？
だが、マイルズは止まらない。
そんな関係ではないし、リリスが自分に気があるとは思えない。
それにルックスに釣り合いが取れていない。
あり得ない筈だ。

「んなわけ無いでしょ！？　俺とあいつは腐れ縁なだけです」
「……腐れ縁を舐めちゃいけんな。その『縁』がいつか『赤い糸』に変わるんだ、小指をよく見てみろ。……いや、実際はなんもねぇ、いちいち確認するなよ、お前天然か？」

銀のハンターの言葉にバッと反応し、自分の小指二本を見つめるマイルズ。
苦笑いしながら銀のハンターが突っ込みを入れるが、現在マイルズの思考回路は乱れに乱れている。
多分何も通じない。

「何も無いじゃないですか！」
「……当たり前だ。分かった分かった、お前とリリスちゃんの関係は『ただの』腐れ縁、それでいいのか？」

銀のハンターの問いにブンブンと首を縦に振るマイルズ。
そんなマイルズを見て、銀のハンターはあららと苦笑い。
ピッと、後ろを指差した。
マイルズがその指の先を見ると、そこにはリリス。
夜中は基本冷える。
防寒用なのかローブの様な物を纏ったリリスが立っていた。

「……『ただの』腐れ縁があんな心配そうな目で見るか？　リリス

ちゃん言ってたぞ、『私にはもうマイルズしかいないんです』ってな」

ニヤニヤと笑って銀のハンターは立ち上がり、それじゃあ二人っきりの時間を楽しんで、とか言いながらテントが並ぶ広場の中心へと歩いて行った。

それと同時にリリスがマイルズの方へ駆け寄って来る。

「……今の話し、聞いてたか？」

恐る恐る、マイルズがリリスに訊く。

マイルズの正面に立ったリリスは小さく首を縦に振り、その首の振り幅よりも小さな声で答えた。

かろうじてマイルズに届くか届かないかの大きさである。

「途中から……ね。『ただの』腐れ縁はちょっとショックかな……」

「……」

これは夢か？

また夢なのか？

マイルズが固まる中、遠くの方で誰かの笑い声が響いた気がした。

マイルズと銀のハンター――ジンが話していた広場の東側とは正反対の西側。
一人の女性が空虚な目で虚空を見つめて座っていた。
幽霊の如く沈んだ雰囲気を纏って。

「ティリアさんだったかな……？　隣、いいですか？」

座り込むティリアに話し掛けたのは、金の防具に金の髪、まさしく金尽くしの少女、シィである。
無言で頷いたティリアを見て、シィは真横に座る。
チラッと横目でティリアを見るが、虚ろな目は何を見ているのか分からない。
が、虚空を漂い、今はもういない人を探している様に見える。

「……えっとね、ジンが言ってたよ。死んだ人を思って泣くと、その人も天国で同じだけ泣くんだって」

ピクリとティリアが反応する。
未だ虚ろな目のままだが、それでもシィの方を向いた。
そんな彼女の反応を見て、シィが続けてゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……私にはティリアさんがどう思ってあんな行動したのか分かるよ。似たような事した事あるもん」

シィが静かに言葉を紡ぐ。
その言葉を聞いたティリアの目が、少しずつだが虚ろな物からシィに対する興味の色が出てきたか。
『知っている』と『知らない』というのは雲泥の差、この苦痛を知っているというシィの言葉が胸に入ってきたのだ。

「ジンって分かるかな？　私の隣にいた銀色の防具を着たハンターなんだけど」

　シィの問い掛けにティリアが頷いて答えた。
知ってるのは当たり前。
シィと共に三日掛かる道のりを僅か一日で走破して、人間業だとは信じられない程鮮やかに、素早く炎王龍を倒したハンター。
世間からは『千手』と呼ばれ、大陸一のハンターとも言われる青年。

「ジンはね、私を庇って何度も何度も何度も、今五体満足、生きてるのが不思議なぐらい傷を負ってるの」

　いつもはのほほんとした不思議を纏っているのがシィの特性なのだが、今ばかりはそれは無い。
静かに、真剣に、真っ直ぐティリアの目を見つめて喋る。
稀代の天才ハンターと呼ばれるジンとシィとて人は人。ハンターなのだから怪我ぐらいするだろうが、思わぬ事を言うシィ。

「ホント……何度も何度も自分を恨んだよ。なんでちゃんと動けないんだとか、もっと別の攻め方があったでしょとか。いくら言っても所詮それは“たられば”なのは分かってるけど、自分を責めずにはいられない。血塗れなのに私の心配ばっかりするジンに何度も泣いて謝ったし、ジンが生死の境をさ迷う様な怪我をする度に自分も一緒に死のうとか思って、鏃を喉に刺そうとした事もあるよ。分かってたのかな？　結局包帯だらけのジンに止められたけどね」

　純粋に人を思う気持ちは時に人を狂わせる。
大切な人の死の後を追う様に死ぬ人は、そういう想いが積み重なって事を起こしてしまう。
今回のティリアもそれであり、かつてシィがした事もそれ。

愛情だとか、友情だとか。
絆は人を強くすると同時に、脆くもさせる両刃の剣。
それを如何に上手く操るのかは人それぞれであり、その結果がどうなろうとも絆の『外』にいる者が何か口出し出来る権利は髪一本分も存在しない。

「ティリアさんが自分に銃口を向けたのは、私からすれば当然の事だと思うよ。だからあの時は止めなかったし、今から私の目の前でしても止めはしない」

ジンとシィの二人が炎王龍を討伐した後、ここの住民達は変わり果てた街（ヴィルマ）を見て一時は嘆いたが、直ぐに街長を筆頭に「また建て直せばいい」と前向きに捉えて現在に至る。
そしてちょうど、街の住民達が「それもそうだ」と心を落ち着かせた時にそれは起きた。
ティリアが自身の得物であるライトボウガンを自らの体に押し当てて、引金を引こうとしたのである。
それにいち早く気付いたヴェンとロットの二人の少年ハンターがティリアを抑えなんとかなったのだが、ティリアの心は未だに不安定。死のうとして死ねなかったからか、まるで魂が抜かれた様な、幽鬼の如く形相だった。
そんな彼女を見てジンがシィを見張りに付け、街の住民達にゾルフやヴィルマのハンター達の事を、途中でヴェンやリリスに話し手の座を譲ったが、説明した。
ティリアがゾルフを好いていたのは住民達にとっては周知の事だったらしい。
何も言えず、ただ見張りのシィに全員がティリアを任せたのである。
そんなシィが、死ぬのは止めないと堂々と言った。
ティリアとて一応、少しだが周りは見えていた。
その言葉に目を見開き、この子は本気で言っていると悟る。

仮にティリアが今から死ぬ為に、ナイフを貸してくれと頼めば彼女はナイフを貸すだろう。
全てティリアを思っての行動である。

「……もし私が死んだとしたら、貴女は一体どうするの？」

住民達全員から自分の事を任されているのに、自殺の手助けをしたなんてのが知られたら大変だろう。
ティリアの目の色が少しだけ普段の色に戻り、シィに静かに問い掛けた。

「私はティリアさんの為にやった事だと言い張るよ。きっと凄い非難されるだろうけど、ジンは分かってくれると思う。言い方悪いけど、私にとってジン以外は何でもいいの。ジンさえ理解してくれればね」

サラリと答えて「だからぞっこんって言われるのかな～？」と首を傾げるシィ。
確かにぞっこん、否、それを通り越して依存している気もする。

「……」

「仮に何か止める言葉を掛けるなら、ティリアさんが死んで、ゾルフさんが喜ぶの？　って私は言うよ。ジンに言われたの、私が鏃を喉に刺そうとした時にね。『お前が死んで誰が喜ぶ？　悲しむ人がいても喜ぶ人はいないだろう？　俺があの世で直ぐにお前と再会したら、俺はお前を許さない』ってね。言いたい事は分かるけど、恋する女の子の気持ちはジンにもきっと分からない。後はティリアさんが決めるだけ。私はそれを見届ける」

静まるティリアにそう言って、シィは腰から剥ぎ取り用のナイフ

を出した。
弱い星の光もちゃんと反射して光るそれは、人を殺すには十分の切れ味を持っている。

「取る？　取らない？　私は全部ティリアさんに任せるよ。……ゾルフさんには悪いけどね」

星の光を反射して、冷たい光を放つナイフ。
それにティリアは手を伸ばし、しかし柄を握らずに引っ込めた。
スッとティリアが立ち上がる。
その目には、幾分か光が戻っていた。

「……ありがとう。私も前を向いて、ゾルフさんの意思を継ぐ。もっと大人な雰囲気作れないと、ゾルフさんをあの世で落とせないしね」

蹲いた朱郭は立ち上がり、灰狼の背中を追い掛ける。
その覚悟を、未だ小さな光だが、その目の中から思い起こさせる。
シィはそう、と言った後、同じように立ち上がった。

「……ティリアさんは私とそっくり。ハンターになった理由も多分、一緒だよ。あ、ティリアさんの方が歳上だから私が真似した事になるのかな？」

う～んと背伸びをしながらシィが言う。
……そういえば、シィとジンは何故ハンターになったのだろう？
この二人は名前は有名だが、出身もハンターになった経緯も全く聞かない。
存在事態が怪しいと一部のハンターからは言われる程、謎なのだ。
ティリアはふと疑問に思い、シィに尋ねる。

「……ねぇ、貴女達はどうしてハンターになったの？」
「うん？　それはねぇ、えっと……私は――」
シィが指を立てて顎に当て、う～んと考えながら口を開く。
が。
「その話しはまた今度という事でお願いしますよ、朱郭のティリアさん。もう心の方は大丈夫なんですか？」
「――あ！　ジン！」
シィが口を開いたその瞬間、前から急に声が割り込む。
銀の鎧を纏ったハンター、ジンである。
シィはジンを見つけると先ほどまで話そうとした事など頭からぶっ飛んだのか、直ぐにトテトテと走り、むぎゅ～っと抱き付いた。
……成程、確かにぞっこんだ。
ティリアがそう思ったのは言うまでもない。
「……お陰様で少しだけど立ち直れたわ。私がここで死んだら、ゾルフさんに怒られちゃうもの」
「……そいつはよかった。今ヴィルマで最強なのは貴女なんだから、是非ともゾルフさんの愛したこの街を復興させて下さい」
むぎゅ～っとしがみついたシィの頭を片手で撫でながら、フッとジンは笑いながら言う。
ヒュッと空いてる片手が霞み、何かを飛ばす。
こちらの方に飛んできたそれを、ティリアは反射的に受け止めた。
投げられたそれを見てティリアは目を見開き、頬が赤くなる。
だが直ぐに表情を変え、ジンにそうするわと笑って答える。
少しずつだが目の光が強くなる。

……ここで後ろを向いてはいけない。
前を向いて、進まないと。
そう胸に刻むティリアである。
この二人の経歴は、また今度訊いてみる事にする。

「……上手くやったなシィ」
「私は何もしてないよ？　でも褒めてくれるなら、ご褒美にキスとかしてほしいな～」
「……遠慮しよう」
「なんでっ！？」

う～っと唇をつき出すシィを無視して、ジンが歩き出す。
ジンにしがみついた形のシィもまた、勝手に体が前に行く。
そんな二人の後をティリアが歩く。
ジンがティリアに渡した物。
灰狼ゾルフの愛剣の柄の一部である。
そこにはゾルフの粗っぽい文字で『愛しの妹へ』と血で書かれていた。
ゾルフに妹はいない。
いたのは自分、妹『みたいな』ティリアだけ。
最後の最後で、想いは少し重なった。
街の東から、少しだけ金の光が顔を出す。
ヴィルマの夜が明けた。

ＳＩＥＴＥ：　想いの果て（後書き）

なんとなくキャラ設定公開

テラ・ドレーク
男　享年２１歳

通称紫蘭のテラ。
ガルルガシリーズで身を固め、弓を操る中距離型のハンター。
下位ハンターだが、実力は上位クラスに劣らない。
兄貴分で仲間思い。
ヴィルマのハンター達の中ではムードメーカーであった。
ギルドも認めるその実力と才能は、将来を期待させる程輝かしかった。
ヴェンを庇い片腕と片足を無くし、それでも尚ヴェンを逃がそうと囮になって死亡。
ヴィルマのハンター達に大きな衝撃を与えた。
好きな言葉は『男気』。
最後まで男らしかった。
元々モデルは鋼の錬金術師のハボック少尉。
ちょっと違うキャラになってしまった。

こんにちは、神威です。
まだまだ物語は進みます。
……一体前作でどれだけカットしたのか、私。

笑えません。
今後は急転直下、な話になる……事も無いか。
ちょっとマッタリ、しかしそれで終わらせないのが私です。
それでは！
感想など気軽に送って下さいね。
凄い喜びます。

OCOH‥　灯火（前書き）

「……ねぇジン、回復薬と回復薬グレートの原料には青キノコが使われてるんだよ」
「そんな事知ってる。何が言いたいシィ？」
「青キノコって滋養強壮にいいんだってね」
「……だから？」
「ジン、青キノコを丸々焼いたステーキ食べる？」
「……俺に何をさせたい？」

OCOH：灯火

夜明け、ちょうど曙の頃に馬の蹄の音が響く。
いくつもの蹄が大地を蹴り、軽快な音を立てて走る。

「……なんあれ？　めっちゃボロボロやん。こら……復興は難儀な話やわぁ」

蹄の音が響き、ついでその馬達が引く馬車の車輪がゴトゴトと鳴る。
そんな馬車の中から一人の女性が前に見える焼け焦げた街を見てウゲッと呻く。
赤い特徴的な帽子に手を当て、馬車に更に速度を上げる様に指示を飛ばす。

「……流石に馬の速度でも街の損害までカバー出来ひんか。不可抗力やな。なんかこう、サァ～ッとしとんで。潰れる前の街を知っとるし、なんやえらい寂しいなぁ」

女性がぼやく。
馬車が速度を上げ、蹄の音が早くなる。
女性はただ、壊滅した街の風景を見つめるばかりであった。

焼け焦げ、灰となり、壊滅した中継都市ヴィルマ。
だが壊滅したのは街のみであり、住民達は生きている。

復興の為に、この街を愛し、守ろうとして散ったハンター達の思いを背負って。

朝早く、夜明け前から瓦礫を少しずつ運び、イズミやゾルフの遺体に毛布を被せて復興作業勤しむ住民達。

それをマイルズはテントの中から覗いて見ていた。

大の男達が広場の周りにまるで何かの大群の様に群がる瓦礫を運び、何か使えそうな物を探す。

が、炎王龍の炎が全て食い付くし、大した物は見つからない。

柱に使われていた木材は炭になり、石や煉瓦は灰に、或いはボロボロに砕かれている。

マイルズとしては彼らを手伝いたいのだが、片方の腕の骨が折れていて何も出来ない。

無理矢理作業に参加したら迷惑なだけだ。

「ほら、怪我人なんだからマイルズは大人しく寝てる！　寝た方が回復しやすいんだよ？」

テントの中からリリスがマイルズを引っ張り、無理矢理寝かす。

自分も大なり小なり怪我しているのに、丸っきりそんなの無視である。

マイルズを寝かせ、毛布をかけて自分はテントの外を眺めている。

やはり彼女も気になるらしい。

リリスはマイルズの様な大怪我は無いが、疲労が溜まっているとの判断で安静にしとけと言われている。

マイルズと同じく動けない状態なのだ。

マイルズはリリスの背中を眺める。

夜明け前、二人きりになった時。

あの時のリリスの言葉は親友のイズミやスネークを亡くした寂しさから来た物なのか、それともマイルズへの好意なのかは見当がつけにくい。

どちらかなのか、或いはどちらもなのか。
ただリリスはあの後少し顔を赤くしながらも話しをはぐらかして、なんかうやむやのまま今に至る。
リリスの様な可愛い子に好意を向けられたのなら、容姿は平々凡々、どんなお世辞でも『ちょっと整った顔ですかね？』程度なマイルズとしては大金星である。
決してあの銀のハンターの様な鋭く、クールな感じの美男子ではない。
マイルズ的にはリリスとは、『可愛いと思うが仲の良い仲間』であり、そういえばちゃんと女の子として見てはいなかった。
改めてリリスを見ると、やはり可愛い。
いや、綺麗と言った方が的確か。
　私服は全て炎王龍に家ごと焼かれ、現在彼女やマイルズはインナーに、防寒用のローブの様な物を着ている。
お洒落とは言えないが、それでもリリスの美貌は霞まない。
逆に際立たせているかもしれない。
泥まみれの宝石程美しいとは誰の言葉か。
　このうやむやな関係にマイルズとしては早めに終止符を打ちたい。
仲間なら仲間、恋人なら恋人。どっち付かずは遠慮したい。
無駄に期待してしまうから。
それに銀のハンターが言った、『ただの腐れ縁、それでいいのか？』という言葉が引っ掛かる。
それでいいのかという疑問はマイルズに掛けられたものだ。
リリスがマイルズに好意を抱いていて、それを受け止めなくていいのか、って意味ではない。
……改めてリリスは自分にとってなんなのか考えてみる。
　彼女とは旧い仲なのは確かだ。
そういえば出会って以降気付けばずっと隣にいた気もする。
ドンドルマのハンター養成所での創立祭ではなんだかんだ言いつつ踊ったりもしたか。

……これは好意なのだろうか？
リリスはあくまでもリリスであり、『女の子』として見ていたわけではない。
出会って以降は側にいるのが普通。
側にいない方が不自然で変な気がする。
二度目だが……これは好意なのか？
自問自答を繰り返す。
　いつだろうか、スネークがイズミに惚れたとか言ってきた時に言っていた『なんか、胸がドキドキするっていうかよ！』とかなんとか。
マイルズはもう一度リリスの背中を見る。
無論肌が見えて官能的とかではない。
が、確かに変に意識して、ドキドキはする。
これはスネークの言葉を思い出してからなのか、惚れてるからなのか分からない。
……こういう時は真っ先にスネークに相談するのだが、もう彼はいない。
　自分の気持ちが分からない。分からないが…リリスの事は大切に思っている。
もしそれが恋心というやつならば、好きなのか？

「……なぁリリス」
「ん？　どうしたの？」
「いや、あのな……」

　「お前は俺の事好きか？」、なんて言葉はマイルズは死んでも言えない。
そんなプライバシーの欠片も無い発言、流石に遠慮したいところ。
それに「別に好きじゃない」なんて言われたら大惨事だ。
それはもう、マイルズの心境は今のヴィルマとなんら変わらない焼

け野原と化す。
故に名前を呼んだのはいいが、結局何を言えばいいのか分からなくなってどもる。
頭の上に『？』を浮かべた様な顔をして首を傾げるリリス。
そりゃそうだ。

「なに、体痛いの？」
「いや、そんなのじゃなくてな……お前があの銀のハンターに言った事とか、夜明け前に言った事が気になって……」

遠回しに訊いた、様に見せ掛けて実は直球である。
変化球なんて気の利いた物ではない。
思いっきりの直球勝負。
しかしこれが現在マイルズが出来る、可能な限り遠回しっぽく言った言い方なのだ。
マイルズはマイルズなりに頑張った。
……が、やはり直球。
「えぇっ！？」っと声を上げてリリスは顔を赤くした。
赤くなった理由は不明。
何故かさっきまでは合わせていた視線をマイルズから逸らしたのも不明。
やってしまったとマイルズは心の中で溜息をする。
リリスはリリスで一人アワアワしている。
理由は簡単、自分がその場の勢いでポロッと言ってしまった言葉で自分の気持ちをマイルズに感付かれたかもしれないから。
亡き親友イズミは積極的に行きなさいと煩かったので、天国で「やっと言ったか……」と喜んでいるかもしれない。
目力のあるリリスは一見すると気の強そうな外見。
恋愛も積極的な感じがするが……
実際は恋愛沙汰に関しては非常に奥手。

半端無く慎重。
恋愛沙汰は石橋叩いて渡るどころか、石橋程度じゃ安心して渡れない。
最高級の良質な鋼、エルトライト鉱石の橋じゃないと渡れないぐらい奥手なのだ。
そんなリリスにとって、今のマイルズの言葉は強烈。
マイルズにとっては精一杯の遠回しな言い方も、残念ながらリリスにとっては貫通弾ＬＶ３並みの直進力。
問答無用でリリスの心を貫いてしまう。
　どうしよう、どうしよう、どうしよう。
リリスは焦る。
ここでマイルズがもっとリリスの心に感付いて、尚且つリリスに好意を持っていて「俺も好きだ！」なんて言ってくれたらどんなに楽で、どんなに幸せか。
しかし残念だがマイルズは中途半端にリリスの好意に感付いた。
故に「あの言葉は……」とリリスにとって最も辛い意味確認の問い掛けをしてきた。
「別に大した意味は無い」とは言えない。
自分の気持ちに嘘は付きたくないから。
しかしだからと言って「私はマイルズの事が好きなの、それが何か？」、なんて言葉も無理。絶対無理。
うぅ～っと頭を抱えて考え込む。
こんな様子を見ているのだからマイルズには感付いて欲しいが、何やら「しくじった」って顔をしている。
……しくじった？
という事はリリスの気持ちにちゃんと気付いてる？
そんな可能性が生まれる。
その瞬間、リリスの頭の中の何かが音を立てて切れた。

マイルズはすまなく思っていた。
自分の言葉でリリスに変に気を使わせてしまっている事に。
頭を抱えて考え込んでいるのだ、そりゃやってしまったと思うだろう。
なんて言葉を掛けようか？
悩み所である。
顎に手を当てどうしようかと悩みに悩む。
そんな時、リリスが急に動いた。
今までずっとテントの出入り口の側にいたリリスがマイルズに向かって飛び掛かって来たのだ。
片腕の骨が折れているマイルズ。
止めれはしない。
えっ、と目を見開いて驚くマイルズを他所にリリスはそのマイルズの胸の中へダイブ。
二度目だが、マイルズは片腕を骨折中だ。
受け止めれはしない。
故に腹にタックルが見事に入る。
……これは痛い。
噎せる程痛い。
肋骨が悲鳴を上げている、気がする。

「ぐっ……悪かった、悪かったからリリス、鯖折りは止めて……いやマジで……」

ギューッと抱き付いて、訂正、鯖折りを仕掛けて離れないリリスにマイルズが両腕をジタバタさせながら嘆願する。
腕一本折れているためリリスを離せないし、もしかしたら折れてなくともこのリリスは離せないかもしれない。
それにもう一つ。

女の子というのは男の様にゴツゴツした人は少ない。
たとえそれはハンターだろうと関係は無い。
故に、鯖折りをくらって痛いのに何故か柔らかいだのなんか良い香りがするだの、痛みとは正反対の物もマイルズにいろんな意味で攻撃を仕掛けてくる。
鯖折りをくらって呻きながらも、マイルズは思う。
リリスって、意外とプロポーションは良いと。
……更に縛りがキツくなった気がした。

「……なの」
「……は？」

マイルズを鯖折りに、訂正、本人的には熱い抱擁をしながらリリスが小さくポツリと何かを呟く。
無論、痛みとその他諸々を堪えているマイルズの耳には届く筈も無い。
だが、一応何か呟いたのは理解したらしい。
マイルズは痛いのを我慢し、湧き出る煩悩を捩じ伏せて自分の胸に顔を押し付けているリリスを見る。

「だから私はマイルズの事が好きなの！」
「……！？」
「マイルズさん！　リリスさん！　ドンドルマから救援物資が届きまし……た……んですけどそれどころじゃないですね。失礼しました！」

リリスがもう何か開き直った感じで大声でそう言い、マイルズを驚愕させる。
と、同時にヴェンが慌てた感じで入ってきて何事か伝えるが、そんな状況では無いと判断、直ぐ様踵を返して帰って、否、逃げて行っ

た。
嵐の様に現れ、嵐、じゃない、すばしっこいケルビの様に素早く逃げたヴェン。
だが二人はヴェンなど眼中には無かった。
マイルズは驚き固まり、リリスは尚もマイルズを鯖折り……ではなく抱き付きながらマイルズの目をジッと見た。
そして、目を閉じて顔を近付けてくる。
　信じられないリリスの暴走。
だが、今さっき言った言葉は本心だろう。
ついでにその言葉に物凄く喜んでる自分の心を見るからに、自分もやはりリリスの事を大切に思っていたのだろう。
これからは仲間であり恋人になるのか。
染々思いながら、鯖折りの痛みに耐えながらマイルズも顔を寄せる、が。

「……ねぇねぇジン、ヴェン君が凄い慌ててたけど、これかな？」
「シッ！　シィ、お前ムード壊すな。これからあの二人は大人の階段を登る……いや、数段飛ばしで駆け上がるんだからな」
「という事は……あ、じゃあ私名付け親になりたい！」
「馬鹿かお前、それはあの二人の特権だ。どーせミャァだのニャァだの変な名前だろ？」
「変じゃないもん、可愛いもん！」

　マイルズもリリスも固まる。
それはもう見事に、ピタリと。
鯖折り……ではなく熱い抱擁状態のまま、二人はテントの入口を見る。
……そこには二人のハンター。
一方は漆黒の髪と目をした美青年。
もう一方はキメ細やかで美しい金髪に澄んだ蒼の目をした美少女。

無論、ジンとシィである。
二人仲良く、覗き見中。
覗き見対象は勿論マイルズとリリス。
やれ大人の階段だ、やれ名前だ、勝手に盛り上がっている。
　硬直状態のマイルズとリリス。
そりゃそうだ。
……だが、ジンはそんなの気にしてないのか、物凄い事を言ってのける。

「……なんか固まったな」
「だね～。きっと気になるんだよ」
「成程。……なら俺らの事気にしなくていいから、どうぞ好き勝手に踏み出しちゃいなＹＯ☆」

　シィの相づちもあり、ジンはグッと親指立てて二人に言う。
……気にしなくてとか無理である。
絶対に無理。
なんせ二人共に初めて、俗に言うファーストキスというやつだ。
人前でそんな事出来る者などそんなに、いや、殆どいない。

「照れなくていい。結婚式上げるなら出席者全員の前で誓いのキスだ、その練習と思えばなんとも無い。だろ？」
「私達も結婚式はまだだけど見られた事あるもんね～、ライザさんに」
「……それは言うな」

　ほらほらと急かすジンと、隣でニコニコしながらジンに抱き付いてやっぱり二人を眺めるシィ。
物凄く楽しそうである。
それはもう、心の底から楽しそうだ。

ハッとリリスの正気、否、理性が復活する。
バッと……はやっぱり離れられず、ゆっくりマイルズから離れて叫んだ。

「何見てるんですかっ！？」

当たり前の突っ込みであった。
「何故って……なぁ？」と二人仲良く顔を見合わせて首を傾げるのだが、当たり前なのだ。
プライバシー侵害というやつである。
犯罪だ、ギルドナイトに訴えようかと微妙に脅すリリス。

「……仕方ない。ちゃちゃを入れるのは止めるとしよう。それじゃあな、ドンドルマからの支援部隊が目視で確認出来たから、なるべく早く用事はすませろよ」
「それじゃあ～ね～！」

やれやれ仕方ない、そう言いながら首を横に振り、残念そうにテントから出る。
ドンドルマからの支援部隊とかなんとかは、ヴェンも言っていたか。
散々からかい、二人はいなくかる。

「……」
「……えっと……」

二人がいなくなったのはいい事だ。
いい事だが、その後気まずい空気が二人の間に漂う。
理性が一時吹っ飛んで押し倒したリリスと押し倒されたマイルズ。
気まずい、気まずいったら気まずい。
二人の間で木枯らしが吹き荒れている、気がする。

「……まぁその、なんだ、なんか良い雰囲気を潰されちまったな」

マイルズとしてはもう、笑うしかない。

何がなんだか分からずにいきなり押し倒され、何故かキスまでしそうになった。

……いや、しそうになったというよりは、しようとした。

本人的にはリリスの想いに答えたつもりである。

一方のリリス。

潰されちまったなぁと苦笑いするマイルズを見て、ちょっとだけホッとする。

自分でも意味不明な程暴走して飛び付いた挙げ句、キスをしようとしたり、もう穴があったら飛び込んで、四年ぐらい籠りたい気分であったからだ。

マイルズが苦笑いだが笑うのを見て安心する。

……あんな無茶苦茶な事したのに嫌われてないと。

と、ここでリリスはある事に気付く。

マイルズは自分の無茶苦茶な行動に驚きながらも、なんだかんだで受け止めくれた。

普通、無理矢理迫って来たら突っぱねるだろう。

骨折れてるけど。

……という事は、まさかの恋愛成就？

「……ねぇ、マイルズは私の事好き？」

もう先程の暴走で自分は想いをぶちまけた。

思いっきり言ってしまった。

ならいっそその事開き直ってマイルズはどうなのかと訊いてみる。

凄い声が小さくなってしまったのは、リリスの本来の姿。色恋沙汰は石橋叩いても渡れない彼女らしさである。

彼女なりの精一杯。

「……そうだな、さっきまではよく分からなかったけど、さっきので気付いた。……その、なんだ……俺がリリスの事をす、す……あぁもう！　気恥ずかしくて行動した方が早ぇよ！」

ジンとシィという二人の厄介者を追い払っていたリリスは、テントの入口に立っておりマイルズの側にはいない。

マイルズは一人先程のリリスよろしく、何かが吹っ切れた感じで立ち上がり、リリスの方へ歩く。

片方の腕は折れているので動かせないが、一本は動く。

その片腕一本で無造作にリリスを、鯖折りではなく『優しく』抱き寄せる。

驚くリリス。

そんなリリスを傍目に、マイルズはそっと顔をリリスの唇に寄せた。

ガラガラと車輪が音を立てて、早朝のヴィルマに五台の馬車が到着した。

元来馬とは王族などの上級階位の者達が使用する高級品。

物珍し気にヴィルマの住民達が集まる中、赤い、特徴的な衣服に身

を包んだ女性が馬車から降りて周りを見渡す。
そして、思いっきり叫んだ。

「初めましてやな、うちらはドンドルマからの緊急復興支援部隊や！　この後ろの馬車ん中にはまぁ、ザァーッと色々役に立つもんが入っとる！　ほれ、皆喜びぃ、ヴィルマも直ぐに復活やぁっ！」

音頭を取る女性。
ヴィルマの住民達はなんだかよく分からないが、ともかく救援物資が届いた事だけは理解し、女性が音頭を取った後直ぐにオォーッと歓声を上げる。
それに伴い赤い衣服を纏った女性は後ろに指示を飛ばした。
すると馬車の荷台から数十名の支援部隊のメンバーだろうか、ともかく人が出てきて流れ作業で何かを馬車から下ろしていく。
ざっと見ただけでも水、食料、毛布など様々だ。

「……しかしまぁ、意外とお早い到着だな」
「だね～。馬でももっと時間掛かると思ってたよ」

わぁーっと盛り上がり、その勢いのままヴィルマの住民達も部隊の人達を手伝い、何かを運び出していく。
防具を纏ったヴェンやロット、ケーンの三人の生き残ったハンター達の姿も見える。

「……にしても、ギルドナイトを送ってくるとはな。しかもあの人かよ」
「誰だっけ？」

赤い特徴的な衣服。
あれはギルドナイトと呼ばれる特殊なハンター達が纏う物である。

ギルドナイトとはギルド直属のハンター。
違法を取り締まったり、新種のモンスターの調査を行ったりするちょっと異色のハンター。
因みに全員それ相応の高い実力は有している。
ジンはあの赤い女性に見覚えがあるのか、溜息を溢すがシィはいつもの通り、覚えていないらしい。
誰だっけと首を傾げた。

「ほらあれだ、やたらとフレンドリーな――」
「あ！　おったおった、おりよったで！　ジン、シィ、お久やなぁ！」
「――言った側からこれだ……」
「でも分かんない、私」

覚えていないシィにあの女性は何者かとジンが説明をする、直前でその本人が片手を振ってやって来た。
ジンが言った通り、やたらとフレンドリーである。
ハァッと首を振るジンと、未だ思い出せないシィ。
そんな二人に女性は駆け寄る。

「よっ！　元気してたか二人共！」
「……お気遣い無く。エミルさんは相変わらずで」
「相変わらずも何も、前会ってから大して日にち経ってへんやろ？　そない直ぐうちは変わらへん」
「まぁ確かに大した日にちは経ってねぇけど……俺が言いたいのはそのテンションで、見た目じゃないです」

服装と同じく真っ赤な帽子をクイッと上げて、その顔を露にする。
キラキラと光る、好奇心の強そうな翠の目。
整った大人な顔立ち。

美人だ。
ギルドナイトのエミル・ラグナス。
それが彼女の名前。

「あぁ！　エミルさん！　思い出したよジン！　凄いテンション高い人だよね！」
「……シィ、本人の目の前でそれを言うか？」
「なんや、やっぱりうちの名前忘れとったんかシィは。これで四回目。初めてやわ、こんな名前忘れられんの」

やっと思い出したシィ。
何かスッキリした様子で仕切りに頷く。
ジンはやれやれと首を振り、エミルは地味にショックを受ける。
そりゃ、四度も名前を忘れられると結構キツイか。

「……後ろはシュリンさんと、誰だ？　初めての顔だな」
「せやせや、この子紹介しに来てん。復興支援はついでや」
「……逆でしょう？」

ギルドナイトのエミル。
その後ろにいる二人のハンターを見ながらジンが訊く。
一人は顔見知りで、もう一人は全くの初対面。
恥ずかしげに俯いている。

「ほぉ……一度しか会ってないのにあの『千手』に名前を覚えてもらってるとは、光栄だな」
「俺、記憶力は良い方なので。それにギルドナイトなのにその格好、インパクトでかすぎて忘れませんよ」
「私は忘れた！」
「……シィ、それは分かってる」

シュリンと呼ばれたハンター。
白くゴツい鎧、グラビSシリーズと呼ばれる物を着たハンターである。
ヘルムは今は腰にぶら下げており、渋い髭面が拝める。
そんなシュリンは自分を覚えていたジンを感心した様に見つめ、穏やかに笑う。
通常ギルドナイトは現在エミルが着ている装備をするのが普通なのだが、このシュリンはそれを無視。
堂々と自分の好きな装備を装着している。

「後ろの子は？」
「フフフ……うちの秘蔵っ子や！」
「……よ、ヨナ・ランボルと言います。お会い出来て光栄です……！　『千手』のジン・フォルクスさんに『月光』のシィ・シャネルさん！」
「……ねぇジン、私この子知らない」
「当たり前だ、初対面だからな。話をちゃんと聞いてろ」

エミルの服装と同じだが、色は青い物を着ている黒髪の少女。
ヨナというらしい。
小柄で、華奢で、本当にギルドナイトか怪しい。
が、一応ギルドナイトの制服と言える服装をしているのだ。やはり実力はあるのだろう。
人は見掛けによらないから。
隣のお惚け天然娘を見て常々思うジンである。

「しかしまた、早かったですね」
「ライザさんが手ぇ回してな、あんたら出発したと同時に物資詰め込んで、直ぐに出発して来たんや。あんたらが着いたら上位の古龍

なんて一瞬でケリ着いてまうさかい」
「……流石ライザさん、と言うべきか」

要するに、ジンとシィの二人が馬に乗ってドンドルマを出発した直後にはライザの手配により救援物資を詰め込んだ馬車が配備され、緊急復興支援部隊が作られたという事である。
ライザは一体どれだけの権限を持っているのか謎である。

「まぁそんな事や。復興作業もせなあかんし、直に本格的な復興支援部隊が竜車で来よる。馬車やとやっぱ荷物制限されるさかいな。んじゃ、あんたら二人にヴィルマの被害状況を簡潔に説明してもらおか～」

のんびり言うが、やはりギルドナイト。
眼差しは鋭く、仕事人って感じがする。
現在ヴィルマの状況を熟知しているのはジンとシィの二人。
他には街長とヴィルマのハンターの生き残りが数名。
だがジンとシィ以外は色々と大変だ。
ティリアはまだ完全復活は出来ていない。
ゾルフの形見である柄の一部を握り締め、現在療養中。
両腕を失ったジャンも療養中。
ヴェン達ルーキー三人は復興作業の手伝い。
リリスとマイルズは……何をしているのか不明。
大人の階段を駆け上っているか、いないか。
……ともかくジンとシィに訊くのが得策だ。
フゥッと息をつき、ジンが自分達が到着するまでに起きた事を聞いた範囲で、到着後の事は自分達目線で三人に語り始めた。

ＯＣＯＨ‥　灯火（後書き）

女の子書くの苦手です。
神威です。
まだまだ続くこの作品。
早く完結にまで持っていきたいなぁー。
四月になったよ、本家も早く書きたい。
頑張ってペース上げたいと思います。

それでは！
感想など、気軽にお願いしますね。

NUEVE：　王の目と略奪者（前書き）

我ら我ら
略奪者なり
守護者にあらず

我ら、守護者にあらず
我ら、略奪者なり

NUEVE：　王の目と略奪者

「……ヴィルマのハンター十七人中十人、尚且つ紫蘭、桃花、灰狼も含まれて、碧砲も両腕を失いよったって……洒落ならんやろ！もう朱郭しかおらんやんけ！」
「朱郭も現在療養中ですね」
「ハァッ！？」

一通りの話を聞いて、エミルが叫ぶ。
当たり前だ。
紫蘭のテラ、桃花（とうか）のサラ、灰狼のゾルフは死亡。壁砲のジャンも両腕を失いハンター人生は間違いなく終了である。
ヴィルマの有名所が軒並み殺られている。
更には唯一有名所で健在な朱郭のティリアも療養中。
これが何を意味するか。
はっきり言うと現在ヴィルマは防御の要がゼロという意味である。

「んじゃあ、次に実績のあるマイルズいう子はどないやねん？」
「右腕を骨折、命には別状は無いですが全治一ヶ月以上の重症ですよ」
「洒落ならんて！？」

腰のポーチから何やら紙の束を取り出して、荒っぽく捲りながらエミルが訊く。
それに至極冷静に答えるジンだが、エミルはそうはいられない。
最悪や、と悪態をつきながら地面に拳を叩き込む。
炎王龍の業火に焼かれた地面は、拳を受けて灰を飛ばすだけ。
エミルの心はこの地面を焼いた業火の様に燃えたぎっている。

「……ヴィルマは主要都市だったでしょう？　なんでギルドはもしもの時の為のG級ハンターを駐留させなかったんです？」

ドンドルマは勿論、その他ミナガルテなどの地方の主要都市にはギルド直属のギルドナイトやG級ハンターがもしもの時の為に駐留している。

古龍観測所が気球で常に動向を探ろうとしているが、基本的に上手くはいっていないからだ。

しかしながらヴィルマにはそのハンターがいなかった。

全員が地元出身のハンターであり、最重要中継地点であるヴィルマの防御力は他の都市と比べたら低い。

ギルドの上層部はそれに気が付かなかったのだろうか？

ジンが問う。

「……上層部の見解はなぁ、灰狼を筆頭としたヴィルマの五人なら、その実力と連携力でそこらのG級ハンター駐留させるよりも素早く、尚且つ犠牲も少なくモンスターを退けられると判断しとったからや。事実うちらもそう思とったしな。まさか古龍が来るとも思とらんかったし、今回はイレギュラー過ぎや」

「灰狼・壁砲・桃花・朱郭・紫蘭、世間では普通の下位と上位クラスのハンターと思われているが、上層部はかなりの高評価をしていた。朱郭と紫蘭については上位レベルと判断されていて、近々ハンターランクを上げるつもりだったしな。しかも二階級特進だ。壁砲と桃花の実力もかなり高いと評判はよかった。灰狼はもう十年も昔から今までずっとギルドナイトの候補に推薦されていた。まぁ、本人が毎回毎回蹴っていたがな。それでもしつこく上層部がギルドナイトにしようとした折り紙付きだぞ」

エミルとシュリンがそれぞれ言う。

ジンもシィも、ギルド本部との関係は希薄。

そんな事情は知らなかった。
成程、確かにそこら辺のG級ハンターを置くよりもいい。
同郷出身という事もあり、連携力も高いだろう。
……だが、エミルが言った通り今回はイレギュラー過ぎた。
古龍相手じゃ流石に厳しい。
だからこそ大長老はジンとシィを直々に指名、馬まで使ってヴィルマに向かわせたというわけだ。
将来性の高い逸材を捨てたくはなかったから。

「だが現実は、そのギルド一押しのハンターのうち三人が死亡、一人はハンター人生の幕は降りた。残り一人も、回復には時間がかなり必要でしょう」
「今のヴィルマには将来性の高いハンターは五人抜いても結構おってん。ただ、マイルズとかいう子とリリスって子以外は全滅や。イズミ、スネーク、後二人程な。でも死によった」

ヴィルマ出身で将来的に相当な手練れになる可能性を秘めたハンターは五人を除いてもいた。
大器晩成型と見込まれてギルドは何も言わず静観中だったのだが、今回の炎王龍の襲撃でそのハンター達の半数以上が死亡。
ただの街の被害だけでなく、これはギルドの将来にとっても未来の可能性が一気に消えた大惨事だ。

「……嘆いても遅い。俺は復興の手伝いをしてくるぞ」
「好きにしぃ。うちはもうちょいジン達と話す」

エミルの後方に座っていたシュリンが立ち上がり、そう言って街の中心の方へと歩いていった。
そんなシュリンの背中を見ながら、シィがのんびり口を開く。

「それにしても、こんなに早くギルドナイトを三人も送り込むなんてね～。私、普通のハンターが来ると思ってた」
「災害後の街の治安は悪化すんのが常識や。うちらが治安を守らなアカンねん、なぁヨナ？」
「……はい。物資がゼロなら治安が良い悪いなんて言えませんが、私達が少量ながら食料や水を運んで来たので略奪が起こる可能性がありますし。かと言って運んで来なかったら、住民は餓死します。なので私達の出番というわけです」

シィの疑問にエミルが答え、そのエミルに話しを振られたヨナが補足する。
要は自警団の様な仕事をしに来たのだ、ハンターなのに。
畑違いな気もするが、それは言わない事にするジンである。

「まぁ外からのモンスターはあんたら二人に任しとけば問題あらへん。古龍襲来のせいで逃げてたモンスターが帰ってくるさかい、何か起こるかもしれへんからな。任したで」
「仕方ない……でもせめて装備は変えたいですね。風呂に入れないし、せめて着替えがてら装備を変えたいです」

ジンとシィ。
忘れがちだが実は、ここに来る前にこの装備でG級の霞龍と呼ばれる古龍を討伐している。
その報告の為にドンドルマのギルドの酒場に訪れると、ライザに無理矢理このクエストを受けさせられ、装備を変える暇も無く、出発。
到着して討伐して、現在。
実は古龍と連戦しているのである。
疲労もあるし、そろそろこの装備を一旦脱いで手入れや着替えをしたいところである。
シィも頻りに横で頷く。

シィの場合は女の子だし、余計その様な事には気を使う。
ハンターではあるが、それ以前に女の子なのだ。
髪や肌の手入れ、お洒落も大好きな年頃の娘であってもなんら不思議ではない。
　そんな二人を見て、あぁとエミルが手を打った。

「着替えと他の防具、武器を一つずつ持ってきたで。ライザさんに頼まれてん」
「マジですか？　やった、流石ライザさん！」
「やっとだね～」

　エミルの言葉に二人は喜ぶ。
やっと、本当に二週間ぶりぐらいの着替えである。
霞龍との戦闘は、移動に時間が掛かったし、戦闘もなんだかんだで長かったし。
それから休み無くここへ来たのだ。
そろそろ体を、せめて濡れたタオルぐらいで拭かないと嫌な臭いが漂い始める頃だろう。
だがここで、ジンがある事に気が付いた。

「……ん？　でもどうやって俺達の服とか防具とか持って来たんです？　ドンドルマの家に置いてたのに」
「ライザさんがピッキ……やない、色々して鍵開けてくれてん。安心せぇ、中にはライザさんしか入っとらんで。ライザさんはあんたらの家によぉ行くんやろ？　遊びに」
「……」
「来るよ～！　一緒に飲んだり騒いだりするの！」

　ジンの問い掛けにエミルが一瞬どもりながらも答える。
シィは何も気付いていないが、ジンは気付いている。

今エミルはライザがピッキングしたと言いかけた。
……本当に、あの人は何者なんだろうか？
どこにハンターの家をピッキングで開けて中に入る受付嬢がいると言うんだ？
　確かにライザとは仲が良い。
シィが唯一ジンと故郷（ふるさと）の皆以外で名前をちゃんと記憶している人であり、色々と世話になっている。
今シィが言った通り、ジンとシィがクエストを終わらせてドンドルマの家に帰ると何故か、片手に一升瓶を持ってやって来て、飲んで騒いで大変だ。
飲み潰れてグデグデのシィと、騒ぐ二人を抑え続けて疲れきったジンの二人に対し、かなりの量の酒を飲んだのに、物凄い爽やかな笑顔を残して去っていく。

「まぁライザさんだし仕方ないか……」

　この一言に尽きる。
そう、ライザだから許せる行為である。
ライザの人徳か、それとも単なる諦めか、それはジンにも分からない。
大体、エミルに言っても無駄なのだ。
……何故あの人はハンターではなく受付嬢なんだろうか？

「あの馬車が丸々あんたら専用のや。代えの防具も私服もあるし、二人仲良ぉ着替えてきぃ。二人で何してもうちは止めへんさかい」
「ホントにっ！？　やった！」

　ピッと向こう側ある一台の馬車を指差し、エミルが言う。
シィは喜び、ジンは溜息。
シィには悪いがそんな展開は、ない。

「……喜ぶな。お前の期待している展開にはならねぇし、させねぇよ。ほら、さっさと着替えてこい」
「なんで!?　二人仲良くってエミリさんが言ってたじゃんか！」
「うちは『エミル』やて！」

ジンが片手で頭を押さえながら言う。
疲労とこいつのせいで頭痛する。
まだヴィルマ《こっち》に来てちゃんと寝ていない。
そろそろ疲労はピークである。
エミルはエミルでいつまでたっても自分の名前を覚えてくれないシィに頭を押さえる。
因みにこの二人の頭痛の原因、シィは元気いっぱいだ。
遠距離型（ガンナー）のくせにスタミナは怪物並みに有している。
……と言っても、彼女の場合はガンナーはガンナーでも遠距離型とは到底言えない戦い方。
常に動き回って擁護、攻撃、雑魚の片付け。
遠くからひたすら撃ちまくるのではなく、モンスターにベッタリ張り付いて、超至近距離での射撃を好んで行う。
スタミナが付くのは当たり前と言えば当たり前か。

「ねぇジン、私防具の装着の仕方忘れちゃった。だから一緒に……お願い！」
「……嘘つけ。大体お前は恥ずかしくないのか？」
「昔から今までずっと同じベッドで寝てるもん！　大体、好きな人に身体見られても平気だし！　ジン以外は嫌だけど！」
「誰が今も同じベッドで寝てるって？　お前が勝手に潜り込んで来るだけだろうが！　それともう少し恥じらいを持て！」
「……もぉ痴話喧嘩は止めて、二人仲良く行ってくれや……」

あーだこーだと言い合う二人にエミルは溜息をする。
エミルは慣れた様子だが、後ろにいる二人とは初対面のヨナは違う。
まさか稀代の天才ハンターがこんな変な喧嘩をするとは夢にも見ていない。
目を丸くしてただ二人を見つめるだけである。
稀代の天才ハンターというのを差し引いても、こんな痴話喧嘩は珍しいし。

「二人一緒に行く！　やないとうちがライザさんに言うてあんたらが帰ったらキツーイお仕置きしてもらうで！？」
「……んな無茶苦茶な！」
「ほらほらジン、行くよ～♪」
「……くそっ、ライザさんが怖くて反論出来ねぇ」

シィがジンの腕にしがみつき、そのまま馬車の方へ引っ張って行く。
振りほどきたいジンだが、残念無念、ライザが怖くて抵抗出来ない。
恐ろしきギルドの受付嬢ライザ、仲が良いとその優しさから怖さまで全部知っているのだ。
故に無抵抗。
ズルズル引っ張られて、ジンとシィは馬車の中に消えた。

「……なんか、イメージしてたのとちょっと違いますね」
「庶民的やろ？　あれがあいつらの強みや」

テントの外が何やら騒がしい。
マイルズとリリスはジンが勝手に思っている様に、別に大人の階段を駆け上ってなどいない。
そもそもマイルズは怪我人だし、出来る筈も無い。
一人寝転がって、テントの外を覗いているリリスに問い掛ける。

「何かあったのか？」
「う～ん……多分ドンドルマからの救援部隊が来たみたい。なんか忙しそう」

ジーッと外を見ながらリリスが答える。
ここから見える範囲ではよく分からないが、あのバッドタイミングで現れたヴェンと、散々からかって出ていったジンとシィの言葉から大体は察しがつく。

「……なら俺達も薬貰うって名目で外に出るか？　いけそうだぜ？」
「もう……怪我人は黙って寝ときなさい。私が見張っとくから逃げられないわよ？」

半身起こしてマイルズがニヤリと笑って言う。
が、リリスが寄ってきて無理矢理寝かせて動きを抑えた。
どうやら外に出すつもりは無いらしい。
一応マイルズとリリスの関係は仲間から仲間兼恋人という風にグレードアップしたのだが、そのせいか余計、リリスはマイルズに過保護気味である。
長年一緒にいたのだから、マイルズの思考は大体分かる。
薬貰う名目と言うが、どうせ本当にそれは名目で、骨折れてるのに

土木作業に勝手に加わるに違いないのだ。
それはなんとしても、リリスとしては避けたい事態である。
せっかくの二人きりなのだし、もしかしたらもしかして、またキスだのなんだのの嬉しい展開に行くかもしれないし。

「よぅ、二人きりのとこ悪いが、邪魔するぜ」
「……もう少しデリカシーのある入り方にした方がよかったんじゃないんですか？」
「ジャンさん！？　ティリアさんも！？」

よぅとテントの入口から入ってきたのは、ジャンとティリア。
二人共に現在療養中の筈なのだが、二人揃っての登場だ。
ジャンの纏うシャツの両の袖が歩く度に揺れる。
本当にもう無い。
碧砲と呼ばれた実力者の腕は、もう無いのだ。
マイルズもリリスも痛々しくて直視出来ない。
かと言ってその後に続いて現れたティリアは見た目こそ大した怪我は無いが、心はズタボロだった筈。
自殺まで図ったのだし。
……だが、不思議と幾分か目に生気が戻っていた。

「どうしたんです、二人揃って？」
「ヴェンにお前らがここにいると聞いてな。少し話があるんだ」

よっこらせっと胡座（あぐら）をかいてジャンが座る。
ユラリと空洞の袖が揺れ、跳ねる。
だがジャンは別段気にした様子は無い。
まるで何年も前に失ったかの様に、慣れたように見える。
両腕を失った哀しみよりも、婚約者と最高の友を失った哀しみの方が大きいからか。

「……相談ですか？」
「おぅ。これから先の話しだ」

胡座をかいて座るジャンと話す為、リリスに無理矢理寝かされたマイルズも起き上がる。
リリスがちょっと眉をひそめたが、腕の骨折は寝て治るもんでもないし、そもそも起き上がるのに腕使わないし流しておく。
ジャンの隣にティリアが座り、リリスはマイルズの隣に同じく座る。
この先の話し。
ジャンの腕はもうない。
隻腕ならともかく、両腕だ。ハンターとしての人生は終わった。
それはジャン自身が一番分かっている事である筈。
この先一体どうするのか、ジャンはジャンなりにこの場にいる者達に話すのだ。

「俺はもうハンターは無理だ。両腕がねぇからな。だけど今までハンター一筋で人生やってきた。情けないが正直この先どうすりゃいいか全く分からなくてな……なんかねぇか、腕のない俺に出来る事？」

そういえばあの銀のハンター――ジンと言うらしい、が、ジャンはもう前を向いているとか言っていたか。
マイルズは一人思う。
哀しみを胸の中に押し込んで、生かされた命を精一杯生きようとしている。
それは簡単そうで、本当に難しい事。
ジャンはそれが出来ている。
ならばそのジャンの質問に答えるべく、マイルズ達は真剣に考えるが、中々良い物が出ない。

ハンターは基本的に体つきは良い。
力仕事には強いという事だ。
が、腕のないジャンに力仕事なんて不可能である。
……何がいいか。
首を捻るマイルズの横で、リリスがあっと声を上げた。

「酒場の受付とかならいけるんじゃないんですか？」
「……あ、それ私が言ったけど……」
「肝心のその酒場がいつ復活するか分からねぇだろ？　酒場どころか街の住宅すら復興の目処がまだ立たない、そんなの待ってたら俺は餓死するんだよ。貯金崩して遣り繰りしたいが、そんな施設も全部焼けて無くなっちまったしな」

餓死は言い過ぎだが確かにジャンもマイルズも、ヴィルマに住む者達の殆どは今や一文無し……とまではいかないが、けれども殆どの資産や生活雑貨などは焼けて無くなった。
かろうじていくつか街の外れの建物は残っているが、全体から見ると極々僅か。
街も個人も予算関係に関しては炎王龍が倒された後も大炎上中だ。
せっかくのリリスの案だが、どうやら先にティリアが言っていたらしい。
ジャンに現実を突き付けられてスボンでしまう。

「……」

暗く寂しい静寂がテントの中を支配する。
それはもう、季節は冬でもないのに木枯らしが吹き荒れているぐらい寂しい静寂。
個々は一生懸命ジャンのこの先について考えてはいるのだが、いかんせん全くいい案が出てこない。

「はいはいど～もぉ。なんやえらい辛気臭いけども、こんにちはぁ。ギルドナイトのエミル言いますぅ、よろしゅう頼むでぇ！」

木枯らしが吹き荒れるテントの中に、その場には不似合いな程底抜けに明るい声が響く。

四人一斉にテントの入口を見る。

そこには真っ赤な衣装に身を包んだ女性が立っており、自分を見る四人に対し、よろしゅうなっと片手を上げた。

……空気が読めていないのか、それとも敢えて読んでいないのか。

呆気に取られる四人である。

「三人のルーキーの子らにあんたらがここにおるて聞いてな、挨拶とその他諸々、おもろい話しでもしたろ思たんやけど……スベってもうたで。誰かノリえぇ奴おらんの？　こんにちはーって元気良く腹から声出せる奴おらんのか？」

辛気臭いねんと首を横に振り、ほら、元気出せぇと拳を握る。

……スベっている。

それはもうスベるという領域を逸脱して、スベって転んでそのまま雪山から落ちている。

色々な意味で可哀想だ。

「で、全員スルーやろ？　うちはどないせぇ言うねん？　せっかくあんたに取っての朗報持って来てやったのに」

ビシッとジャンを指差して、エミルとかいう赤い女性が言う。

……そういえばこの服装、ギルドナイトの正装ではないかとマイルズは今更ながら気が付く。

本人もギルドナイトとか言っていたか？

指を差されたジャンは首を傾げる。
朗報とは何か？
就職先でも見つかったのだろうか？

「……俺に朗報？」
「せや、『碧砲のジャン』。あんたの腕を見込んでギルド本部からの史上命令を言い渡す。えぇか？　史上『命令』やから覚悟して聞きぃや。まだあんたはギルド所属のハンターやねんから逆らったら洒落ならん事態になるさかいな」

さっきまでおちゃらけていたのに急に態度を変え、ドスの効いた声と凄みのある目付きでジャンに言う。
あのスベり具合はなんだったのか、かなり謎な前置きである。
史上命令と言われたジャン。
言ってくるのはギルドナイト。
これは嘘ではなく本当に、命令とやらが来たのだろう。
姿勢は正して聞きいる。

「あんたにはヴィルマがある程度復興するまではあのルーキー三人にハンターとしての知識、技術、その他気合いやらなんやらを叩き込んでもらう。その後街の復興次第、ヴィルマのギルド出張所で働いてもらう。どうや、これでこの先も食っていけるな？　以上命令終わり、これがその文書やから、適当に持っといてな。古龍観測所のじぃさんらが気球から落としてきたさかい、ぐちゃぐちゃやけど勘弁してや」

エミルが言った通り、シワだらけでグシャグシャな文書をジャンに向かって突き出す。
両腕の無いジャンの代わりにティリアが受け取り、マイルズ達に見

せると確かにそこには、今エミルとかいうギルドナイトが言った通りの事が書かれていた。

「……でもなんでヴェン達になんだ？」

ジャンが不思議そうに呟く。

確かに彼らはルーキーだが、ちゃんとドンドルマのハンター養成所を卒業した子達である。

決して無知ではない。

むしろハンターの師匠に弟子入りして直接実地で学んだジャンの昔と比べれば、ヴェン達の方が知識は多い。

必要性がよく分からないのだ。

「あの三人はまだまだ相手にした飛竜の種類も、踏んだ場数も全然や。実際に相手せんと分からん生態、動きの癖、隙、特徴や弱点属性、それを叩き込め言うとんねん。理由は簡単、今ヴィルマにおるハンターで、大なり小なり差はあるけど、怪我言う怪我が無いんはあの三人だけや。要するに、動けるハンターはあの三人だけ。せやけどルーキー、はっきり言わせてもらうけど、心許ないねん。せやから碧砲が教鞭振るって、せめて知識だけでも叩き込んだれってな」

マイルズは骨折、リリスも疲労はかなりあり小さな怪我が幾つもある。ティリアも完全には立ち直ってはいない。

確かに今現在ヴィルマのハンターで動けるのはヴェン達三人だけである。

場数も経験も、何もかもマイルズ達には劣る三人。

それはマズイとギルドが判断し、取り敢えずギルド上層部からの評価が高いジャンが教鞭を振るう様にと白羽の矢が立ったわけだ。

……実はもう一つ、ジンが教えるという選択肢があったのだが……

あの青年、実はギルド上層部からの信頼は無い。

異常な戦闘スタイルと独自の動き、人の力の限界を遥か彼方に置いてきたかの様なあの力に上層部は畏れを抱いている。
今は大人しいが、いずれ何か起こすのではないか？
大長老と他数名以外の上層部からの評価はこんなもんである。
それにジンにせよシィにせよ、ギルドとは仲が良いとは言えない。
二人はギルドを嫌っている節さえあるのだ。
では何故ギルド所属のハンターなのか。
理由は単純。
それが基本だからであり、二人の防御壁だから。
無所属ならば在りもない罪を着せられて投獄という可能性まである程上層部とは仲が悪い。
ギルドへの忠誠心も皆無。
大長老が二人の実力と人格を認めていなければ、二人は今頃ギルドナイトのブラックリストに記されているに違いない。
故にドンドルマの酒場では、彼ら二人が入るとライザ以外は黙ってしまう。
二人の圧力と、絡んだら自分が上層部に目をつけられると。
稀代の天才ハンター二人の交友幅は以外と小さいのだ。
　ギルドの受付嬢ライザ、彼女が二人のドンドルマにいる唯一にして最高の理解者。
次いで灰狼のゾルフ。
ギルドナイトだが、話の分かるエミルとシュリン、他に元剣聖のシルフィードなどの一部の実力者がそれに続く。
エミルとシュリンがここに派遣されたのは、単純に実力だけでなく、実はこういう意味もあるのだ。

「……ともかく、今すぐ三人の頭にバンバン叩き込んでくれ。うちが三人呼びつけるさかいな」
「今すぐか！？」
「善は急げや。ほな、あんたら三人はゆっくりしときぃや……とち

ゃうわ、マイルズやったか？　あんたはジンが呼んでるさかい、テントから出ぇ。一人やで、分かったな？」
「……？　分かりました」

急いで立ち上がるジャン。
『一人』という言葉が少し引っ掛かるが、マイルズも立ち上がる。
マイルズが動く事にあまり良い思いがしないのか、リリスはちょっとだけ眉をひそめる。
まぁ、ジンとはあの銀のハンターだ。
またどうせ下らない事だろう。
マイルズは大丈夫だと折れていない方の腕をリリスに向かって上げる。

「へぇ～、なんやここにもバカップルがおるんかい。独り身のうちとしては居心地悪いなぁ。……誰かうちを嫁に貰ってくれへんかなぁ～？　今うち、ちょうど旬なんやけど！」
「うおっ！？」

片腕を上げたマイルズの後ろから、ズイッとエミルが身を乗り出す。
えぇなぁ～っとマイルズとリリスを眺め、自分が旬だと主張してみる。
……無論、誰も反応しない。
当たり前だ。
この場にいるのはリリスとティリア、そして未亡人っぽいが意味上ちょっと違うジャンである。
未亡人と言いたいが、未亡人は女性だから違う。

「……あかんわ。うちここじゃ笑いの神が降りてこぉへんわ」

無反応なリリス達を見て、ハァッと大きく息をつくエミル。
登場してから終始スベりっぱなしなのは自覚していたのか。

「あの、ジンさんはどこに？」
「……ん？　あぁジンな。あれやあれ、でっかい帽子被っとぉ奴や」

資材や瓦礫を運ぶ住民達が行ったり来たりしているテントの外。
エミルはその人混みの中でも目立つ真っ白でどでかい帽子を被った男を指差した。
マイルズは首を傾げる。
ジンは銀色の防具を纏っていた筈だ。
あんな白色の物ではなかった。
ジンとシィは馬を使い、必要最小限のアイテムしか持ってきてはいない。
代えの防具なんて無い筈なのだ。

「代えの防具持って来てやってん。あいつら連戦やったさかい、ず～っとあの防具やったからなぁ」
「……はぁ」

代えの防具というが、マイルズはあんな防具知らない。
多分だが、G級ハンターの中でも限られた者しか手に出来ない一品だろう。
マイルズの夢のまた夢の、そのまた夢の防具の一つ。

「ほら、さっさと行きぃ」
「あ……はい」
「うちらはあの三人の頭に知識を捩じ込まななぁ。よろしく頼むでぇ、ジャンさんよぉ」
「捩じ込むのか……」

アハハと笑いジャンの背中を叩きながら、エミルはジャンを連れた人混みの中へと消える。
マイルズもまた、ジンの方へと歩く。

「……何か用ですか？」
「ん？　……なんだ、やっと来たか」

マイルズが声を掛けると、ジンが振り返る。
大きな淵の帽子の中から鋭い漆黒の目が光り、同じく漆黒の髪が揺れる。
真っ白な防具とは対照的だ。
やっと来たかと呟くと、片手を上げて着いてこいと言いたいのか、チョイチョイと掌で招く。

「……最初君と話した時に訊くつもりだったんだが、訊きそびれてな」
「……そういえばなんか話す為に俺が起きるの待ってたんですよね」

あの時、夜中までジンが起きていたのはマイルズに何かを訊く為だったとは、最初にジンが言っていた。
最初は色々と、多分のジンの予定通りに話しは進んだだろう。
……だが結局は、リリスが現れ予定変更。
ジンはマイルズをからかって去っていった。

「……と、その前に。どうだ？　お前ちゃんと避妊――」
「話しがあるんじゃないんですか？」
「――……釣れねぇな、せっかくジョークで盛り上げようとしたのに」
「本気でしょう？」

やっぱり話しは脇道へ逸れて、何やら変な方向へと向かう。
が、マイルズが無理矢理その事は終了させ、元々の話しに進路に戻す。
大体、ジンの言う様な事はしていない。

「……つまんねぇな」
「悪かったですね」
「あ、そうだお前、俺と同い年だからタメ口でいいぞ。敬語使われるの苦手だし、タメなら階級も何も関係ねぇだろ」

つまらなそうに呟くジンに、マイルズが反応する。
何が話したいのか謎だ。
と、急に話しを変えてジンが思い出しかの様にマイルズに言う。
マイルズとジンは同い年。
それはマイルズ自身がジンが『千手』と聞いた瞬間から分かっていた事だが、ジンはG級、自分は下位。
敬意を持って話していたのだが、どうやら良いようには思っていなかったらしい。
敬語は嫌いとあっさりジンが言う。

「……マジでいいのか？」
「今お前敬語じゃねぇだろ。それでいい、タメなんだからな」

驚くマイルズを傍目にのんびりジンが歩く。
どうやら本当にいいらしい。
ハンターは明確にハンターランクという物で縦関係が決まっている。
たとえ年下だろうがタメだろうが、自分より上の者には敬意を払うのが普通なのだが……

ジンはそれが嫌らしい。

「訊きたい事な。単純な事なんだが、お前は炎王龍を怨んでるか怨んでないか、それだけだ」

「怨む……？」

尚ものんびり歩きながら、ジンは世間話でもする様にのんびり言う。

だが実際は、結構重い意味が含まれた言葉である。

炎王龍を怨んでいるか。

……マイルズは考える。

確かに故郷を滅茶苦茶に破壊され、親友や仲間を殺された。

憎くないと言えば嘘だろう。

……だが、憎いからと言って怨み呪う様な気持ちにはなれない。

マイルズ自身それが何故かは分からないが。

「……憎い、確かにあいつはここをぐちゃぐちゃにしたし、親友や仲間を殺したし、憎い。……でも、なんだろうな。炎王龍を怨むより、何も出来なかった自分の方が憎いし、自分を怨んでる」

自分が今ここで生きて歩いているのは、ゾルフのお陰と言っていい。

彼の立ち回りが炎王龍を引き付け、自分やリリスを生かしていた。

そしてそのゾルフを自分はちゃんとサポート出来ていなかった。

死んだスネークやイズミもそう。

自分がもっとしっかりしていれば、もしかしたら今も生きていたかもしれない。

“たられば”という話しだが、そう思わずにはいられないのだ。

「……成程な。思った通りの返事が返ってきて、少し俺は安心って

言うか、お前に興味が持てた」

マイルズの答えにジンは頷き、足を止めた。
ジンが止まればマイルズも止まる。
いつの間にか、街の外れに来ていた。

「……お前、これを見ろ」
「……！」

街の外れ。
ジンがピッと指差した物に、マイルズは目を見開いた。

「はぁ～い！　シィちゃん特製、スーパーデリシャス山菜スープだよ！」
「お、お邪魔します……」

テントに二人残されたリリスとティリア。
どうしようかと首を傾げた矢先、ムダに明るい声と共に、漆黒の防具を纏ったシィと、青い、エミルと似た感じの衣装に身を包んだ少女が何かを持って突如現れた。
手に持っているそれは、何かの容器。
中から湯気が立ち上り、良い匂いがテントの中に漂う。

「「……」」
「あれっ、反応薄い！？　タイミング間違えたかなラナちゃん？」
「単にどう反応すればいいか困ってるだけかと。後……私、ヨナです」

おっかしい～な～と不思議がるシィ。
名前を間違えられ、地味にショックを受けるヨナ。
そんな二人に対しどう反応すればいいのか分からない二人。
まさに今テントの中は混沌としている。

「……まぁいいや！　はいっ！　これ私特製の山菜スープだよ、元気出るからね～」
「すっごい美味しいですからどうぞ」

シィにとって、混沌とした空気なんて関係無い。
マイペースを貫く彼女はズイッとリリスに手に持った容器を押し付け、ニッコリ笑う。
隣でヨナも、同じように容器をティリアに『そっと』渡す。
更にはスプーンを二本取り出し、二人に渡した。

「あ、ほんとだ、美味しい……」
「でしょ？　私ねぇ、ジンに料理だけは上手いって言われるの！料理だけは！」
「「「……」」」

スープを口にしてリリスが美味しいと呟く。
するとシィが反応し、エヘンと胸を張りながらそう言った。
ヨナを含めた三人は困る。
……それって、料理以外はダメって事なんじゃ？

そう言いたいところだが、この天然娘は自信をみなぎらせて胸を張っている。
間違いなく、ジンの言葉に含まれた意味をちゃんと理解していない。
それを言うべきなのか、言わないべきなのか、三人は困る。

「……あっ！　そうだジンって言えば、ジンに二人に質問する様に頼まれてたんだ。……えぇっと、二人は炎王龍の事怨んでる？」
「「……！」」
「……私、この場にいない方が……いいですね」

愛しの彼からの頼み事を思い出し、シィが訊く。
見事な棒読み。
この言葉がどういう物なのか理解しているのか怪しい。
が、リリスとティリアは分かる。
ヨナはこの場にいるべきじゃないと思い、そ～っとテントの中から脱出した。

「どう？　怨んでる？」
「……私は……」
「確かに憎いわ。……でも、それよりも自分の方が憎い。貴女は私が取った行動からそれが分かるんじゃないの？」

勝手に離脱したヨナに気付いているのかいないのか、シィがもう一度訊く。
リリスは視線をあちこちにさ迷わせ、歯切れが悪いが、ティリアは堂々と答えた。
自分の方が憎い。
自分がずっと好きだった人は、自分のせいで命を落としたのだから。

「リリスちゃんは？」

「……私も、ですね。自分にもっと力があれば、もしかしたらイズミだって生き延びてたかもしれないですし……マイルズも怪我しなくてすんだかもしれないですし」

リリスもまた、今度はシィの目をしっかり見て答えた。
質問の仕方は素晴らしい棒読みだったシィだが、実はこの言葉の意味は分かっていたらしい。
二人の言葉を聞いて、ニッコリと笑って言った。

「二人は強いね」

ジンが指差した先、そこには一つの巨大な骸が横たわっていた。
首と胴体が離れ、剥ぎ取りと討伐後から時間が一日以上経っているにより、かなりグロテスクな見た目になっているが、マイルズには分かる。
これは炎王龍の骸だ。

「……こんなところに」
「俺が運んだ。あそこにあると邪魔だからな」

腐敗している血肉。
見た目も臭いも酷いものだ。
常人が見れば気分を悪くするだろう。

だがマイルズは、そんな事は気にならず、ただ一点を見つめている。
炎王龍の、切り離された頭。
そこにある隻眼から目を外せないのだ。

「どうだ、死して尚誇り高い目をしてるだろ？　まさしく王と呼ぶに相応しい」

炎王龍の目を指差してジンが言う。
片方はシィが焼いちまったがなっと苦笑いをしながら。
炎王龍の目。
死んで虚空を見つめてはいるが、何故か誇り高い、気高い目をしている。
別段特殊な目とかではなく、その雰囲気がそう思わせるのだ。

「……生態系の上位に立つモンスター達はな、これ程までとはいかねぇが皆、気高い目をしている。上に立つ者としての誇り。自らの力に対する自信。そういうのに溢れている目だ」

まだ目を見て動かないマイルズにジンが言葉を浴びせる。
王の目。
誇りと自信が宿り、その目の奥で炎が燃え盛っている様な目。
それこそが、生態系の頂点に君臨する者の目だ。
マイルズは漸く視線をその目から離し、ジンを見た。

「この世は単純明解な世界だ。勝者が生き残り、敗者は死ぬ。弱肉強食、一番シンプルで一番残酷。俺達ハンターはそういう世界で生きている」

ジンが静かに言う。
それは、自然の法則。

至極単純だが、最も残酷な法則。
人が逃げてきた法則だ。

「そんな世界にいる以上、俺達ハンターにも死は着いて回る身近な物だ。今回もそう、次からもそう。これは未来永劫変わらない真理であり自然の摂理だ」

ジンとシィという勝者が生き残り、炎王龍という敗者は死んだ。
また、炎王龍という勝者が敗者であるゾルフ達の命を引き裂いた。
それは自然ではごくごく当たり前の事。
ハンターという職業になったら一生共にする事実。

「故に、お前は炎王龍（こいつ）を怨む資格など本当は無いんだ。敗者であるお前にはな」
「……」

自然の摂理。
真理。
弱肉強食。
ジンの言う事は正論だ。
敗者は何も言う資格は無い。
死人に口無し。
偶然生き延びたマイルズもまた、その資格は無い。

「……だが、人の心は複雑で、そんな事は理解してもやはり、憎く思ってしまうもんだ。それは分かる。だから怨むのは仕方ない。だが、失った原因はこいつだけではないのも事実。お前が言った通り、お前自身の責任もある」

ジンがマイルズに言う。

それはちょうど、全く同じタイミングでシィがリリスとティリアに言った事と重なる。

「……敗けて悔しいのなら、自分を磨け」
『それで、今度は大切な誰かを守れる様にしなくちゃいけないの』
「前を見ろ」
『進まないと、私達は何も変われないんだよ』
「この世は単純」
『自然は明解』
「理解しろ」
『認めたくないけど認めないといけない事がたくさんあるの』
「いいか、自然を理解しそれを越える」
『それがハンターっていう職業なの』
「守護者じゃない」
『英雄でもない』
「ハンターはな――」
『「略奪者」』
「それを肝に銘じて、今後己を磨くといい」
『その先に、きっと凄い物が待ってるからね』

ジンがサラリとそう言って、マイルズの隣にまで歩いてくる。
鋭い漆黒の目がマイルズには、炎王龍にも負けない程誇り高く、何かを背負った目をしている様に見える。

「自然に逆らい人を守る。人に害成すモンスターを問答無用で狩る、俺達ハンターは略奪者。それを忘れるな、心に刻み込め。そして、お前が亡き親友と描いた夢を叶える為に死ぬ気で努力しろ。……その――」
「た、大変ですジンさん！」

ジンが最後に何かマイルズに言おうとした時、ヨナが血相を変えて走って来た。
先程までは背負っていなかった、彼女の得物らしきライトボウガンを背負っている辺り、何かが起きたのだろう。
ジンは話しを中断した。

「……何だ、事件か？　事故か？　めでたい事か？」

先程までとはうってかわってのんびりとした口調でヨナに問い掛けるジン。
……この顔色でめでたい事は無いだろう。

「えぇっと……！　古龍観測所の気球からの緊急事態です！　現在このヴィルマの西側にある沼地に、ぞくぞくとイーオスが集結中、その中にドスイーオスを確認！」
「……要するに、炎王龍から逃げてたイーオス達が戻ってきて、ついでに焼けて寂れたヴィルマを乗っ取ろうって魂胆だな？」
「はい、多分そうだと思われます！」

古龍という絶対的な力を持つモンスターが現れると、他のどんなに強力な大型モンスターも逃げる。
故に、ヴィルマの住民達は避難しても避難先で何か他のモンスターに襲われるとい事がなかったのだ。
しかし古龍が去れば、自然と逃げてたモンスターも戻ってくる。
今回は逃げてたイーオス達が戻ってきた挙げ句、寂れたヴィルマを見て自分達の縄張り拡大の為に動いたのだろう。
……これもまた、自然の姿。

「……しゃあねぇな。エミルさんに伝えてくれ、俺とシィで撃退するから、ギルドナイト三人は住民達の護衛を頼むって」

「えっ！？　でも相手は百を上回る数だと……」
「所詮イーオス。生態系の下位だ」
肩をグルグルと回しながらジンが言う。
渋い表情のヨナだが仕方ない、取り敢えず自分の上司であるエミルに伝えに走り出す。
ジンが振り返り、マイルズの方を見た。
「ちょうどいい……見せてやるよ、略奪者ってのがどんなのかをな」

NUEVE：　王の目と略奪者（後書き）

悩んだ末に桃花がサラの二つ名になりました。
由来は桃花鳥。
朱鷺（とき）の別名です。
ちょっとした豆知識？

夜中に神威です。
……さっさと終わらしたいね、この作品。
長い、長いヨ。
……頑張れ、後もう少しで終わりだ私。
完結に向けてペースを上げたいですが、もうそろそろ学校が始まります。
……ヤバいネ！

ＤＩＥＺ：　鏡花水月（前書き）

そこに見えどもそこには在らず

手を伸ばしても届かず、すり抜け、ユラリと消える夢幻

刮目せよ

その者達はそこにはいない

ＤＩＥＺ：　鏡花水月

毒々しい程派手な赤の波。
まさにそう言える。
ここはヴィルマの西側。
沼地というエリアに続く場所である。
元々は防御壁が街を取り囲み、エリアに通じるこの西側にはバリスタも配備された場所だったのだが、炎王龍により全て炭と塵にされた。
そこに赤い波が押し寄せようとしている。
いや、既に一部が雪崩れ込んだらしい。
バリスタが置かれていた広場に赤い、その波の正体とは別の物が池を作り、波の正体が何匹も倒れていた。

「……街の者達はどうしたんだ？」
「ルーキー三人に取り敢えず広場から出るなって命令するよう言うたで。けどまぁ……どーせ広場に辿り着けへん。一匹たりともな。ヨナが言うにはジンとシィがこいつらの撃退を引き受けてくれたそうやし」

肩に巨大なハンマーを置き、白くゴツゴツした起伏のある防具、グラビＳシリーズの所々を朱に染めたシュリンが後ろにいるエミルに問い掛ける。
訊かれたエミルはのんびりと答え、早々に握っていた太刀を鞘に戻した。

「……この程度で動くのか？　あいつらにしては随分と気前がいいな」
「えぇやんけ、うちらは楽やで。見とぉだけで勝手に終わりよる。

せや、ルーキー三人に教育の一環で二人の戦闘見せたろか？」
「止めとけ……次元が違い過ぎる。そもそもあんな動き、誰も真似出来ん。灰狼でさえ少ししか出来なかったんだぞ？」

ジンとシィと面識があるハンターの殆どは、必ずと言っていい程一度あの動きを真似する。
が、本人達は澄ました顔して動いているくせに、実際にやると半端無くキツい。
腕の節々はギシギシと悲鳴を上げ、膝はすぐに笑う。
結局全員挫折するのがオチである。
シュリンもまた、そんなハンターの中の一人。

「パッと見で分からへんか？　あんなん普通の人間には出来ひん芸当やねん。太刀も大剣も片手で振り回すんやで？」
「挑戦したくなるのが男ってもんなんだ、よっ！」

エミルがあんなん普通は不可能やと首を振る。
その時、赤い波を作るイーオスの内、一匹がシュリンに飛び掛かってきた。
シュリンはのんびりエミルと会話をしていたが、気を緩めてなどいない。
振り向き様にハンマーを横に薙ぎ、飛び掛かってきたイーオスを吹き飛ばす。
バシャァッとハンマーから水が吹き出し、吹き飛ばした瞬間イーオスの鱗を穿つ。
イカリクラッシャー、それが彼の得物の銘。
水属性の強力なハンマーだ。

「鞘に戻すのはまだ早い。二人が来るまでは俺達が処理係だ」
「……へぇ～へぇ～、面倒やわぁ」

エミルは深緑の鞘から同じく深緑の刃を引き抜く。
そして再び突貫してくるイーオス達に向かって飛び掛かる。
刃を大上段から振り下ろし、一匹のイーオスを真っ二つにした。
死後痙攣でビクッと動いたイーオスの二等分にされた体は、そのまま血を噴き出して倒れる。

「……数の利を活かしてくるな」
「んなん問題あらへん。後ろにヨナが控えてんねんで？」

どんな実力者でも、一部の例外を除けばたとえ相手が雑魚でも数の利にはやはり苦戦をしいられる。
次々と突貫してくるイーオス達を迎え撃って潰すのはいいが、その数全てを潰す事は出来ない。
よって、何匹かのエミル達の攻撃を掻い潜ったイーオスは街の中へと走る。
が、立て続けに銃声が響き渡り、街の中へと走ろうとしたイーオス達の頭に穴が空き、その意識は永遠に消し飛んだ。
……ヨナだ。

「……二人はまだなのか？」
「今こちらに向かっています。どうやらシィさんが弾をガンベルトに入れてなかったそうで……」
「……シィらしいミスやなぁ。まぁ今回はうちらが防いでるさかい、大事にはならんけどな、もうちょいしっかりして欲しいわぁ」

ヨナがちょっと溜息しながら現状報告。
なんともシィらしいミスだとエミルは苦笑い。
その表情を顔に張り付けたまま両手で深緑の太刀を握り、エミルは切っ先を前に思いっきり突き出した。

見事にイーオス一匹の喉に穴を空け、刃に仕込まれた毒が流れ込む。
そのままイーオスは出血と毒にやられて絶命する。

「ちょろいなぁ……二人が着く前に片付くんちゃうか？　……まぁ冗談やけどな、数が多すぎやし」

通常イーオスは十数匹の群れで行動する。
一つのフィールド、要するに一つの大きな平地には多くて十匹いるかいない程度の規模だ。
だが今回は百を優に越えている。
とんだ大所帯だ。
ある意味奇跡の集合率。

「まったくだ。群れ過ぎだぞこいつら」

巨大なハンマーを振り下ろし、一匹のイーオスを地面に文字通り沈めるシュリン。
その強力な一撃により体を潰されたイーオスの死骸達がシュリンの周りでへしゃげてペラペラな状態である。
そのまま床に敷いたら絨毯になりそうな。

ギルドナイト。
ギルド直属の腕の立つハンター達である。
そこら辺の上位ハンターよりも強く、選ばれた者しかなれない職。
彼女達もその一員であり、やはりそれ相応の実力は伴っている。

「素材売っても大した金にならへんし、損や損。せめて上位クラス来いや」

損得勘定でやる気の出ないエミル。

欠伸しながら迫るイーオスを斬り伏せる。
実力は高い。
が、基本的にこの損得勘定で判断するのが彼女の欠点だ。
そうギルドナイトの先輩、シュリンは思っている。

「まったく……損得じゃねぇだろ物事は」
「ハッ！　やる気出ぇへんねんしゃあないやろ！」

愚痴と共に刃を振るう。
深緑の軌跡が通る場所は、次いで深紅の血潮が舞う。
時には紫の猛毒も飛ぶ。
イーオスは毒を吐くモンスターだが、この毒は違う。
エミルの持つ太刀、飛竜刀【葵】の刃に仕込まれた毒だ。

「……まだ？　うちそろそろ飽きてきた」
「毒薔薇（いばら）のエミルはその程度か？」
「……その名前で呼ぶん止めてくれへん？　嫌いやねん、女らしゅうないやろ？」

数多のイーオスを地面に沈めたシュリンが、ぼやくエミルに問い掛ける。
するとエミルが口を尖らせて言い返す。
煽ってやる気を出すつもりが、失敗したか？

「……っと、エミル、気付いてるか？」
「当たり前や。これでうちの仕事終わり、のんびり菓子食いながら観戦しよか」

シュリンとエミルの背後。
街の中央部から強大な気配が迫ってくる。

一般人には分からないかもしれないが、幾つもの場数を踏んできた二人には分かる。
二人は直ぐ様迫るイーオスを斬り裂き、叩き潰し、地面に沈めながら後退する。
ちょうどヨナが、二人に下がる様を声を掛けた。

「うわ～、いっぱいいるね。いっぱいいすぎてドスイーオスは見えないや」
「お前が弾忘れたからだ、エミルさん達に謝れ」

エミルとシュリンが下がり、ヨナと合流する。
前衛二人が退いた事によりイーオス達は赤い波となって街の方へ、住民（エサ）の方へ押し寄せるが、何かに吹き飛ばされて地面に倒れる。
そして、そのまま動かなくなった。

「遅いで、うちらがちょっと戦う羽目になったやんけ」
「こいつのせいですよ」
「うぅ～ごめんなさい」

赤い波を吹き飛ばし、地面に打ち付けられた骸を越えて二人がエミル達と合流した。
言わずともがな、ジンとシィである。
遅いと軽く叱るエミルにシィが頭を下げて謝り、ジンはもっと頭を下げろとシィの頭を手で押す。

「ほれ……さっさと片付けきてくれへんか？　大掃除や大掃除」
「了解です。マイルズ達が俺達の戦闘を見るそうなので、護衛頼みますよ」
「分かった分かった、分かったからはよ行って」

群がり、本当に赤い波の様に流動するイーオス達を見てエミルが大掃除をしろと急かす。
ジンが面倒くさそうに返事をして、後ろにいるマイルズとリリスの二人を指差した。
エミルとしては、マイルズはヨナの報告を聞いた時に側にいたそうなので着いてくるのは予想出来たがリリスは想定外。
少し驚くと、ジンがマイルズを心配してたリリスとたまたま出会して、そのまま流れで着いてきたと説明する。
へぇ～っとリリスとマイルズを見てにやけるエミル。
なんか怖くて二人はエミルと視線を合わせない。
そんな三人を傍目に、ジンは背中から二振りの刃、双剣を掴み、抜き放つ。

「……ライザさんはうちらを皮肉る為に数あるあんたの武器の中それを選んだんかいな」
「俺が知る筈ないでしょう？」

ジンの持つ双剣。
銘を双聖剣ギルドナイトという。
リリスの双剣、ホーリーセイバーの最終形態であり、名前にギルドナイトが付く通り、元々最高位のギルドナイトが持つ武器である。
エミルは持っていないため、皮肉なのかと見て思うのは仕方ないか。

「……シィ、弾の準備はいいか？」
「オッケーオッケー、いつでもいいよ」

透き通った刃が美しい双剣を握り、ジンが隣のシィに訊く。
弾んだ声で返ってきたので、嘘ではないだろう。
ニヤリとジンの朱唇の端がつり上がる。

「……よし。じゃあ発射、焼き尽くせ」
「りょーかい！」

シィが白銀のライトボウガンを構える。
ジンは片方の刃を上に上げ、発射という言葉と共に振り下ろす。
勿論シィは引金を引く。
ドォンと鈍い音が連続で響き、マズルフラッシュが赤い波を更に赤く照らす。
発射された数発の弾はゆっくりと進み、見事に赤い波のど真ん中に吸い込まれて爆発する。
その瞬間に中から何かを撒き散らし、更にそれが爆発。
拡散弾Ｌｖ１。
ガンナーの切り札とも言える弾だ。
それを最初から、躊躇無く撃ち込んだ。
注目すべきはシィは一回しか引金を引いていないのに、弾が数発発射された事だ。
……実はこのライトボウガン、拡散弾の速射機能という、普通のハンター、普通のライトボウガンを扱う者にしてはあり得ない性能を持つ最高位の武器である。
故に破壊力抜群。
赤い波の中心で炎が上がり、イーオス達の悲鳴が上がる。
それを号砲に、ジンが一気に駆け出した。
レバーを引き、信じられない速さで別の弾を装填したシィも後に続く。
略奪者と自分達の事を言う、二人の戦いが始まったのだ。

――早い。
マイルズは二人の背中を見てそう思う。

灰狼と呼ばれたゾルフも早かったが、それをあっさり上回る早さ。
影を引き連れる、そんなもんじゃない。
影を置き去りにしている。
残像。
分身。
どう表現すべきなのか、それはよく分からないが、ともかく早い。
一瞬で群がるイーオス達の波の中に入っていく。
……その瞬間、血の飛沫が空中を乱舞する。
略奪者。
まさしくそう呼ぶに相応しい。
二人はまさに、命の略奪者にマイルズは見えた。

二振りの刃が通る場所は、直ぐ様真っ赤な血で染まる。
断末魔を上げる事さえ許さない早業。
自らの死を気付いているのかさえ怪しい。
振った刃をすぐ返し、二振りの刃は加速する。
この双剣の不可属性は水。
相手を斬る度に血と共に水も舞い躍り、刀身に付いた血を洗い流す。

「……！」

カッとジンの目が光り、イーオス達の波の中で声を上げて指揮を取るボス――ドスイーオスの姿を捉えた。
刃の動きが変わる。

今までは縦横無尽に振られ、周りに群がるイーオス達全てを切り裂いていた刃はベクトルを変え、ジンの正面にいるイーオスに集中する。
瞬く間に目の前のイーオスはバラバラに解体され、血が弾けた。
更にジンは左の刃で正面付近のイーオスを切り裂き、右腕を後ろに突き出す。
そこにはちょうどジンを押し倒そうと飛び掛かってきたイーオスがいたのだ。
羽を持たないイーオスに空中移動は不可能。
重力に逆らえず飛んで来たイーオスは吸い込まれる様に刃に突っ込み、喉を貫かれ一瞬で意識が消し飛ぶ。
突き刺さったイーオスから刃を引き抜き、更にジンは剣を振る。
ここはもう、血が舞い、その血を洗う水が躍り、死が蹂躙する魔性の舞踏会と呼ぶに相応しい。

ジンと同じようにシィもイーオスの群れに突っ込んでいく。
通常ガンナーは遠距離から狙撃や擁護射撃を行うのだが、彼女は違う。
ほぼゼロ距離の超接近戦でこそ、彼女の真の腕が顕になる。
無論遠距離や超遠距離からの精密射撃も半端無いが、彼女の場合は超接近戦でこそ真価を見せるのだ。
牙を剥き出し襲い来るイーオスをあっさりと掻い潜り、しゃがんでイーオスの足を蹴る。
バランスを崩して横に倒れるイーオス。
その喉笛に銃口を突き付け、片手で引金を躊躇無く引く。
発射された弾は通常弾Ｌｖ３。
特に突出した性能は無い弾だが、放たれたのはゼロ距離である。
あっさりと喉笛を貫いて、後ろに群れるイーオスに突き刺さる。
更に片手だけで装填分だけ乱射する。
片手という、普通なら反動に耐えきれず連射不可能な体勢からいと

も簡単に。
しかもただ引金を引きまくる乱射だが、的確に銃弾は頭や喉などの急所に突き刺さり、イーオス達の息の根を止める。
　ガチャリ。
片手を腰のガンベルトに据え、口でレバーを引いて空薬莢を弾き出す。
それと同時に腰にあった片腕が霞み、気付けば再装填完了。
後ろから飛び掛かるイーオスに振り返らず、ただ銃口を後ろに向けただけで引き金を引いた。
散弾Ｌｖ１。
広範囲に広がるその弾幕は飛び掛かってきたイーオスを吹き飛ばし、更に後ろで群がっていたイーオス達をも吹き飛ばす。
だが、これだけでシィは止まらない。
膝をたわめ、一気に跳躍。
いきなり高く飛び上がったシィをただ見つめるイーオス達。
シィは目の前にいるイーオスの背中に見事着地。
そしてまた跳躍。
天高く飛び上がったシィが地面に銃口を向け、引き金を引く。
真紅のマズルフラッシュがイーオス達の間を駆け巡り、同時に散弾の雨が降り注ぐ。
それは命を刈り取る死の豪雨。
シィが再び地面に降り立った時、シィの周りを取り囲む様にいたイーオス達は全て骸と化していた。
　ガチャリ。
レバーを引く音が不思議と大きく聞こえる。
気が付けば既に再装填は完了している早業。
本当に弾を入れているのか目視では分からないが、事実撃っているので弾は入っている。
　骸の山を築いたシィ。
澄ました顔をしていて、バテた様子は見られない。

そんなシィの後ろから、一匹のイーオスが飛び掛かる。
死の暴雨の射的外にいたらしく、一矢報いる為に一気に詰め寄って来たのだ。

「……ここら辺は片付いたね」

イーオスに気付いていないのかウーンと背伸びしてのんびりそう呟くシィ。
牙が迫る。
が何かの音が響き、イーオスは自らの牙をこの憎き小娘に突き立てる前に意識が何かに刈られた。

「……お前今俺に任せたろ？」
「だって～ジンの方が早いし！」

飛び掛かるイーオスの真後ろにジンが現れ、刃を超高速で振り切る。
首が飛び、血が噴き出す。
見事な切り口、達人技だ。
イーオスの首を斬り飛ばしたジンは音を一切立てず静かに地面降り立つ。
返り血で赤みを帯びた白い帽子に手をやりながらのほほんと笑ってるシィにぼやきをぶつける、のだが、彼女にそんなものは効かない。
どうやらシィはジンがあのイーオスを斬り飛ばす事が予測出来ていたらしい。
視野が広いというか、普通ならガンナーが剣士を擁護する筈なのに、これではまるっきり立場が逆である。
ジンの溜息はもう、癖だ。

「……ドスイーオスを見つけた。逃げられる前にさっさと仕止める

から、周りの雑魚を蹴散らしてくれ」
「あいあいさ～！」
　数多のイーオスを斬り捨てたというのに、刃こぼれしない美しい刀身。
それを怪しく輝かせ、ジンがシィに言う。
シィはいつも通り。
マイペースに片手で敬礼などをして返す。
ジンはフッと笑い、刃を構えて地面を蹴った。

「……すげぇ……」
　マイルズは二人の戦闘を見て、この言葉しか言えない。
レベルや格が違う、そんな生易しい物じゃない。
次元が違うのだ。
縦横無尽に振られる刃は一見適当に振り回している様にも見えるが、違う。
その全て、一撃一撃が正確に急所に叩き込まれ、最小限の振り幅どイーオス達をバラバラにする。
未だ刃こぼれしていないその刃が全てを物語っているのだ。
　シィはシィで普通のガンナーからすると、常識外れもいいとこの動きを澄ました顔して堂々としている。
機動力は勿論、あんな乱戦の只中でも全ての弾はミリ単位の正確さ

で急所に撃ち込まれ、確実に一発で倒している。
片手撃ちという俄(にわか)には信じられない芸当まで見せて。

「……あれが『千手』」

まさに千の手を持っているかの様な超高速剣技。
太刀筋は全く見えないし、普通のハンターからすると考えられない攻撃もする。
例えば片手一本で連突き、それと同時にもう片方で袈裟斬りなど。
武器が体の一部になっているとはこの事か。

「……『千手』と『月光』なぁ。正式なギルドの称号と違(ちゃ)うんやで？」
「……えぇっ？」

通常G級ハンターと呼ばれる者達は、二つ名とは別にギルドから正式な二つ名、俗に言う『称号』という物を与えられる。
二つ名は非公式。
ゾルフの『灰狼』やティリアの『朱郭』など、実力のあるハンターに勝手に、いつの間にかつけられている所謂アダ名なのである。
マイルズはてっきりジンの『千手』とシィの『月光』は二つ名ではなく称号だと思っていた。
事実数少ないG級ハンターは普通、二つ名よりもギルド公式の称号の方が有名になっているからだ。

「あの子らの称号はなぁ、シィが『鏡花(きょうか)』でジンが『水月(すいげつ)』。二人合わせて『鏡花水月』や。意味分かるか？」
「いえ……」

そんな称号、マイルズは初めて聞く。

意味もよく分からない。
ジンとシィのハンターとしての特徴を上手く捉えているのだろうか？

「意味は簡単や。『そこにはおらへん』、それだけや」
「……？　どういう意味ですか？」

そこにはいない筈はない。
ジンもシィも戦線に立ってまさしく鬼の様な活躍をしているではないか。
そもそもいなかったら討伐も何も出来ない。

「……頭の回転悪いやっちゃな。相手側（モンスター）がそう感じるだけや。どんなに攻撃しても当たらへん。まるで鏡に映る花、水面に浮かぶ月。夢幻みたいに全てをすり抜けてきよんねん、あいつらは」

幻。
確かに言われてみればそうかもしれない。
超高速で駆け巡り、残像どころか分身の様な物まで目の錯覚で見える動き。
信じられない攻撃の仕方。
モンスターにとっては悪い夢の様に思えるのかもしれない。

「まぁもう一つ、大長老様だけが言う呼び名があるんやけどな。まぁそれは後で教えたる。それよりも今は前見ぃ、そろそろ詰みやさかいな」

マイルズがエミルの言った言葉に首を傾げながら前を向き、固まる。
ジンとシィの動きが更に加速しており、今ではマイルズ達がいる遠距離からでも位置が分かる様になったドスイーオスに迫っていたの

だ。
二振りの刃が手首を軸に弧を描く。
それは剣を『振る』のではなく『回すだけ』の行動。
しかし、それでもその回転する刃に当たったイーオス達は斬り裂かれ、血を撒き散らして沈んでいく。
シィが走りながらライトボウガンを構える。
ボウガンについている白銀の何かの毛が揺れ、神々しい光を放つ。

「……そ～れっ！」

シィがこの場に似合わぬのんびりとした掛け声と共に引金を引く。
撒き散らされるは散弾。
ドスイーオスの周りにいたイーオス達を弾き飛ばし、ジンが割って入れる間を空ける。
だが、まだ距離はある。
いくらジンが早くとも、まだまだいるイーオス達がその間をリカバリーする方が早いだろう。
ただ、ジンが普通のハンターだったらの話しであるが。

「……！」

ギラリとジンの漆黒の目が光る。
片腕が霞み、双剣の片方をぶん投げた。
宙を高速で斬り裂き、刃は見事にドスイーオスの喉に突き刺さる。
血が溢れ、同時に水が舞い、ドスイーオスの体が傾ぐ。

「……終幕だ」

ダンッと地面を蹴り、ジンが一本になった剣を握ってドスイーオスを上から強襲する。

周りにいたイーオス達はシィに軒並み撃ち抜かれて倒れ伏し、完全にノーマーク。
ドスイーオスは喉に突き刺さったままの刃を取ろうと必死になって周りが見えていない。
無論、上から来るジンにも気が付かない。
スタンと地面にジンが降り立つ。
少し遅れて、ドスイーオスの体が真っ二つに割れた。
終幕。
ジンの言う通り、群れのボスを失ったイーオス達は慌てて沼地の方へ引き返し、どんどん数を減らしていく。
ジンと、その隣まで歩いてきたシィは追撃を掛けず、ただそのイーオス達の敗走を見る。
そっと二人が目を瞑り、合掌した。
二度目の危機も、またこの二人のハンターにより至極あっさり片付けられた。

「……」
「言葉も出ぇへんか？　あぁそうや、リリスちゃんやったか？　あんた双剣使いやそうやけど、絶対にジンの真似したらアカンからな。体潰れるさかい」
静かにイーオスの骸が群がる只中で合掌する二人をマイルズ達は見る。
戦意を失ったイーオスにはたとえ隣にいたイーオスにさえ刃を向けず、ただ見送っていた二人。

確かに命の略奪者の如き猛攻。
だが、略奪者が冥福を祈り手を合わせるのか？
マイルズには分からない。
するとエミルがマイルズとリリスに声を掛けてきた。

「着いてきぃ、おもろい話ししたるわ。シュリン、ヨナ、後始末よろしゅう頼むで」
「……はいよ。一応俺が先輩なんだからな？　貸しの一つにしとくぞ」
「好きにしぃ、絶対返さんから」

ヒラヒラと二人のギルドナイトに後ろ手で手を振りながらエミルが歩き出す。
その後を二人が追い掛ける。
一体面白い話しとはなんなのだろうか？

「……あれ？　エミルさんは？」
「さぁな、二人連れて何処かに行った」
「何か話すらしいですよ？」

合掌を終えた二人がシュリンとヨナと合流する。
こういう時に一番煩いエミルが不在で首を傾げるジンだが、ヨナの言葉を聞いて溜息をついた。

「……下らない昔話か」

ＤＩＥＺ：　鏡花水月（後書き）

次回で終われ、終われ、終われ～！
神威です。
……今回はぶっちゃけモンハンなんだしもう一回ぐらい戦闘入れないといけないなぁなんて思って入れました。
ドスイーオス一瞬。
なのになんか文字数増えたし。

次回で終われと思っています。
終わらないと私の本家作品に色々支障をきたしますしね。
頑張って最後まで書きたいです。
……終わるかなぁ。
感想などを送っていただければ幸いです。
でわ！

ＦＩＮＥ：　レクイエム奏でて

マイルズとリリスを従えて歩くエミルは、村の中央に位置する広場を突っ切って歩いていく。
時たま「イーオスは？」などの質問がされ、エミルは「片付いた」と簡潔に答え、住民達を安心させる。
目の端で助かったと喜ぶヴィルマの住民達を見ながら、マイルズとリリスは前を進むエミルにただ無言で着いていく。
遂には広場を突っ切り、村の東側の方へと出てきてしまった。
焼け廃れた東側に勿論人影など無く、マイルズ達三人しかいない。
そこでやっと、エミルが足を止めた。
後ろにいる二人の方を向き、適当にそこら辺に転がっている瓦礫に腰を降ろす。

「長～い話しや。ほれ、座りぃ」

瓦礫に座り込み、手をチョイチョイと動かして二人に座る様に言う。
二人がエミルと同じく適当に瓦礫に座ったところで、エミルの口が開く。

「さっきはおもろい言うたけど、実際はどうやろな？　意外とシビアかもしれんなぁ」
「……なんの話しですか？」
「二人の過去。どや、知りたいやろ？　うちはある程度あの二人、まぁシィは微妙やけど少なくともジンからの信頼は少しは勝ち取っとる。うちが二人の昔話ししてもあの二人はなんも言わんやろ」

何の話しか、マイルズはやっと理解した。
二人の過去。
確かに気になるところではあるが、本当に勝手に話して問題無いのだろうか？
不安そうなマイルズとリリスの顔を見て、エミルは大丈夫だと笑った。

「で、聞くか？　別にうちは喋らんでもええねん。あんたらが知りたそうやったからチャンスを提示しとるだけや」

聞きたいのなら喋る。
別にいいなら喋らない。
実にシンプルな二択。
マイルズとリリスはどうしようかと顔を見合せた。
……お互いに『聞きたい』というのがはっきりと顔に出ている。

「……お願いします」
「聞くんか？　えぇなぁ、あんたら度胸あるで」

唇の端を吊り上げて、エミルが笑う。
本当に楽しそうに。
『度胸がある』とは一体どういう意味なのか、マイルズの心にその言葉が引っ掛かる。

「今から話す事はぜ～んぶ、何もかもが真実や。嘘やない。そんだけはよろしゅう頼むで」

エミルはそう言い、マイルズ達の方を見て口を開く。
エミルが口を開いて語るのは、まるで吟遊詩人が詠う様な話。
ギルドの長、大長老も知らない話。

「あの二人の故郷の名はエンラッド。広大な森の奥のそのまた奥にある、ここヴィルマの一割にも及ばん小っさい村や。そこで今途方もない夢に向かって突っ走っとる二人は産まれた」

なだらかな丘陵地帯に広がる森の奥のそのまた奥、沼あり、木々あり、洞窟あり。
生態系上位の飛竜や火竜の番、古龍が住まう地の近くにあるまさに秘境。
ハンターですら辿り着くにはかなりの根性と、生態系上位のモンスターに鉢合わせない運がいる場所。
そこにエンラッドの村はある。
一応近く、と言っても竜車で三日は掛かる村や更に遠く、竜車で最悪一月掛かるドンドルマとも交易をしている村である。
規模は非常に小さく、総人口は二百程度。
特産物は周りに住まう強力なモンスター達のせいで厳しくなった環境特有の珍しい鉱物や虫、山菜など豊富だが、いかんせん場所が場所である。
届けるだけでも命懸けな為、せっかく高価で貴重で稀少な資源がたくさんあるのにあまり村が豊かとは言えない。
そんな小さな村で稀代の天才ハンター二人は生まれた。
片や村唯一のハンターの一人息子。
片やその小さな村の村長の一人娘として。

「ジ～ン！　あ～そ～ぼっ！」
「あらシィちゃん、こんにちは」

そんな小さな村エンラッドの一角に、少しだけ周りの家よりも大きな木造の家がある。
そしてその家の前で、片手にぬいぐるみを持った少女が元気良く声を掛ける。
煌めく金髪は美しく、空に輝く太陽の光を目一杯反射して更に輝く。
少女の声に反応して家の扉が開き、中から黒髪が美しい女性が現れた。
少女――シィの方に歩み寄り、頭を優しく撫でる。

「こんにちはユキさん！　ジンいますか？」

頭を撫でられ気持ち良さそうに顔を綻ばせながら、シィが無邪気な笑顔でユキという女性に訊く。
あぁとユキと呼ばれた女性は答え、後ろを向いた。

「ジン！　シィちゃん来てるわよ～！」

扉の奥に向かって声を掛ける。
するとユキと同じ漆黒の髪と漆黒の目をした少年が、何かを背負った姿で現れた。
シィはその少年が現れるや否やトテトテと走り出し、むぎゅうっと飛び付く。

「おっはよ～ジン！」

「おはよう。シィ、いまおれ父さんからもらった『そうけん』ってぶきもってるから、だきついたらあぶないぞ？」

むぎゅうっと抱き着いて離れないシィの頭を撫でながら、ジンが言う。

確かに背負っている物は、風化して物凄くボロボロだがハンターの使う武器の一つ、双剣の形をしていた。

「あら、それ父さんから貰ったの？　勝手に取って来たんじゃないの？　まだジンは四歳なのに、父さんがそんな物あげるわけ無いでしょ？」

「ううん、きのうの夜に父さんが『くえすと』にいくまえにもらった」

ユキがジンの方に歩み寄り、背中のそれを覗き込みながら言う。

いくら自分の息子とはいえ、四歳の頃からそんな物は渡さないだろうと。

半信半疑のユキにジンは力説する。

「ほんとうだって！　これで母さんしっかりまもれって父さんにいわれた！」

「ふぅん……まぁ子供用なのかもね。錆びを通り越して風化して最早刃物とも言えないし。それじゃあ私とシィちゃんをしっかり守ってね」

「おぉっ！　みとけシィ、おれはこれでランポスたおすんだ！」

未だにしがみついているシィに、風化してボロボロの刃を見せてジンが言う。

子は親の背を見て育つというが、やはりハンターの子はハンターになるのか。

物凄く若く見え、姉にも見えなくもないがユキはジンのれっきとした母親だ。
双剣の片方を持ち、幼馴染の少女に何事かを力説する息子を見てなんとなくそう感慨深く考える。

「ほぉら、いつまでそこでくっついてるの？　外で遊ぶか家に入るかどっちかにしなさい」
「よし、じゃあシィ、そとにいこーぜ！」
「うん！」
「あぁちょっと、シィちゃん！　ぬいぐるみは私が持っとくから、後でまた取りにきてね」

二人仲良く手を繋いで駆け出すが、ユキが外で遊ぶならとシィが持っていたぬいぐるみを取る。
二人共遊び盛りの四歳、ぬいぐるみなんて持って外で遊べばボロボロの泥々になってしまう。
はぁいと素直に差し出したシィからぬいぐるみを受け取り、言ってらっしゃいとユキは二人の背中に手を振った。

「こけるなよ！」
「こけないもん！」

無邪気な二人の声が、静かな村に木霊した。

「二人共遅いわね……」

「なんだ、心配なのかユキ？　まだ外は明るいぞ？」

窓の外を眺め、心配そうな面持ちで溜息するのはユキ。
そんなユキの独白に答えたのは、テーブルを挟んでユキの向かい側に座っている男。
外を指差してまだ明るいじゃないかと不思議そうに首を傾げる。

「だって……二人共朝から遊びに行って、もう三時回ったわ。昼ご飯もまだなのよ？　エドは不自然に思わないの？」
「俺がガキの頃は昼飯も忘れて遊んだもんだ。なに、心配無いさ」

向かい側に座る男の名はエド・フォルクス。
ジンの父親であり、このエンラッド唯一のハンターである。
昨晩クエストを受けて、それを無難にこなし今さっき帰ってきたところの彼はあまり心配してはいない。
まだまだ昼だ。
この秘境とも言えるエンラッドの村は一歩外に出たら危険だが、逆に村の中は安全だ。
長い間エンラッドの先者達が自然と共生していた為、基本標的にされないエアポケットの様な感じになっているのである。

「シィちゃんも一緒なのよ？　ジンは貴方があげた双剣持ってるし、もしかしたら何か事故とか……」
「あれは武器とも呼べない代物だ。刃はボロボロ、最高級の研磨剤を大量に使ったらちょっとぐらい復活するかもしれないが、あの状態なら人はおろか、葉っぱ一枚斬れやしないさ」

ジンは初心者以前にまだまだ四歳の子供。
ハンターの訓練なんて父親であるエドから何も受けてない。
だからこそ初めて持ったハンターの『武器』に心が浮かれ、何かや

らかしたのかもしれないと不安になる。
無下に振り回したらたとえ切れ味ゼロでも危ない。
斬り殺すのは無理でも撲殺ぐらいならあの武器でも十分いけそうだから。

「……大体何であの子に双剣なんてあげたの？　ジンはまだ四歳よ、早すぎるんじゃない？」
「いゃぁ……俺もまだ早いとは思ったんだが、前に火山で掘り当てた謎の塊をルイに加工してもらったらあんなのが出来てな。ルイもよく分からんとか言うし、武器としての使い道も無さそうだからやったんだ」

母親とはやはり子供には甘い一面がある。
一般論を言うならば、ジンにはまだまだ武器を渡したらいけない歳だろう。
だからこそ夫であるエドに訊くのだが、エドは適当に答える。
言っている事は完全に事実なのだが、あげるのはどうかはまた別問題。
ユキが眉間に皺寄せ、怪我したら危ないじゃないとまくし立てる。
因みにルイとはこの村の鍛冶師だ。

「大丈夫だって。少なくともあいつの頭は俺じゃなくてお前譲り、やっていい事とダメな事ぐらい分かってる」
「……私譲りなら尚不安よ。私、昔はお転婆で有名だったんだから」
「お転婆は今もだろ？　だがお前は賢い、博士号とかなんか持ってたろ？」

ユキ・フォルクス、嫁入りする前の旧名、ユキ・ミナヅキ。
実は著名な考古学者である。
東方大陸出身で様々な土地の歴史を研究、古代遺跡からの出土品の

中の、特に武具として使えそうな物を現代用にアレンジし、多数の新兵器を開発した機械マニアとしても有名。
現在ハンターが使える一部の武器は、彼女がいたから存在する物もある。
この村に嫁いでやって来たのは、この村特有の自然信仰に惚れたから、という理由もなきにしもあらず。
　そんな彼女の血を引く息子、ジンもまた賢い。
少なくとも同年代の子供中ではずば抜けた物がある。

「容姿も頭もお前譲りだ、心配無い」
「髪と目の色だけね。顔は貴方そっくりだし、性格もよ。だから心配なの」

　エンラッド唯一のハンター、エド・フォルクス。
産まれも育ちもエンラッド。
生粋の地元っ子である。
ハンターとしての地位は非常に微妙。
『そこそこやり手』、この言葉が最も彼を簡潔に説明出来る言葉である。
あくまでもそこそこ。
勿論英雄クラスでは無いし、二つ名というやり手のハンターが持つ異名も無い。
　切れ目の少し厳つい、クールな感じのルックスは成程ジンとそっくりだ。
　性格は若干無鉄砲さがある。
ユキが聞いた話では、少年時代にたまたま出会したドスランポスに丸腰で挑み掛かった事もあるらしい。
ならばその性格に大なり小なり影響を受けているジンがやはり何かしてそうで怖い。
ぶっちゃけた話し、これが一番ユキが心配している事だ。

ハァっと息をついて再び外を眺めるユキと、心配するなと手を伸ばしてユキの頭をポンポンと叩くエド。
そんな時、急に家の扉をドンドンと叩く音が響いた。
二人は何事かと顔を見合せ、急いで扉を開けると一人の女性が荒い息をして扉の前に立っていた。
ショートカットされたブロンドの髪は汗ばみ、肩で息をするその女性はルイ。
この村の鍛冶師である。

「……どうした、そんなに焦って？」
「あぁエドさん！　ジン君とシィちゃんが、村の東で！」
「おいユキ、待て！　まだ何があったか……ったく！　東だな？」

慌てた様子でルイが言う。
するとユキはいち早く反応し、ルイの言う村の東の方へと駆け出した。
そんなユキに静止の言葉を掛けるエドだが通じない。
仕方ないのでエドもルイに再度村の東かどうか確認し、ユキの後を追い掛けた。

村の東側。
四方のうち三つが森に面し、一つが川と面しているこのエンラッドの村。
東側は森に面している。
そこに人だかりが出来ていた。
普段ならあり得ないその人だかりを見てユキは異変を感じ取り、血

相を変えて中に突っ込む。
遅れてエドも突っ込み、人をかき分け人混みの中心に飛び出た。
——そこには何かの返り血を浴びて血塗れになったジンと、そのジンに泣いて抱き着くシィがいた。
近くにはエドがあげた双剣が地面に横たわり、刃にはべったりと血が付いている。
流石のエドもこれには顔が青くなる。
急いで駆け寄り、何があったか尋ねる。

「ジン！　何があった!?」
「父さん、母さんも……」

静かにシィの頭を撫でていたジンはエドの声を聞き、両親がこの場にいる事に漸く気付いた。
一瞬驚く様に目を見開いたが、直ぐに表情は元に戻る。

「……おれとシィがここであそんでたら、いきなりランポスが一ぴきとびでてきたんだ。それで、シィにとびかかったから……おれ……」

静かな表情で胸の中で泣くシィを撫でながら、ジンが二人に話し出す。
曰く、二人がこの村の東側ある広場で遊んでいると、いきなり森の中からランポスが一匹現れたらしい。
そして近くにいたシィに襲い掛かろうとしてきた。
ジンは咄嗟にエドから貰った双剣をひっ掴み、思い切り斬り掛かったという。
そこからはシィを守る為に無我夢中で四歳のジンには重い筈の双剣を振りかざし、気が付けばランポスは目の前で死んでいた。
自分は返り血を浴び血塗れ、それを見てシィはジンが自分を庇って

大怪我したと思い、今までずっと泣きじゃくりながら謝ってきているらしい。

「……」

エドはジンの話しを聞き、耳を疑う。

あの双剣は背負うだけならまだ大丈夫だが、四歳のジンが振り回すには重すぎる。

しかも刃はボロボロで、たとえランポスでも斬り裂いて殺すにはかなりの技量と力がいる。

というより、ランポスを斬り裂くだけの切れ味は無い筈だ。

ユキが二人に大丈夫と声を掛け、力いっぱい抱き締めるのを横目にエドは、近くに投げ捨てられた双剣を見る。

そして、絶句する。

……刃こぼれしていない。

いや、元々この剣は刃こぼれしていた為少し表現に語弊はあるが、少なくともランポスを斬った際に刃が更に欠けるという武器なら必然の事が起きていない。

ランポスの様な生態系下位のモンスターは死後直ぐに溶解液を出し、自らの死骸を土に返す。

なのでもうここにはランポスの骸は存在しないが、多分達人業の如く強烈な斬撃を喰らったに違いない。

……本当にジンが倒したのだろうか？

もしそれが本当なら、ジンには恐ろしい程の力と才能が詰まっている。

四歳で、しかも一人でランポスを倒すなど、多分ギルドでも前例の無い出来事だ。

「……父さん」

双剣を握り、信じられない物を見た様な顔をするエドに、ユキの抱擁から抜け出したジンが歩み寄る。
シィはジンが無事で、怪我してないとユキから聞き安心するが、やっぱり自分のせいで危険な目に合わせたと思い、再び泣き出す。
ユキが頭を撫でて励ますが、泣き止む気配は一向に無い。

「おれ、わるいことしたのかな？」
「……どうしてだ？」

身を挺して幼馴染をランポスから守り、武器と呼ぶにはボロボロ過ぎる双剣で打ち倒したというのに、ジンはまるで何か悪い事をしてしまったかの様な顔をしている。
ランポスが怖かったとか、守り、倒した満足感などが欠片も感じられない。
エドは首を傾げてジンに訊く。

「だって、シィはあんなにないてるし、ランポスはしんじゃったし。父さんからもらった『そうけん』でランポスをきったとき、おれ、なんかすごくおもくかんじた」

エドはジンの言葉を聞いて再び絶句する。
ジンはまだ四歳だ。
それなのに、この子はもう命を刈り取る重みを感じ取ったのか。
ジンの言う『重い』とは双剣の重みではなく、ランポスの命の重み。
エドはスッとしゃがみ、ジンの頭に手を乗せた。

「お前は心が豊かだな、もう命の重みを感じ取れるのか。ならちょっと難しいが覚えておけ。俺みたいなハンターはな、モンスターから人を守る仕事をしているが同時に、モンスターの命を刈り取る仕事をしてるんだ。モンスターから見れば俺達人間もまたモンスター

なんだ。ジン、お前はシィちゃんを守った。が、同時にランポスの命を奪った。それは責められる事じゃない、が、命を奪った責任はある。しっかり供養してあげろ」

四歳のジンにとってエドの言った言葉は難し過ぎる。
だが、ジンはうんと頷いて、静かに、ランポスが倒れていたであろう血の溜まった場所まで歩き、両手を合わせて供養した。

「父さん」
「ん、どうした？」
「おれ、ハンターになる」

――これが、稀代の天才ハンターの一つの始まりであった。

ジンがハンターになると言い出して五年。
それまでに大きな事件が二つ起きた。
一つはシィもハンターになると言い出した事。
この村の村長の一人娘であるシィがいきなりそんな事を言い出したのだ。
ジンは大反対したが、シィの両親はあっさりとオーケーを出し、結局シィもジンと共にエドから指導を受ける様になった。
そしてもう一つ。
ジンだけでなくシィもハンターの修行を開始した矢先にそれは起きた。
ジンの父親であるエドが死んだのだ。
村の近くに現れた漆黒の飛竜と相討ったのである。
元々ハンターとして優秀とは言い難かったエド。

死と常に隣り合わせのハンターという仕事。
この二つが重なり、容赦無く現実としてジンの前に現れたのだ。
村唯一のハンターの死。
元々規模の小さいこの村は、村人全員が家族みたいな物である。
最愛の夫を亡くしたユキも、生前から親友として仲良くしていたシィの父親であり村長のヒューズも、そしてシィや村人全員が悲しみに包まれる中、ジンだけは泣かなかった。
静かにエドの墓前に立ち、何かを誓った。
エドの後継者である村のハンターには、急遽ドンドルマに修行に行っていたジンとシィより年上の青年ハンターが着いた。
エンラッド出身で、エドに憧れハンターを目指した青年である。
彼は最初こそ危なっかしかったが、徐々にハンターの仕事にも板が付き、一時村にハンター不在という危機的状況は脱した。
ジンとシィは、エドが死んでからは独学で戦い方を身に付けていった。
そして五年経ったエンラッドの村。
その村の入口である正門に、ジンとシィの姿があった。
ユキとシィの両親が後ろに立ち、エドの後継者である村付きハンターのケイン、鍛冶師のルイなどがそれに続く。

「意外と早い旅立ちね」
「……うん、そうだな。自分でも意外」

ユキが二人を見つめ、感慨深く言う。
まだ九歳。
同年代の子達に比べると少し背は高いジンだが、まだまだ母親であるユキよりも小さい。
元々小柄なシィなど、本当に大人から見れば小さく見える。
なのにこの二人は、エドの死後も独学で必死に実力をつけ、誰も信じられない様な圧倒的な力を見せつけてきた。

ギルド非公式だが、たった七歳にして火竜の番を討伐。
村付きハンターのケインも苦笑いしか出来ない様なスピードで成長し、このエンラッド周辺の辺境地帯においては最強と言っても過言ではない程の実力を手に入れた。
そんな二人がハンターの街と呼ばれるドンドルマに進出するのは最早自明の理である。
ユキも、シィの両親であるヒューズとグレイスも、二人の武具をずっと作り続けてきたルイも止める事はしない。

「たまには帰ってきなさいよ。母さん結構寂しいんだから」
「武具はルイさんに作ってもらうって決めてるから、結構帰ってくると思う。なぁシィ？」
「うん。私達ルイさんの『お得意様』だからね」

子供は成長するのが早い。
少し前まではまだまだ子供で全然頼り無かったジンも、天然娘だったシィも、今では見違える程強く逞しくなった。
無論まだまだ子供で、母親や両親として心配な事は山程あるが、それでも二人は大きくなった。
一度（ひとたび）の別れ。
ちょっとした旅立ち。
最後ではないだろうが、暫く会わないだろう。
二人は両親の方へ歩み寄る。
自分の方へ来たジンに、ユキは自分の首にかけていたネックレスを外し、ジンにかける。

「これね、エド――貴方の父さんが私にプロポーズする時にくれた指輪。銀火竜の鱗で作った如何にもハンターらしい指輪。貴方の御守りとして、父さんが貴方を守ってくれる様に願ってあげるわ」

冷たい光を放つその指輪。
本来の指輪として指には填めず、真ん中に糸を通しネックレスとしてユキが肌身離さず持っていた物である。
それをジンの首にかけてやる。
が、ジンはそれを取り、ユキに返した。

「父さんは俺じゃなくて母さんにこれあげたんだろ？　母さんが持っとくべきだと俺は思う。俺は父さんから色んな物貰ってるし、要らない」
「……あら、一端の口利く様になったじゃないのこのバカ息子は」

突き返されたネックレスを見てユキが笑う。
そっとジンからネックレスを受け取ると、再び自分の首にかけた。
後ろではシィがこれまた両親と何か話しており、ルイやケインといった『親子』じゃない者達は更にその後ろでそのやり取りを見ている。

「……いい？　シィちゃんをしっかり守りなさいよ。あと貴方はまだ子供なんだから、無茶しない事。父さん譲りで貴方は無茶が好きだから、私もシィちゃんも気苦労は絶えないわ」
「……分かった」

ポンポンっとジンの頭を撫でながら、ユキが言う。
息子へ、母親として。
この『バカ息子』はいつも心配ばかり掛けて、無茶が好きで、自分の弱さを他人には見せない節がある。
エドが死んだ日、憧れだった父親が死んだというのに泣かなかったジン。
だがユキは知っている。
誰にも見られない様に、ジンは墓前で泣いていた。

声を押し殺し、涙を流さまいと必死になりながら、静かに泣いていた。
なのにその翌日にはいつも通り、何事も無かったかの様に日課の素振りをしていた。
バカだ。泣きたければ泣けばいいのに、決して人前では泣こうとしなかったジンは筋金入りの大バカ者だ。
だからこそ母親として、この手の掛かるバカ息子が望む道に行ける様に、しっかりとレールを敷いてやらなければならない。

「私とエドの子なんだから、しっかり名を上げてきなさい。じゃないと召致しないわよ？」

ユキはそっとジンのほっぺにキスをする。
最愛の『バカ息子』への最大限のエールを送る。
ジンは照れた様に笑い、任せとけと胸を張った。
ユキにはそれが、エドと重なって見える。
あぁ、やっぱり子は親の背を見て育つらしい。

「男に二言は無いわよ？」
「分かってる」
「シィちゃんをしっかり守ってやりなさいよ」
「それも分かってる」
「貴方とシィちゃんの間で産まれた子、私の孫の名付け親は私にしなさい」
「分かっ……なんで！？」

沁々《しみじみ》とした別れは性に合わない。
最後にジンをからかいながら送り出す。

「よし、じゃあシィ行くぞ！」

「うん！」

辺境の小さな村エンラッド。

この先ここの大陸史にその名をデカデカと刻み込む二人のハンターが、最初の大きな一歩を踏み出した瞬間だ。

「……と、まぁここまでがあの二人の始まりの話やな。うちは二回エンラッドの村に行った事があるさかい、ジンの母親であるユキさんやシィの両親であるヒューズさんとグレイスさんに会ってこの話を聞いたんや。……その後五時間ぐらい、他の村人も集まって延々とあの二人についての自慢話を聞かされたけど」

村人達にとってあの二人は間違いなく英雄だろう。

今現在あの二人は『ハンター史上初』という言葉を総なめにしている様なハンターなのだから。

誇りに思わずにはいられないであろう。

「勘違いしとるな、二人共。エンラッドの人らが自慢すんのはあの二人が『史上初』とか『最年少』みたいな記録を打ち立て続けとる事やない。あの二人が決して傲らず、昔からな～んも変わらん事を誇りにしとんや。あの村は自然信仰の村やからな。モンスターに対しても温厚で、ドンドルマ《うちとこ》やヴィルマ《ここ》みたいに過剰な反応せぇへん」

「どういう意味ですか？」

自然信仰。
東方大陸の一部に残ると言われる昔からの思想。
その自然信仰がエンラッドには深く根付いているという。
その思想はドンドルマやヴィルマの者達には考えられない物。
極端な話し、今回のヴィルマの様に炎王龍に村が焼き尽くされようと『自然の流れだ仕方ない』と割り切る様な思想。
自然と共に生き、自然を尊重する。
ジンとシィが戦闘において呼吸や筋肉の使い方、『気』などを他のハンターと比べて多用するのもこれが所以。
自然のど真ん中でハンターとしての技術を独学で会得したのだ、故郷に根付く自然から学ぶ力を使うのは当たり前なのだ。

「あの二人、狩り終えた後に合掌するやろ？　あれはジンの父さんの真似らしい。エンラッドの風土が生んだスタイルやな」
「……そんな意味があったんですか」

初めてジンがランポスを狩った時に言われた『しっかり供養してあげろ』という言葉を二人は今でも実践している。
故郷の、父の、師匠の教え。
このスタイルに似た事をするハンターは少数ながら存在するが、二人の合掌はまた別の意味を持つ。
それこそ、懺悔（ざんげ）に似ている。

「んで、もう一つ。うちが二人に初めて会った時の話しや。結構うちもあの二人と関わりあんねんで？」

エミルは笑い、懐かしむ様な表情で話し出す。
マイルズもリリスも、再びその話しに耳を傾けた。

「……なぁ、ほんまギルドナイトに入らんのか？　こんだけしつこく勧誘してるんや、そろそろ折れてもえぇやろう」

今からちょうど四年前のドンドルマ、ギルドの酒場。
真新しい赤い帽子を被った女性が紙束を見ながら対面に座る男に言う。
勿論赤い帽子を被った女性はエミル。
当時二十歳。
まだまだ新米のギルドナイトであった頃だ。

「何度も俺はギルドの上層部に言っているんだがな、断る。俺には夢があるんだ、ギルドナイトなんて縛りの強いもんになったら面倒過ぎて夢どころじゃない」

エミルの対面に座る、渋みのある男らしい顔をした男性。
世間からは“灰狼”と呼ばれる実力者、ゾルフ・ヴァルフレア。
エミルの勧誘をキッパリと断り、そろそろ諦める様に上に言ってくれと本気で頼む。

「生憎、うちは新米やから上には言えへんな。ってかほんま折れよぉや、ヴィルマ《そっち》はもぉ十分デカなったやろ？　中継都市やったらもうあれ、破格のデカさやで」

ヴィルマは単なる中継都市、交易の中継地点にあるだけの都市である。
一応特産物はあるのだが、それは所謂並み。
ドンドルマの様な『ハンターの総本山』という特殊な都市でも無い。
それなのに海産物などの貿易で栄えるアルフレアと同等か、下手したらそれ以上の規模にまで発展した。
道は整備され、防御壁で街を囲み、バリスタまで設置された都市に。
殆ど全てはこの灰狼、ゾルフの多大なる地元愛と寄付による物だ。

「ただの中継地点で終わらせる気は俺には無い。いつかここよりも豊かな街にするのが目標だ」
「……ん な無茶苦茶な。あんたの寿命じゃ足りへんのちゃうか？」

ヴィルマ史上最高にして最強の呼び声高いそのゾルフをギルド上層部は見逃す筈は無い。
その才能と信頼をどうかギルドの為にと勧誘し続けて早七年。
それをことごとく蹴ってきたのはこの様な夢があるからだ。
エミルも聞いてはいたが、まさかこれ程までとはと溜息が出る。

「それに俺なんかよりももっと才能豊かで適役な奴はいっぱいいるだろう？　俺は最近話題の『双鬼（ふたおに）』を推すぞ。あの二人は良い。素直で良い子達だし、礼儀も抜群だ」
「……空前絶後の天才ハンターかいな。生憎、あの二人はギルドナイト《うちら》と仲が悪ぅてなぁ。うちは会った事無いさかい、なんも知らへんけど」

双鬼。
ここ最近急速に知名度を上げてきた巷（ちまた）で噂の男女二人のハンター。
まだまだ子供だと聞くが、実力は異常。

特に片方は齢十三にしてG級ハンターに昇格するというとんでもない事をしでかした。
ギルドナイトであるエミルの耳にもそのあり得ない情報は届いているが、いかんせんまだその本人達を見た事が無い。
それにその二人のハンターはギルド上層部とは仲が半端無く悪いと聞く。
大長老とほんの一握りの上役を除けば殆ど敵対関係だとも言われている。
子供なのにギルドナイトのブラックリストに入るかもしれないとも。
……そんな二人をギルドナイトに薦める筈が無いだろう。
エミルは再び溜息をこぼす。

「っと、噂をすればなんとやら。よぉ、久しぶりだな二人共！」
「あぁちょっ！？　まだ話し途中やのに……行ってもたわ」

溜息をこぼすエミルを他所に、ゾルフは誰か知り合いを見つけたのだろうか。
立ち上がって手を振りながら今まで座っていたテーブルから離れていく。
結局エミルはゾルフに逃げられた形になる。

「はぁ……先輩らが手ぇ焼く筈やわ。こらもぉ、うちらが諦めるべきやな」
「あら、その様子だとまた失敗かしら？」

止まらない溜息。
うなだれる肩。
ガックリとテーブルに突っ伏してグデ～っと手を広げるエミルに声が掛かる。
突っ伏した状態から見上げると、ギルドの受付嬢の制服に身を包ん

だ物凄い美人が一人立っている。

「ライザさんか……御察しの通り、これで先輩から数えて八連続で失敗やわ」

エミルの言葉を聞いてあらあらと苦笑いする受付嬢。

名をライザという。

同じ女性から見ても軽い嫉妬を覚える程非の打ち所が無い美貌、ミステリアスな雰囲気、ギルドが誇る最終兵器である。

何が最終兵器なのかはよく分からないが、何となく最終兵器という言葉が似合う女性なのだ。

何でも出来るし。

「それは大変ね。ギルドナイト様もこれだけ勧誘蹴られれば面目丸潰れじゃないの？　ねぇエミルちゃん？」

「ほんまや。諦め悪過ぎるで上役達は。しかも双鬼をギルドナイトにどうやって薦めてきたし」

ハァっと大きく息をつく。

ゾルフをギルドナイトに引き込むのはそこらのモンスターを討伐するよりも遥かに難しい。

いや、多分不可能だ。

なのに何故上役は推薦し続けるのか謎だ。

「……双鬼ねぇ。今ちょうどゾルフさんと喋ってるわよ？　勧誘してきたら？」

「おんのかい！？」

ゾルフの知り合いはその二人か！？

なら紹介しろよ、推薦したんだから！

心の底で突っ込みながら、ライザの指差す方向をエミルは見る。
そこには確かに、ゾルフと話す二人の子供がいた。

「……確かにまだまだガキやんけ。やのになんやあの装備？　ふざけとんか？」
「ジンもシィちゃんも凄いわよ～。良い子達だし私も推すわ、ギルドナイト」
「んでもってあんたも知り合いかい！？」
「当たり前よ～。一番の仲良しよ」

お前も双鬼と知り合いなのか！？
驚くエミルにライザは笑って一番の仲良しと答えるではないか。
双鬼は殆どのハンターとは組まないと聞いていたが、意外と交友幅はあるのか？
なんだかエミルはわけが分からなくなってきた。

「あ、でもあの子達結構人見知りって言うか、中々心開かない子だから向いてないかしら？　あの二人と普通に話せるのって私とゾルフさんぐらいなのよね～」
「少なっ！？」

前述訂正。
双鬼の交友幅は予想よりも遥かに狭かった。
二人は流石に狭すぎる。
そんなハンター普通はいないだろう。
二人。
しかもそのうち一人は受付嬢だ。
四人チームすら組めない交友幅の狭さ、どういう意図でそうしてるのだろう？
チームなんていらねぇ、二人で十分だとでも思っているのか？

「……二人ねぇ」
「ギルドナイトになればもう少しはお友達増えないかしら？　私としてはちょっとそこら辺が心配なの」
「ならんな。むしろ余計人が寄らななる」
ギルドナイトは仕事柄、普通のハンターには敬遠されがちな職業である。
一部の者からはハンターのハンターとまで言われているのだ。
友達が増える見込みは殆どゼロと言える。
よっこらせっとエミルは立ち上がり、酒場の出口の方へ歩く。
「あら、誘わないの？　ジンとシィちゃん」
「暇が無いんよ。今から失敗報告や」
後ろ手にヒラヒラと片手を振りながら、エミルは酒場から出ていく。
その背中は何となく哀愁を背負っている様にも見えたが、その理由はまぁゾルフの勧誘失敗だろう。
ライザはエミルを見送ると、ゾルフと立って話している双鬼のうちの金髪の少女――シィに飛び付いてほっぺをいつも通りにつつきに行った。
双鬼と普通に話せる者、これにて全員集合。
ギルドの喧しい酒場の一回で、最近よく見る光景である。

「……お前でも失敗か。八連敗とは笑い話でも出来が悪いな」
「ありゃもう無理と違います？　うちはそう思いますけど」

とある建物の中。
エミルの失敗報告を聞いて渋い顔をする男が一人。
天井付近にある窓から射し込む光を浴び、青い帽子がうっすら光る。

「ギルドナイトといえども年に数十人は死ぬ。お前はまだまだ新人りだから知らないだろうが、過酷な任務が続くのだ。ならば力と徳のある灰狼を召集したくなるのは明らかだろう？」
「……なら二人程、その灰狼に薦められた奴がおるんやけど？」

握っていた紙束を男はエミルに突き出す。
それはギルドナイトの名簿。
トップシークレットとも言える情報だ。
所々名前の上にバツ印が入っているのは、殉職した者を表すのだろうか？

「ほぉ……一体誰だ？　灰狼が推すとは興味深い」
「……双鬼、で分かります？」

ピクリと男の眉が動く。
エミルは若干男の視線が厳しくなった気がした。
地雷を踏んだか？
エミルの不安を感じ取ったのかどうかは分からないが、男は踵を返してエミルから視線を外す。
カツカツと渇いた高い靴音を響かせ、エミルから遠ざかる。

「……双鬼な、それは灰狼には悪いが却下だ」

「実績は一級品やけど、ですかいな？」
「考え方が違うんだ、あの二人と俺達ではな。気になるなら今度一緒にクエストに行ってみるといい。まぁ、あの二人がそのクエストに乗ったらの話だがな」

男はそれ以上何も言わず、建物の奥へと消えていく。
エミルはただ、その背中を見つめる事しか出来なかった。
……噂通り、相当仲が悪いらしい。

翌日のギルドの酒場である。
いつ何時でもこの酒場は人で溢れ返っているが、今日はいつにも増して人が多い。
まだ昼にもなっていないのにこの人数。
イラっとしながらもエミルは酒場の入口付近に立ち、キョロキョロと辺りを見回す。

「……あぁもぉっ！　なんで今日こない時間からこんな人おんねん！？　埃みたいにおるやんけ！」
「あら、エミルちゃんじゃない。どうかしたの？」

昼間の混雑時でなければ夜の宴会ばかり行われる時間でもない。
それなのにこの人の多さ。
あまり我慢強くないエミルは床を思いっきり蹴り飛ばしながら悪態

をつく。
そんなエミルに声を掛けたのはライザ。
この人の多さ、受付嬢兼料理番など様々な仕事があって大変な筈なのに汗一つ掻かず、気が付けばエミルの目の前に涼しい顔して立っていた。

「あぁライザさん。双鬼おらへん？　探しとんねんけど」
「あら、遂に二人にもギルドナイトの勧誘？　でも二人、多分蹴るわよ？」
「悪いけどギルドナイトとしての接触と違うねん。個人的な興味関心や」

エミルの言葉を聞いて一度は遂に二人もか～、蹴ると思うけどな～、などと笑っていたライザ。
しかし次のエミルの言葉であらそうとすんなり笑いを止める。
そして酒場の奥の方を指差した。

「あっちで灰狼のゾルフさんと喋りながら朝御飯食べてるわ。また後で私もメニュー運びに行くけど、先に注文しとく？」
「えぇわ、朝飯は家で食ってきた」

ライザに軽くお礼を言って、エミルはライザの指差した方向に足を向ける。
確かに酒場の奥で二人の小さなハンターはゾルフと何事かを喋りながら朝食を摂っていた。

「おはよーさん。元気しとるかお三方？」
「なんだ……毒薔薇のエミルさんじゃないか。また俺にか？　昨日断った筈だが？」
「……その名で呼ばんといてぇや、嫌いやねん。それに、今日はあ

んたに用は無い」

爽やかさ百パーセントの笑顔と共に、素晴らしい挨拶で三人に声を掛けるエミル。
これなら初対面での印象もバッチリだろう。
……だが、ゾルフの言った彼女自身の二つ名を聞いてブスッと表情を曇らせる。
毒薔薇のエミル。
女らしくないとの理由でエミルは嫌っているが、正真正銘彼女の二つ名だ。

「……毒薔薇？　最近ギルドナイトに入った、って噂の女性ハンターの事ですか？」
「なんや、うちの事知っとん？　不本意な二つ名は覚えてほし無いけど光栄やな。双鬼（ふたおに）・千手（せんじゅ）のジンに双鬼・月光のシィで合っとるか？」

毒薔薇の単語にピクリと反応した少年。
非常に不本意ながら有名らしいその二つ名。
エミルの笑顔は微妙に曇るが無理矢理笑顔で押し通しながら二人の名前を確認する。
二人の小さなハンターは、エミルの問い掛けに小さく頷いた。

「ほぉ……俺が推したからか、勧誘しに来たのか？」
「生憎却下されたわ。今日うちが二人に会いに来たんは個人的な事」

エミルはゾルフの隣の席に腰を掛け、すっと腕を前に組んで二人の小さなハンターを見つめる。
見た感じだけならまだまだ子供。
容姿がかなり整っているのと纏う防具が異常に高レベルな物でなけ

ればいたって普通と言える。

「ギルドナイトさんが何か俺達に用ですか？」
「んな構えんなや。言ったやろ、うちの個人的な事であんたら会いに来たんや」

スッと鋭い視線をエミルに向かって送り、無形だが圧倒的な圧力を放ちながらジンが訊いてくる。
本当にこんな子供から放たれる圧力か？　そう内心思いながらもエミルはそれを悟られない様に、いつも通りののんびりとした声で返す。
すると圧力が少しだが弱くなった。

「うちはあんたらに興味があんねん。どや、今から一緒になんか適当なクエストせぇへんか？　うちら三人で」

エミルの提案に二人だけでなくゾルフも驚いた様な顔をする。
ジンとシィは基本的に他のハンターとは組まない、というのが有名だ。
それにこの年齢で片やG級、片や上位クラスのしかも最上位。
もう少しでG級というレベルである。
ぶっちゃけエミルよりも実力は上だ。
自尊心の高いハンターは絶対にこんな提案をしない。
ギルドナイトの様なギルド直属のエリート達も普通はしない。
まさしく意外過ぎる誘いであった。

「あら、クエスト受けるの？　ならちょうど良いの入ってるけど、受ける？　あ、はいこれゾルフさん。卵掛けご飯」

片手でお盆を持ったライザがいきなり会話に割り込んできた。

いつもの事なので誰も驚かないが。
コトンとゾルフの前にお椀を置いて、当たり前の様にジンの隣に座った。

「……どうする？」
「う～ん、私はどっちでもいいよ」
「ギルドナイト様と一緒にクエストの受けれるなんて稀よ。受けちゃいなさい」
「まぁお前らの方が強いがな」
「……否定出来ひんのが悲しいな、うち」

話しの流れ的にはエミルと共に狩りに行く方向である。
が、ジンという少年はまだ眉間に皺を寄せて完全に納得した様には見えない。

「エミルさん、でしたよね？　貴女はギルドナイトですけど、俺達のやり方を黙って見てられますか？」
「……へぇ？　なんや変な事でもしとんのか？」

『俺達のやり方』と言うのなら何か特別な事、もしくは通常考えられない事をしているのだろう。
エミルはギルドナイトだ。
ハンターのハンターと呼ばれる職に就いているエミルにわざわざ訊いてくるという事は、非常に癖のある事をするのかもしれない。

「……変、とは思わない」
「まぁあれだ、こいつらの流儀ってやつだエミルさんよ」
「なら別に何しても構わへん。人の流儀に口出しする程うちは不粋やない」

ジンの頭をぐしゃっと掴み、荒っぽくゾルフが撫でながらエミルに言う。
流儀。
なら別に口出しは不要。
ハンターの数だけ何か違う物がある。
流儀、戦い方、思想。
ギルドナイトはあくまでも違法を取り締まる職だ。
法に触れてない限りは何もしない。
それにゾルフが大丈夫だと言うのなら問題は無いだろう。

「ほな決定で構へんか？　うちとあんたら二人でクエスト受けるで？」
「俺は構わないです」
「私もジンがいいならいいです」

エミルの問い掛けに二人が頷く。
するとライザが待ってましたと言わんばかりに立ち上がり、いきなり口を開いて喋り始める。

「さっきもちょこっと言ったけど、ちょうど良いクエストがあるの。クエストレベルは上位、討伐対象は鎧竜グラビモス、場所はラティオ活火山よ」

バァンとテーブルに掌を叩き付け、どうだと言わんばかりに胸を張りながらライザがドドンと言う。
ジンとシィは慣れた様子でライザを眺め、あまりライザと親交が無かったゾルフとエミルはいきなり過ぎてどぎまぎする。

「……って、グラビモス！？　しかも上位！？　ちょっ、あんた、無茶言うなや！　なんぼなんでも難易度高過ぎるわ！」

叫ぶエミル。
いくらなんでもレベルが高いと。
　鎧竜グラビモス。
火山の重鎮と呼ばれる生態系上位に君臨する巨大な飛竜の一種である。
飛竜とは名ばかりで飛行は苦手。二本の足で堂々と巨体を揺らしながら歩く。
動きは緩慢だが一撃一撃が重く、いくらハンターは鍛えようが所詮人間。
一撃で昇天という可能性も大いにある強力なモンスター。
鎧竜と呼ばれる通り、体を強固な甲殻で身を包み、生半可な武器じゃ無意味。
エミルが叫ぶのは当然の事だろう。
　そもそも下位のグラビモスならともかく、今回ライザが言ってきたのは上位。
エミルはまだ片手の指で数える程しか討伐経験もなく、しかもその数少ない経験も信頼出来る仲間と勝ち取った物だ。
思い付きで作ったチーム、いくら稀代の天才ハンター二人がいても心許ない。
それぐらい強大な相手なのだ。

「……って、なんであんたらは普通にお茶飲んどんねん!?　驚かへんのか!?」
「……まぁ、ライザさんがあんなテンションで勧めてくるクエストはこんなんですよ」
「グラビモス久々だね～」
「落ち着けエミルさん。こいつらと一緒ならグラビモスなんて瞬殺だ」
「エミルちゃんは知らないからね、この二人の実力」

一人だけ騒いでいたエミルが全力で突っ込むと、思いもよらない答えが返ってくる。
ジンとシィのはまだいい。
問題はゾルフとライザの発言だ。
まず上位のグラビモスが瞬殺なんてあり得ない。
そんなの出来たら人ではない、何か別のモンスターだ。
それにライザが言う、二人の実力。
十三歳でG級に上り詰めたジンや、同じようにG級とはいかなくても上位の最高位まで行っているシィの実力はギルドナイトの職業柄嫌でも耳にした。
化け物レベルとは聞くが、まだ二人は十四歳だ。
いくらなんでもグラビモス相手に余裕とか言ってられるものじゃないだろう。
そんなハンター、この大陸中を探し回っても多分見つからない。

「おいおいこの二人を見くびるなよ？　化け物レベルなんて噂は全然生温い、まさしく王だ。お前も昨日自分で言ったろ？　空前絶後の天才ハンターってな」
「そうよエミルちゃん。この子達二人は表では『非公式』とされて隠されてるけど、信じられない様な記録ばかり持ってるの。それこそ貴女の想像を絶するわ」
「……なんやエライもんと関わり持ってもたか？」

目の前でのんびりとお茶を啜る子供二人。
見た目だけなら別段何も思わないが、ライザや灰狼がここまで言うなら何かある。
頭痛がしてきたエミル。
接点持たなかった方が良かったんじゃないかと。
ギルドナイトである自分も知らない『非公式の記録』。

ライザが知っているのは二人から聞いたからだろうか？

「で、受ける？　止めとく？　私的には受けてほしいけど、エミルちゃんがどうしてもって言うなら……仕方ないわ」

「……その目はセコい、セコいでライザさん！」

男殺しの最終手段、涙。

ライザがすれば女性にも効く。

そして一番恐ろしいのが、それが演技なのは分かっているのにどうしても詰まってしまう事である。

畳み掛ける様にゾルフがあ～ぁと首を振る。

「俺、知らね」とエミルには見て取れる。

エミルが周りを見ると他の受付嬢からハンターまで、今酒場にいる人物全員じゃないのかと思うぐらいの人数から視線が集中している。

……これはもう、折れるしかない。

「……あぁもう！　分かった、受注させていただきます！　これでえぇか！？」

「うん、バッチリ♪」

こっちが泣きたいぐらいよと、エミルがテーブルを叩き付けながら受注すると叫ぶ。

するとライザは表情を一変させ、ニコニコしながらこのクエスト受注決定～、と仲間であろう受付嬢達に契約書を見せつけた。

さっきまでの涙目はどこえやら、涙の跡なんて勿論無い。

エミルは心の底で固く誓う。

この人に逆らってはいけないと。

「やったね～ジン、シィちゃん、ギルドナイト様とクエストよ～」

「……わぁ～い？」

「シィ、お前あんまり理解してないだろ？」

ライザが良かったわね～とシィの頭を抱え、頬っぺたをこねくり回す。

シィは取り敢えずその場のノリで万歳しながら喜ぶが、ジンに突っ込まれてしまい喜ぶのを止めた。

「ギルドナイトって凄いの？」

「知らねぇよ。でもまぁ、凄いんじゃないのか？　ゾルフさん知ってます？」

「さぁな。ずっと勧誘蹴ってる割には何も知らん」

「……」

「あらら……エミルちゃん面目丸潰れね」

ギルドナイトと聞けば普通のハンターならその実力と、何よりハンターのハンターと呼ばれる為に姿勢を正して「お勤めご苦労様です！」と媚びを売ったり恐れたり、とにもかくにも何かしら面白いリアクションをしてくれる。

少なくとも今までエミルは先輩達に対する一般のハンターの対応と自分自身の経験上そう思っていた。

ごく一部の猛者を除けばであるが。

だが残念、ここにいるハンターは良くも悪くも普通じゃない。

ギルドナイトの勧誘を蹴り続けて早八年のゾルフと『空前絶後』と大長老に呼ばれる二人だ。

ギルドナイトの威光など、彼らにとっては光蟲一匹にも満たない物である。

「……アハハ、何もかもがぶっ飛んどぉわ」

「勘弁してね、ゾルフさんはともかくこの子達はまだギルドの事よく知らないの」

「おいおい、俺は無知か？」

乾いた笑いしか出てこないエミルに、一応ギルドナイトと同じくギルド本部直属である受付嬢をしているライザがフォローを入れる。が、ゾルフだけ扱いは悪かった。

その点をゾルフが指摘するとライザは自分を勧誘してくれる組織の事が知っといて下さいとバッサリ切り捨てる。

これには流石のゾルフも黙るしかなかった。

「それじゃあ三人は準備してきてね。私は仕事に戻るから。待ってるわよ～」

ライザがサッと立ち上がり、そう告げて受付のカウンターの方へ走っていく。

この言葉がきっかけでジンとシィも準備に行くと席を立ち、また、エミルも勿論準備の為に席を離れる。

一人ポツンと残されたゾルフは、静かに紅茶を啜りながら、心の底で少しだけギルドナイトについて調べようと決意した。

およそ一時間後の酒場である。

手早く、しかし相手が相手なので相当な狩りの準備を済ませたエミルが酒場に行くと、既にジンとシィは先程の席に座ってゾルフと何かを話していた。

早過ぎるんじゃないのか？

エミルは二人を見て思う。

ハンターの狩りは命懸けだ。

準備は入念に、しかし手早く済ませるのが基本である。

ジンとシィはこれがちゃんと出来ているのか？

いや、空前絶後の天才ハンターと呼ばれる二人だ。
準備も天才かもしれない。
……だが、やっぱり早すぎる。
見た感じ先程と何も変わっていないし。
全てのアイテムをポーチに入れているからと言えばそれまでだが、
ポーチに入る量には限度がある。
事実エミルはポーチに入らなかった分や大きさ的に無理な物は既に
移動用の竜車に詰め込み済みだ。
その際やっぱり現れたライザ曰く、二人は何も竜車には入れていな
いらしい。
……大丈夫なのか？

「そういえばお前らより少し年下のハンター志望の奴らにお前らの
事話してみたぞ。同い年ぐらいの奴らがリオレウス倒してるってな。
そしたらライバル心メラメラ」
「ゾルフさんの故郷の人ですか？　っていうか俺達ゾルフさんの故
郷知らないんですけど。最近ライザさんにドンドルマのハンターじ
ゃないって聞いて驚いたのに」
「秘密だ。自分達で俺を発見しろ」

他愛も無い世間話。
とても今から強大な飛竜を狩りに行くとは思えない。
準備の件も含め、段々受注した事を後悔し始めるエミル。

「おっ、エミルさんじゃないか。準備は済んだのか？」
「……まぁ一応。二人は大丈夫なんか？」
「問題ありません」
「バッチリだよ～」

頭を抱えながら席に近付くエミルにゾルフが気付いた。

こっちを向いた二人に向かってエミルは準備は大丈夫かと訊いてみたが、なんとも微妙な答えが返ってきた。
ハァ、と既に疲労感が漂うエミル。
どうかこのクエストが人生最後の物になりません様に。
エミルはただそう祈る。
二人が天才だろうがなんだろうが、この心許なさは拭えないのだ。

「全員集合ね、それじゃあ見送りとしましょうか」
「今のうちにエミルさんの姿焼き付けとかないとな。次会う時は炭かもしれん」
「……縁起悪い事言わんといて下さいゾルフさん。うち、結構不安なんですよ？」
「冗談だ。心配するな、お前の予想よりも遥かに早く決着（ケリ）は着く」

いつの間にかエミルの後ろに立っていたライザがニコニコしながら言う。
ゾルフもそれを聞いて立ち上がり、中々心臓に悪い一撃を見舞ってくれた。
冗談だと言うが、エミルにはあまり通じない。
無理もない。
ギルドナイトとはいえまだ新米のエミル。
ハンターとしても若手とは言わないが、中堅とも言えない微妙な位置。
そんな彼女にとってグラビモスの上位クエストは荷が重い。
チームを組むハンターも未知数だ。
前評判を信頼するのは決して賢い事ではないし、ゾルフの冗談を笑い飛ばす力は残念ながら無いのである。

「は～い、じゃあ行ってらっしゃい！　ちゃんと生きて帰って来てね」

「……胃がいとーてしゃあない」

ライザが笑顔でエミルに追い討ちを掛ける。
無論確信犯だ。
……もし回復薬に胃薬としての効果があれば、エミルは火山に着く前に回復薬を全て消費しているかもしれない。
竜車はなだらかに揺れて走り出しているが、エミルの気分は前に進めないのであった。

竜車に揺られ、そこから船に乗り換えて三日。
そこにラティオ活火山はある。
ハンター達からは火山と素晴らしい程そのまんま、適当に呼ばれている狩場である。
地表から出る灼熱の蒸気、向こうの方に見える洞窟からも熱気が溢れ、一見生物が生きていくには不向きかと思われるがなんだかんだでいっぱいいる、そんな場所。
だが少なくとも人間とは縁も所縁も無い場所っぽい。
暑いしマグマは見てて怖いし赤いし。
なのに何故わざわざハンターが赴いて狩りを行うのか？
理由は簡単、商業的価値の高い鉱石の宝庫だからである。
火山で取れる鉱石無くして人類の発展は不可能。
故にわざわざ行くのだ。
勿論暑さ対策の為にクーラードリンクと呼ばれる物を飲み、体への負荷は減らしてから。

飲まなければ数時間で死ぬだろう。
　そんな灼熱地獄、火山。
その中腹にある、溶岩の池がど真ん中に広がる広場。
そこにエミル達はいた。

「……化け物（もん）や」

　エミルの目の前には白く、ゴツくて巨大な飛竜。
鎧竜グラビモスがいる。
火山の重鎮と呼ばれ、非常に強力なモンスターだ。
……だがしかし、今その鎧竜と呼ばれる由縁である強固な白い甲殻の大部分は弾け、切れ目や皹が走り、砕け散っている。
特に腹はもう甲殻の『こ』の字も無い。
その腹を覆っていたであろう鎧は全て砕け、中から柔らかい肉が丸見えだ。
しかもその肉は切り裂かれ、射抜かれ、ボロボロで血が滝の様に流れる。
長大な尻尾も断ち切られ、広場の端にドスンとギザギザな尻尾の先が打ち捨てられていた。

「……んなアホな。子供扱いかい、グラビモスを」

　エミルとグラビモスの間に立つのは、銀色の防具を纏った少年と、桜色の防具に身を包んだ少女。
少年は片手で巨大な盾を握り、もう片方の手で銀の槍の様な、しかし砲撃用の引金の付いた武器、ガンランスを持っている。
その目はグラビモスを鋭く射抜き、真っ正面から向かう姿勢をギラギラと見せ付けそそり立つ。
少女は特徴的な形をした琴の弓を持ち、鼻唄を歌いながら少年の隣で同じくグラビモスを見つめている。

「……そろそろ終わりだな」
「だね～」

ボロボロで満身創痍なグラビモスを見つめ、少年――ジンがポツリと呟く。
すると隣の少女――シィもうんと頷き、弓を背中に戻し、踵を返してエミルの方へやって来る。

「ゴオォォォッ！」

シィがエミルの方へ足を向けた瞬間、立つのも苦しそうなグラビモスが雄叫びを上げながらジンに向かって突進を開始する。
巨大な体の一歩は勿論大きい。
みるみる間合いを詰めていく。
だが、ジンはそれをのんびりと見ているのみ。
避けるは無さそうだ。

「アホ……！　なんで躱そうと走らへんねん！？」
「まぁまぁ大丈夫ですよエミリさん」
「うちはエミルやわ！」

全く動く気配の無いジンに向かってエミルは叫ぶ。
が、ちょうどやって来たシィが落ち着いてと手を上下に動かす。
ジンは大丈夫だからと。
グラビモスが一歩、また一歩と間合いを詰めてくるなか、ジンの体勢にも少しの変化が現れた。
槍の穂先が地面と水平になる様に構え、なんとグラビモスを迎え撃つ気だ。
重量もパワーも何かも、たとえ相手に相当なダメージがあっても違

うのに。

「あいつ何しとんねん！？」

「何って、止めだよ～」

ヘルムの下に隠れているが、ジンの目がカッと開いた。

迫り来る巨体に向かって渾身の力を乗せた穂先を突き出す。

その切っ先は迫るグラビモスの頭殻を砕き、轟音が響く。

「……なっ……ぁっ！？」

「ほら～、言ったじゃん大丈夫だって」

ジンが槍を突き出しグラビモスの頭を砕いた瞬間、ビクンと走っていたグラビモスの体が止まり、ジンの目の前で倒れた。

正面から力で押し勝ったと言うのか？

エミルは今起きたその信じがたい光景に目を見張る。

そんなエミルを他所に、ジンは砕けたグラビモスの巨大な頭の前で手を合わせ、合掌した。

「……何しとんねん？」

「私達の流儀、ゾルフさんとライザさんが言ってましたよね～」

不思議そうにその合掌を見つめるエミルにシィはそう言い残し、自分もまたグラビモスの前で合掌をし始めた。

エミルは悟る。

そういえばギルドナイトやギルドの上役にはモンスターを絶対的な『悪』とみなす者もいる。

エミルに自分達の流儀に口出しするかどうかを聞いたのはその為だろう。

そこまで過激ではなくとも、まさか自分が殺めたモンスターを弔う

ハンターが何処にいる？
たまにいるとは聞くが、極々少数だ。
そしてこれこそがこの空前絶後、稀代の天才ハンターが二人がチームを組まない理由であるとも悟った。
モンスターを倒して優越感に浸るハンター達とはソリが合わないのだろう。
エミルはゆっくりグラビモスの前まで歩き、自分もまた手を合わせる。
目の端で二人の驚く表情が見えた。

「……と、まぁこんなもんか。あいつらとのエピソードは本にして売れるぐらいいっぱいあるさかい、結構はしょったけど、うちとあの二人の出会いとこういう仲になった経緯はこんなんやねん」
「……ゾルフさんも微妙に絡んでたんですね」

懐かしそうな感じで話すエミルにマイルズが言う。
ジンはゾルフと知り合いだった様には今まで振る舞っていなかったので気が付かなかったが、実はかなり深い関係があるようだ。
……そういえば昔、ゾルフから自分と近い年齢で凄い奴がいると聞いた事があったか。

「灰狼か？　そりゃあの二人について話すなら灰狼とライザさんは

外せへんで」
「……ちょっと意外だよね。ゾルフさんってあんまり交友が広いわけじゃなかったし」

ゾルフは名の知れたハンターだったが、ギルドナイトの勧誘を蹴っていたのを筆頭に他の有名なハンターとは殆ど親交を持ってはいなかった。
ジャンやサラの様な優秀なハンターが側にいたのも理由にあるが、基本的にゾルフはこの街出身のハンターとしか組まないからだ。
昔自分の技術を後輩に伝える為だとティリアがこっそり話してくれた。

「まぁそうやろな。ドンドルマにも基本一人で来とったし」
「私達が養成所の学生時代に何度か会いに来てくれた事もありましたからね」
「あったな……そんな事。大物が来るって騒ぎになった事もある」

灰狼の勇名は学生にも知れ渡っている。
ハンターを目指し日々努力している学生にとってそんな大物が来るとなればてんやわんやの大騒ぎになってしまうのだ。
かつての出来事を思い出し、苦笑いするマイルズである。

「んでもって、たまにあの二人とも会ってたって事やな。もっとも……最近は全然会えてなかったみたいやけど。皮肉なもんや、せっかく久々に会ったというのにそれが無言の再会やとはなぁ。弔合戦をあの二人はせぇへんねんけど、無意識に力は入っとったっぽい。なんせ首飛ばしとる」
「……最初に会った時、合掌したのはそのせいでしょうね。急いでるのにわざわざ手を合わせてましたから」

あの時、合掌を終えた後、二人の動きは急に変わった。
ロットの道案内とその速度に合わせて移動していたのに、いきなり『呼吸』を使って信じられない速さで移動。
勿論マイルズがまだ戦っていると聞いたのも理由の一つだろうが、ゾルフの事も絡んでいる気もする。

「……まぁもういくら語っても灰狼は戻ってけぇへん。英雄碑に名は刻むけどな」
「英雄碑？」

エミルがバッサリと思い出話を終了させて、マイルズとリリスには聞き慣れない単語を言う。
首を傾げる二人を見て、エミルは知らへんのか、とこちらもまた首を傾げた。

「ヴィルマの街長の人が言うとったで、中央広場に今回殉職したハンター達の追悼碑を作るって。街を守った英雄達の鎮魂を願うもんや。因みにヴィルマのメインストリート、まぁ今はただの瓦礫だらけの道やけど、その道の名前が『灰狼通り』になるらしい」
「そうなんですか……」
「じゃあイズミとスネークも刻まれるね」

追悼碑。
大災害が発生した場所に作られる一種のモニュメント。
殉職したハンター達の名前を刻み、鎮魂を願う慰霊碑の一種とも言える。
中央広場とは現在テントが立ち並び、炎王龍が仕止められ、ゾルフが雄々しく散った場所。
そうなんですかと二人は呟き、やはり仲間達は死んだのだと再確認する。

……気分が下降するのは不可抗力だ。

「湿気た顔しよって！　あんたらは死んだ仲間の分も生きて、強ならなアカンねん。もう一つジンとシィの事教えたる。大長老様しか呼ばん呼び名がある言うたやろ。それは『止まらぬ者』や。その意味、しかと考えぇ」

気分が落ちるのは仕方ない。

仕方ないが、それで割り切ってはいけない。

エミルは二人に発破を掛けて、スタッと軽やかに立ち上がって街の中央の方へと行ってしまった。

マイルズとリリスの二人は顔を見合せ、今エミルの言った事を考える。

「……『止まらぬ者』の意味って言われても、そのまんまじゃねぇのか？」

「でも何が止まらないの？」

『止まらぬ者』。

意味は何となく分かる。

要するに止まらないんだ。

では何が止まらない？

二人は考える。

確実に今までエミルが語ってくれた話にヒントはある筈だ。

必死に考え、思考を回す。

「……あ、分かったかも……」

「うぉっ！？　早いな！？」

ピンと物思いに耽って下げていた頭をリリスが上げる。

意外に早かったからか、隣で同じく考え込んでたマイルズは驚いてビクッとしてしまった。

「今までの話じゃないよ、一番最初にエミルさんは答えを言ってたんだと思う」

「……何だ？」

「最初、エミルさんは話を切り出す前にあの二人は途方もない夢に向かって走ってるって言った。だから多分、止まらないっていうのはその夢に向かう姿勢じゃないのかな？」

途方もない夢を目指して突っ走っとるねん。

エミルは確かにそう言った。

あぁと頷くマイルズ。

だが、再び首を傾げる。

「……二人の夢ってなんだ？」

「……知らないよ」

翌日。

天気は生憎の雨。

どしゃ降りというわけではないが、鬱陶しくパラパラと小雨が地面を湿らしていく。

そんなパラつく小雨の中を何人かがいくつかの大きな黒い箱を運んでくる。
向かう先は広場の中心。
そこには徹夜で掘られた大きな穴があり、その周りに住民全員が集結しているのだ。

「喪服じゃない葬式とは、なんか違う気がするぞエミル」
「……うっさいな、全員分の喪服なんて用意出来ひん。それにこない死者が出るんも想定外や」

葬式。
そう、これは葬式だ。
炎王龍に命を懸けて挑んで散った、英雄達への別れの儀式。
街の住民達は皆、家を燃やされ服など大して持っていない。数十着程支援として持ってはきたが足りる筈もなく、ましてや黒一色の喪服などある筈もない。
個々に華美な服装はせず、落ち着いた感じの服を着て、なんとかそれっぽい雰囲気にしているのだ。

「しかも雨だ。天も泣いている……とでも言うべきか？」
「知るかいな。うちは神やない」

エミルがサラリとそう言って前方を見る。
黒い柩（ひつぎ）を街の男達が運んで来たのだ。
その先導をしているのは、花束を抱えたティリア。
横には中身が無く、スカスカになった袖を揺らしながら歩くジャンもいる。
ヴェンやマイルズ達は既に人混みの中に混じり、その様子をただ見つめる。
ジンとシィの姿は見えない。

が、どこからか何かの旋律が響いてきた。

「……鎮魂歌（レクイエム）か」

「横笛……ジンやな」

高く澄んだ音色がどこからともなく響いてくる。

ヴィルマの者達は何事かと辺りをキョロキョロして見るが、近くには誰もいない。

ギルドナイトのヨナもまた、不思議な音色を聞いて首を左右に動かしていた。

「……あの、これは？」

「ジンの横笛や。東方に伝わる楽器の一つ、武器やないで？」

「その音色、唯一無二なり。大長老様がそんな事を仰っていたか」

ジンの横笛。

使っている物は大した物ではない。

東方に行けば子供の小遣いでも買える程度の安物だ。

だがジンはハンター業だけでなく、何事においても非凡であった。

驚く程澄んだ音色を安物の横笛から響かせる。

奏でるは鎮魂歌。

死者に安息を願う曲。

するとシィの歌声もどこからか響いてきた。

東方の古い言葉なので何を言っているのかは分からない。

だが、不思議と心の静まる物。

「……追悼にしては洒落過ぎや」

「そうか？　いいじゃないか、本当に死んだハンター達の心が安らぎそうでな」

柩は五つしかない。
元々原型をとどめていた死体はゾルフとイズミの二人しかいなかった。
エミル達ギルドナイトは『人の炭』らしき物一つ一つを吟味し、そこに微かに残る防具の素材などからどうにかこうにかサラとスネーク、そしてテラの遺体を発見、柩にはその炭になってしまった亡骸がある。
他にも散ったハンター達はいるが、その者達は皆、粉塵爆発に巻き込まれ塵になった。
柩に入れる物が無い。
故に、名前だけ刻む事にした。
五つの柩が一つずつ、掘られた穴に置かれていく。
全てが置かれると上から土が被されていき、仮の慰霊碑が設置された。
ヴィルマの復興がもう少し進み次第、もっとしっかりとした物にするらしい。
そしてその場にいる全員が、静かに手を合わせて冥福を祈る。
……鎮魂歌と歌声が、いつの間にか雨の中に溶けて消えていた。

一日中パラパラと降っていた雨が、夜になって漸く止む。
雨を降らすのを止めた黒い雲の隙間から金の月が顔を覗かせ、広場に立ち並ぶテントと仮の慰霊碑を照らし出す。
慰霊碑の前に、二人の人影があった。

「……なんだ、葬式では見なかったがやっぱりお前達も墓参りか？
ゾルフから少しだが話しは聞いていたが、まさか本当に知り合い

だったとはな」

慰霊碑の前に立ち、静かにそこに刻まれた名前を見ていた二人に声が掛かる。
ユラユラと袖を揺らしたジャンだ。
この戦いで両の腕を無くしたが、それでも生き延びた、灰狼ゾルフの親友。

「随分と遅い顔出しじゃないのか？　ゾルフが怒るぞ？」

葬式にいなかった事を軽く弄りながら、ジャンが笑う。
勿論ゾルフはこの程度の事では怒らないだろうが、ジョークの一種で言ってみたのだ。

「……俺達部外者は遠目からしか参加する権利がないんですよ」
「権利の有無なんて無い。ゾルフの友人として、仇を討ってくれた者として参加してほしかったよ。……あの鎮魂歌だけじゃあゾルフは満足しないぞ？」

あの鎮魂歌の正体はエミルがあっさり街の住民達にぶちまけた。
ついでにジンとシィがゾルフと旧知の仲という事もだ。
鎮魂歌という言葉を聞いて、ジンはあぁと苦笑いを浮かべる。

「鎮魂歌（レクイエム）なんて大した物じゃありません。あれはどちらかというと子守唄（ララバイ）に近い物です。後、ゾルフさんは俺達にとって友人ではなく『憧れ』です」
「曲の種類はなんでもいいさ、葬式に花を添えてくれたのには変わり無い。憧れ……へぇ、あいつも出世したもんだ、千手と月光の憧れとはな」

月の淡い光を受けて、うっすらと光る慰霊碑。
その前に立つ二人の顔は少し憂いを帯びて、だがしかし悲しみ一色ではない物静かな表情。
忍び悲しむ感じと言おうか。
ジャンが出世したなと笑う。
その笑い声の方がよっぽど寂しさを感じさせる。
虚しい響き。
いくら願おうともう帰っては来ないのに、心の底の無意識でそう願っている様な。
無理矢理笑っているのかもしれない。

「……俺達がゾルフさんに出会ったのはドンドルマに上京した直後、およそ九年前です」
「へぇ……という事はあいつは君達の上京後の歴史の大体を知ってるって事か。親友として誇らしいよ」

千手も月光も有名な割には具体的なエピソードが広がってはいない。
何を倒し、何の記録を塗り替えたか。
それはあくまでも噂であり信憑性は低いのだ。
勝手にその噂に手が付き足が付き、それはおかしいだろと突っ込むべき物まである。
だがゾルフは数少ないこの二人の真実を知っていた者になる。
それは親友として誇らしい。
自分の親友は、こんな素晴らしいハンターと友だったのだと。

「おだてても何も出ませんよ？」
「そんなんじゃねぇ、本心だ」

照れ臭そうに笑いながらジンが言う。

自分の憧れであるハンターの親友が自分達を誇らしく思ってくれるのは、少し心がくすぐったいのだ。

「ゾルフさんはよく自分の『夢』について語ってくれました。……ジャンさん、炎王龍がここに来る前のヴィルマは九年前と比べて大きくなりましたか？」

「……なったさ。九年前よりもずっと大きく、豊かにな。今もそうだ、街はこんなんでも住民は皆諦めていない。あいつのお陰さ」

ジャンはテントの立ち並ぶ辺りを見回しながら、両手を広げてジンに答える。

ジャンの頬に、つうと涙が伝っていく。

「あいつの夢は俺達が引き継ぐ。いつか、叶えてみせるさ」

「……そうですか。それはいい」

ジャンが涙を流しながらも力強く言う。

ジンは静かに笑い、ここに来て一番の、本心からの笑顔を見せる。

シィもまた可愛く笑う。

雲の隙間から覗いていた月は、気が付けばしっかりと夜空の中央で光っていた。

ティリアは月明かりが射し込み、うっすらと明るいテントの中で静かにある一点を見つめていた。

視線の先の一点。
小さな机、いや、台と呼ぶ方が相応しいか。
ともかくその台の上にあるのは一丁のライトボウガン。
自分の相棒として幾つもの死線を潜り抜けてきた一品だ。
……そして、間接的にだがゾルフの死因にもなった物。

「……」

静かにティリアはそれを見つめる。
自分の相棒であるのは事実。
だが今の彼女の精神状態だとその相棒も負の部分しか見えず、悪魔に変わる。
葬式を行ったのは良かった。
個人的にもしたかった。
英雄と讃えられ、語り継がれるであろう灰狼の歩みを見るのは誇らしく思う。
しかし葬式のせいでゾルフとの思い出がどんどんと溢れ返ってきたのも事実だ。
最初は近所の頼れる『大好きなお兄ちゃん』だった。
だがいつしかその『大好きなお兄ちゃん』は『大好きな人』に変わっていた。
一人の男性として本当に好きだった。
親に怒られたり喧嘩したりすると決まってゾルフのところへ行った。
嬉しい時も、悲しい時も、寂しく辛い時も幸せな時も。
ずっと側にいたし、これからもずっと側にいたかった。
なのに自分の失態でその『大好きな人』はいなくなってしまった。
イーオスが攻めて来たという聞いた時に咄嗟にこれを掴んだ。
が、その瞬間脳裏に血塗れのゾルフの姿が思い浮かび、パッと放して怖くなり動けなくなってしまった。
……ゾルフの、『大好きな人』の夢を継ぐと決めたのに、これを握

るのが怖い。
また何か失うのが怖い。
怖くて、自分が憎らしくて、しかしゾルフに会いたい。
昔みたいに頭を撫でてほしいし、名前を呼んでほしい。
頭の中がぐちゃぐちゃになり、何をどうすればいいのか分からなくなる。
一人月明かりに照らされながら踞る。
夜が長い。

「……起きとぉな？　お邪魔すんで」

テントの中で一人踞るティリアに声が掛かる。
独特の訛り。
ギルドナイトのエミルだ。
チラッとティリアが横目で見ると、月明かりに照らされ淡く光る赤いギルドナイトの衣装をいつも通り身に付けていた。

「……どうしたんですか？」

消え入りそうな小さな声でティリアは問い掛ける。
別段このエミルとは繋がりも無いし、接点も無い。
何故こんな夜中に自分を訪れたのか不思議なのだ。

「葬式ん時の顔、死んどったから心配でなぁ」

消え入りそうなティリアの声にしっかりとエミルは答えて笑う。
ティリアはそんなに自分の顔に気持ちが出ていたか疑問に思いながらも、一応大丈夫ですと言って誤魔化す。
だがエミルはギルドナイトだ。
ハンターとしての実力は高く、その実力と共に上がる観察力も伊達

ではない。
嘘言えとあっさり切り捨てた。

「……ゾルフさんの事やろう？　気に病むなとは言わへん、うちがあんたの状況なら間違いなく萎えとるし病んどるさかいな」
「……」

この場合、無言は肯定と受け取られる物である。
黙ったままのティリアを見てエミルは更に口を開く。

「せやけど一度言うたよな？　いや、言わんかったか？　……まぁええぇ、ともかく今この街で最強のハンターはあんたや。あんたがはよ復活せな街には絶対的な信頼を寄せれるハンターがおらへんねん」

テントの入口付近で仁王立ちをしながらエミルは言う。
その言葉は、スッとティリアの心の底に入ってくる物ばかりだ。

「ゾルフさんの愛した街を守るんはあんたの役目や。ギルドナイト《うちら》もジンとシィもまた他のクエスト受注命令が来るかもしれんやろ？」
「私の……役目……」

ゾルフの愛したこのヴィルマという街を守らなければ、本当にマズイ。
それこそ天国にいるであろうゾルフになんて顔で会ったらいいのか分からない。哀しさが溢れていた目に少しだが再び輝きが戻る。
責任感の強いティリアにとって、確かにこのゾルフの愛した街を、故郷を潰したままにしとくのは嫌だから。

「……止まったアカン、うちらは進まなアカンねん。人は止まった

時点で成長は終わりや、勿論いつかはその成長は止まってまうけどな。やけどあんたはまだ見込みある、ここで止まって自分から進むんを止めるのは絶対にアカン」

静かにそう言うエミルだが、語気とは裏腹に目は強く、鋭く輝いている。

ここで腐ったら許さない、そんな目だ。

一体何が彼女にそう言わせるのかは分からない。

分からないが言っている事は正しいし、ティリアはただ頷く。

「何か失うんは怖い事や。うちも、ジンもシィも恐れとぉ。せやけどただ怖がって何もせんのはちょっと違うやろ？　あんたはシィにゾルフさんの夢を継ぐって言ったんやろ？　言葉には魂が隠る、男やなくても二言は出来ひん」

「……そうですね、一度シィちゃんの前で言ったんです。前向いて歩かないとダメですよね」

エミルの言葉にティリアは再び頷き答える。

今度は先程よりも力の隠った声であった。

その声に満足したのかエミルも頷き踵を返した。

そこに今度はティリアが声を掛けた。

「エミルさん、でしたよね。貴女は何故私にこんな励ましを？　いくら『あの式』で私が暗かったとはいえ、励ます義理は無かったでしょう？」

ピタリとエミルが止まる。

テントの入口である幕を片手で上げた状態で見事に止まり、顔だけティリアの方へ向けた。

「……うちには一つでっかい夢、やない、野望や、でっかい野望があんねん。それ達成するには手練れの仲間がめっちゃ沢山必要でなぁ。あんたにもいつかは協力してほしいし、今のうちに貸しと繋がり作らな損や。それにその仲間候補がここで腐ってもらったら困るさかい」

「野望……？」

ニヤリと笑って貸し一つ作ったでーとティリアに言う。

笑ってはいる。

笑ってはいるが、目は煌々と輝き、何かを狙う様に見える。

「何かは秘密。いずれ分かるで」

そう言い残し、エミルはテントから出て行った。

ティリアはただ、テントの中で不思議そうに首を傾げるしかなかった。

テントを出れば月明かりに優しく照らされた道とテントの群れがある。

その只中を歩きながら、エミルは一つの過去を思い出す。

『なんやねんこの面子（メンツ）は！？　相手は老山龍（ラオシャンロン）やで！？　殆どG級クラスがおらんやないか！』

あれからそろそろ二年が過ぎただろうか。

カルナスという街に老山龍という超弩級古龍が現れたのだ。

ギルドは急遽近場にいた実力派ハンターを召集、ドンドルマのギルド本部も本部にいたギルドナイトを筆頭とした手練れを多数送り込んだ。

事になっている。

『灰狼もおらん、ジンもおらん、シィもおらん！　他のG級クラスも全然おらん！　何が手練れを召集したや、見せ掛けもえぇとこやんけ！』

手練れを召集し、住民は皆避難させた。
ギルドは公にそう公表した。
事実住民は全員避難させられていたが、これは初歩も初歩、当たり前の事だ。
しかし手練れを召集は明らかにおかしい。
確かに剣聖ソードラントの様な名実ともに有名なハンター達もいるが、その殆どは中堅程度のハンター達しか集まっていない。
手練れが揃っているとはお世辞でも言えない物だ。
無論『手練れではない』ハンター達は老山龍を見た瞬間あっさり逃亡。
結局街は破壊され、復興作業は今尚続いている。
当時、厳密には今もだが、エミルはそのギルドの対応が許せなかった。
相手は超弩級の古龍。
あの程度の面子じゃ防ぎ切れないのは火を見るより明らか、潰れる街をギルドはただ黙認していた様にしか見えない。
ギルドナイトの特権をフル活用して上層部の対応を調べ上げたら更にムカつく物が出てきた。
古龍観測所による老山龍がカルナスに接近しているとの報告が上がったのは襲撃凡そ一週間と少し前。
ドンドルマを拠点に活動しているジンとシィなどは余裕で迎撃に向かわせれる日数である。
なのにギルドの上層部、間違いなく二人を良く思っていない者だろう、が老山龍接近を公表する前に二人に別のクエストを受注させてドンドルマから離れさせた。

同じように他のG級クラスのハンターも別クエストでカルナスから遠ざけた。
その後にやっと公表、近場及び『数名』の手練れを派遣。
そして最後は迎撃失敗。
エミルは上層部にこの事を突き付け大長老の前で抗議した。
が、その時上層部からの返答は『この対応は次世代を担うハンター達への経験の為。剣聖を筆頭にすれば迎撃可能と判断、クエストレベルも上位という事もあり、一つ可能性に懸けた。失敗は認めるが、決してカルナスを見捨てたわけではない』である。
誰がどう見ても言い訳にしか聞こえないが、これが上層部による多数決で決定してしまえばもう何も言えない。
結局抗議は意味無く終わった。
大長老と数名のみがエミルの抗議に納得して今後に活かすと言ってくれたが、他は沈黙を通した。
カルナスの住民への謝罪なんて勿論無い。
　故にエミルは誓ったのだ。
カルナスの二の舞を出さない為にも一部の老いて腐った上層部を潰すという事を。
かつては英雄だったかもしれない。
しかししょせんは『かつて』であり、過去だ。
時代は進み、思想も変わる。
そろそろ世代交代の時代なのだ。
エミルは自らが吟味したハンター達と共に、未だしっかりとした判断力を持つ大長老を筆頭とした新生ギルドに立て直すと誓いを立てた。
それがエミルの野望。
防げた災害を防げないギルドは信用出来ない。
ギルドナイトという職に就きながらもそんな野心を元に動いている。
シュリンとヨナはこれに賛同してくれているから現在共にここに来ているのだ。

特にシュリンはギルドナイトの中でも上役。
上のアホな決定に異を唱えても良い立場である。
今後はそのシュリンが上の見張り、エミルは仲間集めにに奔走する。
エミルはヴィルマのハンター達もこれに入ってもらいたいと思っている。
元々ゾルフやジャンの様なヴィルマの手練れには声を掛けるつもりであったし、予定を繰り上げて動いている。
全てはハンターが守るべき者達の為に。
月に照らされたエミルの顔は、大きな野望をどう実現させるかの策を考える、策士の顔になっていた。

「……壮大な計画の下準備、吟味は終わったんですか？」
「ジンとシィか。ホンマお前ら神出鬼没やな」

エミルがテントの只中を歩いていると、ふいに後ろから声が掛かる。
呆れた様に息をつき、振り返るとそこにはジンとシィが立ち並ぶテントにもたれながら立っていた。
テントは思わぬ横からの圧力でギシギシ音を立てるが、今はなんとか耐えている。

「さっきまでジャンさんと話ししてたんですよ。で、吟味は上手くいきましたか？」
「上々や。ここのハンターらは皆えぇ目しとるし、強い気持ちもあるさかい」

朱唇の片方を吊り上げながらエミルが言うと、ジンも笑う。
エミルの野望はジンもシィも知っているのだ。

「そいつはよかった。俺達としても俺達を煙たがるあの上役達は邪

魔でして、早々にエミルさん達に掃除して欲しいんですよ」
「いや～な目で私達の事見るんですよ～あの人達」
「利害は一致しとるんや、切札（ジョーカー）としてあんたらも一応その時が来ればよろしゅう頼むで」

エミルの答えに満足そうに笑いジンとシィが言う。
本当にこの二人は上層部と仲が悪いのだ。
エミルがその上層部を掃除すると言ったなら、嬉しくてたまらない。
そんな二人にエミルはしっかりと釘を刺す。
二人は分かっていますと笑い、もたれていたテントから背中を離す。

「もう夜が遅いので、俺達は寝ます。エミルさんもしっかり寝ないとせっかくの美貌が薄れて彼氏が出来ませんよ？」
「余計な世話や。うちの伴侶はこの太刀だけって今日決めた」
「今日だけなんですよね～」
「……うぐっ」

夜中だから静かに、しかしカラカラと楽しげに笑いながら二人が踵を返してテントの立ち並ぶ道の横へと消えた。
エミルもまた、そろそろ彼氏が出来る様に願いながら寝床へ向かうのである。

その翌日である。
ドンドルマからの支援部隊である竜車の集団がやって来て、本格的

な復興作業が始まった。
と言ってもまずは崩れに崩れた建物の瓦礫運びから始まるのだが。
街の住民達も協力して、えっさほいさと瓦礫を運び出す中、マイルズはジンを探していた。
広場では現在ジャンによる熱いハンターの心得という授業が行われており、元々の対象であるヴェン達三人は勿論、ハンターを目指す街の子供達まで集まってくる大盛況だ。
横でシュリンとエミルが色々な意味を含んだ笑みを浮かべているのが見えた。
小一時間探し回った末にやっとマイルズはジンを見つける。
街の外れにある炎王龍の骸の隣に座り、のんびりと本を読んでいた。

「……マイルズか。何か用か？」

マイルズの気配を察したのか、ジンはマイルズがまだ口を開けていないのにパッと顔を上げてマイルズを見た。
今まさに一言名前を呼ぼうとしていたマイルズは、口を開けようとした状態でピタリと止まり、なんとも言えない顔になってしまっている。

「質問があるんだ」
「……質問？」
「あんたの夢、についてだな」

なんとも言えない顔からしっかりとした真剣味のある表情に無理矢理切り換えながらマイルズが言う。
ジンは『夢』という単語にピクリと反応して、フッと笑う。

「俺の夢か？　馬鹿らしい物だが知りたいのか？」
「『止まらぬ者』。あんたは大長老様にそう呼ばれてるらしいな。

だからその止まらない原動力の夢を聞いてみたいんだ」

自分の夢を馬鹿らしいと一蹴しているが、かと言ってその夢を諦めている様には見えない。
ただマイルズにはそれを言うのが照れ臭く見える。
そんなにデカイ夢なのか？
それならマイルズ自身の『最強のハンターになる』という夢も馬鹿らしい程デカイ夢だが。

「……笑うなよ？」
「笑わねぇよ。俺だって馬鹿らしい程デカイ夢持ってる」
「『最強のハンター』か？」
「なんで知ってんだ！？」

本当に照れ臭そうに笑わないかと訊いてくるジンに、マイルズはどんと胸を張って答えると、ジンはあっさりマイルズのそのデカイ夢を言い当てた。
何故だと問い詰めたら、どうやら昔ゾルフから聞いていたらしい。
……案外ゾルフはお喋りだったのか、意外な事実にうなだれる。

「俺の夢なぁ……天国にまで届くぐらいのすげぇハンターになる事だ」
「……は？」

最強のハンターよりも更にぶっ飛んだ夢をジンが暴露する。
あまりの事にマイルズは一瞬目をぱちくりとさせ、ジンを見つめる。
天国？

「どうせエミルさんから俺達の過去を聞いただろ？　なら知ってる筈だ、俺の父さんはもう死んでる。ゾルフさんも死んだ。だから俺

は天国にまで届く程有名になって、二人に俺達の成長を報告するんだ。いつも世話ばっか掛けさせてたからな、そしたら少しは上で安心出来るだろ？」

まるで子供の絵空事の様な事をあっさりと、至極真面目な顔で言ってのける。

本当にそうなろうと決意し、なれると信じて疑ってない目だ。

マイルズにはその目が眩しく見えた。

「俺やシィより強いハンターは片手の指より少ないそうだが、事実この大陸にいるらしい。先ずはそれを越える。それから先は誰も踏んだ事の無い未踏の領域を踏み込んで、最終的には天にまで名を轟かせる。それが俺の、シィの夢だ」

最初は照れ臭さそうにしていたが、今は堂々とそう言ってくる。

この二人ならやれそうだ、そう思わずにはいられない。

……が、それじゃマズイとマイルズはかぶりを振る。

「お前がそこまでいくなら、俺はもっと上までいってやる！」

「別に構わない。俺達は天まで届けばそれでいいからな。最強とか最高には興味無い」

マイルズがスネークと共に描いた最強のハンターになるという夢。

ジンとシィがその天まで届くハンターになるというのなら、マイルズはそれを越えないと最強にはなれない。

負けてたまるかと宣戦布告の様に言うと、意外にもあっさりとした答えが返ってきた。

最強や最高には興味が無いらしい。

こんなハンターも珍しい。

なんだか一気に冷めたマイルズである。

「凄いんだか何だかよく分からない夢だな、あんたの」
「一回てっぺん取ったら後はどうでもいい。先人の記録は越える為の壁だからな。レオレイアの最年少討伐記録、桜花姫のフィーリアちゃんに抜かれたし」
「……それは公式の記録だろ？　ギルド非公式のじゃない」

特に自分達の持つ記録に拘らない様子を見て、マイルズが呆れながら突っ込む。
少しはそれを誇りにしたらいいのにと。
何故ジンとシィ、二人の記録がギルドの『非公式』にされたか。
エミル曰く正式の記録にすると誰ももう越えられない物になり、若手のやる気が減りそうだからである。
事実その記録を聞いたマイルズとリリスはその異常な記録に目を点にした。
……その時はまだ俺達ハンターの養成所にすら入ってなかった、などと。

「まぁともかくお前はお前の夢に向かって進め。俺達はお前の夢の先で待っている」

そう言って読んでいた本をしまい、マイルズの前を歩く。
ちょうど大量のお菓子を持ったリリスとシィ、そしてヨナが目の前を横切ったところであった。

「……イズミにか」

マイルズは大量のお菓子を運ぶリリスを見ながら呟く。
イズミは大の甘党。
お供え物もやっぱり甘い物じゃないと怒るだろう。

リリスは彼女なりに前を向いて進み始めている。
ぐるぐるに巻かれた包帯を見ながらマイルズは今ジンの言った言葉を頭の中で反芻させる。
夢の先で待っている。
そしてある事に気が付いた。

「おい、ジン！」

マイルズがジンの名を呼ぶ。
夢の先で待っている。
それはジンが自分達の領域にマイルズが踏み込むと思っている、もしくは期待しているから出た言葉。
少なくとも見込みはあるから言った、と願う。
ならばここで一つ言い返さなければ。

「俺はお前を越える、覚えとけ！」

マイルズの言葉を聞いて、顔だけこちらを向けたジンがフッと笑う。
その顔は、じゃあ待ってるよとマイルズには受け取れた。

「……さぁて、帰るかシィ」
「そ～だね～。やっとお風呂に入れるよ～」

街の復興作業が進むなか、ジンとシィはリリスのイズミに送るお供え物の運搬を手伝った後、のんびりとそう言いながら最初に馬を止めた場所へと向かう。
が、急にエミルが現れた。

「どこ行くねん？」
「帰るんですよ、討伐したし、支援部隊も来ましたし」

ジンがエミルの問いに答えると、エミルは急にクックと笑いだした。
不思議そうに首を傾げる二人にエミルは一枚の紙をバァンと見せ付ける。

「これ、あんたらの契約書や。下の方よう見てみぃ」
「……『討伐後復興作業を一ヶ月手伝うべし』……って、これ見るからにライザさんの手書きでしょう！？　無効でしょうこれは！？」
「残念、有効や。一ヶ月うちらと一緒に治安維持、街の復興作業の手伝い、その他諸々よろしゅう頼むでぇ～」

ニッコリと笑ってエミルが言う。
シィはうへぇ～と疲れた声を上げ、ジンは叫ぶ。

「……ライザさんの馬鹿野郎～！」

悲しい木霊が響く中、二人はエミルに引き摺られながら再び街の中心部へ連行されたのである。

復興作業の騒音が、メインストリート改め灰狼通りに響く。
それはこの場で散ったハンター達に街は元気だと伝える最高の鎮魂（レクイエム）

歌であった。

ＦＩＮＥ：　レクイエム奏でて（後書き）

最後は無理矢理感が否めない。
夜中夜中に神威です。
三話分を全部くっつけ、とにもかくにも完結。
三万越えたネ。
実は今作、まだ何かやらかすのですが、それはまた時が過ぎれば分かるでしょう。
結構凄い事やらかします。

サブタイの数字をスペイン語にしたのは、最後をＦＩＮＥにしたかったからという、変な野心から。
フィーネと読みます。
何か分かった人は毎度ありがとうございます。

それでは今作は一応完結しましたので、お別れです。
もしかしたらまた何か、上記意外の事をしでかすかもしれませんがね。
それでは。
感想などを送っていただければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0925k/

Mons†er Hun†er 2G Hun†er's requiem

2011年10月6日00時04分発行